

---

# 花炎異聞録

沙伊

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

花炎異聞録

### 【Nコード】

N8404P

### 【作者名】

沙伊

### 【あらすじ】

ツナ達の前に現れた男、虚刀流七代目当主、鑢七花。彼はいきなり謎の男達に囲まれていた。彼らが使う武器には、壊滅したはずの真庭忍軍の名が刻まれており、七花自身もツナ達の世界になぜ来たのか解らなかった。一方七花と共に旅をしていた否定姫の前にも、『あり得ない人物』が現れる……。決して交わるはずの無い二つの世界で、一体何が起きているのだろうか？

## 第一録 出会い（前書き）

リボーンと刀語のコラボ第一話です。

## 第一録 出会い

ヤスリシチカ  
鑢七花という男は、とにかく目立つ男だった。

まず背が高い。ただ高いのではなく、それこそ大男と言っていいほどのでかさなのだ。

長い腕や脚は細いが、かといって華奢ではない。

ちゃんと筋肉が付いており、それこそ戦うことに長けた身体だった。

それも当たり前で。

彼は戦うために身体を鍛え。

彼は戦うために戦うのだから。

そんな彼は今。

「……えつと。あんたら、誰だ？」

囲まれていた。

そもそも何でそんな状況におちいったかというと、それは七花も解らなかった。

混乱しているせいか、それとも頭でも打ったのか、前後の記憶がもやがかつているのだ。

ぼさぼさの総髪をかきながら、それでも現状は把握しようと七花は辺りを見渡した。

一言で言えば……ここは灰色だった。

地面は鼠色の、土より固い地面だ。何でできてるのか解らないが、とにかく七花の知らない材質でできていることは確かだった。

そして自分の背中に当たる堀も、白に近い色である。

一目で土壁でないことが解った。かといって、城の壁とも違う気がする。

そしてそれに囲まれている家は、七花の知らない形をしていた。色んなところを旅して色んなものを見てきたが、こんな建物は見たことない。

……いや、そんなことより。

「なあ……ここ、どこなんだ？」

とりあえず目の前の男達に尋ねてみた。

自分を囲んでいるのは十数人の黒衣の男である。

初めて見る顔で ついでに言うと、服装も初めて見るものだった。

そういえば左右田右衛門左衛門ソウダ エモンザエモンが着ていた洋装に近い形だ。

だが、それとも少し違う……気がする。

普通はもう少し考えるはずなのだが、七花はそこで考えるのをやめてしまった。

もともと考えるのが苦手なのである。

考えるのは 彼の役目ではなかった。

「あのさ。聞いている？」

「……」

呼びかけてみても、男達は何も言わなかった。

ただ黙ってこちらを見るのみである。

七花は困り顔になった。

知らない場所にほうり出され、知らない男達に取り囲まれ、七花でなくても戸惑うだろう。

しかしそんな困惑の思いも、男の一人が言った一言で吹っ飛んだ。

「虚刀『鑢』……」

「……!!」

七花は目を見開いた。

もし彼が、七花が当主をしている虚刀流の名を口にしたらなら、別段驚きはしなかったろう。

しかし彼らは言った。

虚刀『鑢』と

それは『完了形変体刀』としての、虚刀流の呼び方だった。それを普通の人間が知るはず無い。

なぜなら変体刀自体が、歴史に飲まれるはずの刀だからだ。

一般人が知ってるはずが無い！

「おまえら……一体……」

七花はのんきそうな顔を一転、厳しい顔にした。

この際ここがどこかなどどうでもいい。

彼らが何者なのか知らなければ！

しかしである。

それは先延ばしとなった。

「いつてえ！」

いきなり乱入してきた　　というかいきなり目の前に倒れ込んできた、一人の少年によって。

ツナ達が『それ』を見たのは、いつものように下校していた時のことである。

学校ではランボが乱入してきてそれをリボーンが肅正するという事件が起きたのだが、それはもはや日常である。特に取り立てて言うことでは無い。

だからその『異常』は。

言うなれば日常を壊す一つの波紋だった。

「……ん？ 何してんだ、あの人達」

最初に気付いたのは山本である。

ツナに話しかけていた獄寺、その獄寺の話に相づちを打っていたツナはすぐには気付かなかった。

しかし、なぜ今まで視界に入らなかったのだろぅというぐらい、それは目立ったことだった。

一人の男が、十数人の男に囲まれている。しかも双方、格好からしてただ者じゃなかった。

まず男達の方は黒いスーツを着ている。怪しい人間を絵に描いたような解りやすさで、彼らが一般人ではないことは早々に見抜けた。だが怪しさ　　というか目立ち度では、相對している一人の男の比ではなかった。

図体のかい男だった。おそらく二メートル前後はあるであろう体格だった。

そんな彼が羽織っているのは豪華絢爛な、十二単を二重に重ねたような着物である。その下の素肌には、幾つもの傷跡があった。

時代錯誤　　と言いたくなるような姿だった。時代遅れ、と言ってもいい。

しかしそれを『粹』と思わせてしまうような、男はそんな風に着物を着こなしていた。

「だ、誰だろぅ。あの人達……」

ツナは顔をひきつらせた。

正直双方共関わりたくない雰囲気をかもし出しているのだが。と　　いうか関わってはいけない。そんな気がした。

そのツナの危機感知能力は素晴らしいものだが　　あいにく関わらないという選択を許さない人物がいた。

「助けにいけ」

だからその声にツナがびくうつ、と震え上がったのも、無理の無いことである。

「リ、リボ　へぶっ」

ツナは青い顔で振り返ろうとして、頬を蹴られた　気がした。もしかしたらパンチだったかもしれないが、それはどうでもいい話である。

何にせよツナは、怪しい集団の間に割って入ってならぬ、割って倒れてしまった。

「いってー！」

そう言いながら頬を押さえ、地面に倒れ込む。そしてすぐさま上体を起こした。

（関わるどころかど真ん中来ちゃったー！）

そう思っても後の祭りである。

「ん……？　誰だ、おまえ」

上からののんきそうな声に、ツナは恐る恐る顔を上げた。目に映ったのは、図体のでかい男である。

近くで見ると、顔だけは普通の青年に見えた。ただ身体中の傷跡が彼を凶悪そうに見せていただけである。

その顔は多少困惑に染まっていたものの、現状を危険とは思ってなさそうだった。

むしろ面倒そうに　気だるそうに顔をしかめていた。

「あつ……えつとですね、ぼ、僕は通りすがりの学生でして」

自分でもわけの解らないことを言っていると思っている。事実男は「はあ？」とすっとんきょうな声を上げていた。

しかし、黒スーツにとってはツナは「通りすがりの学生」ではなかったようだ。

「ボンゴレ十代目か……」

「えっ」

ツナはパツと身体をひねり、男達を見上げた。



「な、何で……」

何でそのことを、と続けたかったが、声が出ない。

（この人達……やっぱりマフィア！？）

ツナが慌てて立ち上がろうとした時だった。

ドガ  
アア  
アア  
アア  
アア  
アア  
アア  
アア  
アア  
アア  
ン！

男達の足元が突然爆発した。

「大丈夫ツスか、十代目！」

ツナがそれに驚いていると、獄寺がダイナマイトを持って目の前に仁王立ちした。

「！ 貴様ボンゴレ嵐の守護者……！」

「いっちもいるぜ」

目を見開く男達の前に、刀を構えた山本が立ち塞がった。

放つのは、時雨蒼燕流  
攻式、八の型。

篠突く雨。

瞬間、飛ぶ男達の身体。峰打ちだろうから致命傷は無いだろうが、しばらくは動けないだろう。

いくら一般人とはいえ、肉体が常人より逸脱しているわけではな  
いだろうから。

残ったのは数人だけである。その顔には差異があるとはいえ、それぞれ苦渋の表情に満ちていた。

「えっ」と……

ここで声を上げたのは、豪華な着物を着た男である。

「あの二人、友達？」

「あ……はい」

自分に向けられた質問だと気付いたツナは、こくと頷いた。

「そつか……ふうん。俺よりずっと年下に見えるのに、それなりに強いな」

それなりに、という言葉にツナは眉をひそめた。しかしそれに対する言葉を紡ぐ前に、男達が動く。

「ふっ」

立っていた男達全員が何かを投げた。鉄の塊　否、鉄の武器を。星型、棒型と形はそれぞれ違うが　どれも手裏剣である。

それを獄寺と山本に投げた。

複数の攻撃を二人はいとも簡単に避けるが、しかしそれをして隙ができなかったわけではない。

「え、え、ええ!？」

その隙を突いて男が手を伸ばしてきた。

ツナにである。

「ボンゴリング……」

ほとんどうわ言のような呟きに、ツナは戦慄した。

男の手がツナの腕を掴む。振りほどこうにも普段のツナにはどうしようもない、それほど強い力だった。

しかし　男はまたもや邪魔されることになる。

獄寺にではなく。

山本にでもなく。

ツナのすぐ後ろにいた、奇異な格好の男に。

「虚刀流　『蒲公英』」

放たれたのは、一発の貫手である。

それが男の胸の真ん中に触れたと思うと。

男は塀にぶつかっていた。

「……え？」

ツナは固まった。

今、彼は何をした？

いや、貫手を放ったんだろうけど。

でも……あんな風に人が吹っ飛ぶような威力を持っているように見えなかった！

「大丈夫か？」

驚くツナの一方で、男は爽やかに笑った。

自分は大したことをしてないというような笑い方である。

……もの凄く大したことなのだけど。

「つく……」

と、集団の方の男の一人が何かを懐から取り出した。

また手裏剣かと思ったが、違った。

ポフンッ

男がその何かを地面に叩き付けた。途端、視界を白い煙が覆いくす。

「げぼっ！ 何だ！？」

「え、煙幕か！」

全員煙により咳き込んだり目をとじたりする。

十数秒して煙は風に流され消えていったが、しかし。

「あ、あいつらは……？」

男達の姿は、全員消えてしまっていた。

立っていた者も倒れていた者も、例外無く。

「あれ？」

ツナは立ち上がって辺りを見渡した。

どこにもいない。影も形も無い。

それこそ先程の煙と一緒に消えてしまったかのように。

「あ……あいつら何者か訊きそびれた」

豪華な着物の男に言われるまで、ツナ達三名は現状に呆然として

いた。

「な、何だっただ……今の人達」

「忍者かもな」

ツナの呟きに答えたのは、ツナを吹っ飛ばしたりリボーンである。

いつの間にか、地面に突き刺さった一本のクナイを検分している。

「リ、リボーン！ おまえのせいで大変な目にあっただじゃないか！」

「あ、赤ん坊が喋ってる？」

ツナが憤り、男が驚く。

そんな反応を無視し、リボーンはじつとクナイを見つめた。

「奴ら、どうも自分達の身分を隠すつもりは無いらしい……組織の名前らしきものがあるぞ」

「組織の名前？」

「ああ。だが聞いたことねーな。真庭……？」

「真庭……！？」

ツナ達は首を傾げた程度だったが、男はそうはいかなかったらしい。

「ちょっと見せてくれ」

男はリボーンに歩み寄り、すつと手を差し出した。

リボーンにクナイを渡され、男はじつとそれを見つめる。

「おいおい嘘だろ……何でまにわにの名前が……あつらは全滅したのに」

「！ おめー、あいつらのこと知ってるのか？」

リボーンが尋ねると、男は神妙な面持ちで頷いた。

「ああ……あの妙な格好の奴ら自体は知らないけど、まにわに

真庭忍軍についてはよく知ってる」

「忍軍……やはり忍者か」

リボーンは急に黙り込んだ。

何かを思案するように顎に手をやっている。

また何かとんでもないことを考えてるな、とツナは嫌な予感があったが、リボーンが口にしたのは意外過ぎるものだった。

「おいおまえ、名前何て言うんだ？」

「ん？」

男は目を瞬いた後、それに答える。

「七花　鑢　七花だ」

まるで女のような名前だ、とツナは失礼なことを思った。

が、次のリボーンの言葉によりその思いは吹っ飛ぶことになる。

「七花……おめーボンゴレに入らねーか？」

「！　んなー！？」

「ん？」

ツナは叫び、男　七花は首を傾げる。

出会い頭に戦闘。

出会い頭に驚愕。

ボンゴレ十代目ボス、沢田　綱吉。

虚刀流七代目当主、鑢　七花。

二人の出会いは、そんな日常の中の非日常の中で起こった。

まさにそれは、日常をかき乱す一つの波紋だったのだが……それはまた別の話である。

## 第一録 出会い（後書き）

こんにちは、沙伊と言います。

リボンと刀語のコラボ、第一話でした。

刀語を知らない人でもリボンを知らない方でも読めるようにするつもりですが、何分私は文才が無いので解りにくいところがあると思います。そこはご容赦ください。

では、応援よろしく願います！ 読んでいただきありがとうございます！！

## 第二録 現状確認

「……つまり、ここは俺がいた時代、世界じゃないってことなのか？」

七花と名乗った男は困ったように眉根を寄せた。

ツナの部屋である。あれから七花を連れて、ツナ達は沢田宅に帰った。

獄寺と山本もいる。都合のいいことにランボとイーピンはいなかったが。

しかし普段ならツナ達三人がいてもそれなりに余裕がある自室が、七花という大男がいるせいで酷く窮屈に見えた。

七花がでかいのは身長だけで体軀は細身なのだが、豪華な厚着着物のせいでよけい大きく感じる。

まあそれは棚上げにするとして。

ツナは『過去の異世界の住民』たる七花をじつと見つめた。

もしくは、『パラレルワールドの過去の住民』を。

いきなり「ファミリーになれ」と言われて困惑する七花に、リボンは様々な質問を投げかけた。

その質問は七花がどこから来たのかおおよその見当はついてるというものだったが、ツナにはそれに気付かない。

が、家庭教師が出した結論は、ツナ達を納得させるものだった。

つまり、鑓 七花は過去 おそらく江戸時代の人間であろう、

と。

あの短いやりとりでそこまでの結論に至るとはさすがだが、なるほど、彼の言う通りそんな気がする。

時代錯誤の格好もさることながら、言葉にも現代とずれがある。

七花がここはどこだ？ と戸惑っていたことも踏まえて、彼が過去の人間であることに違いなかった。

だが。

七花の言葉で今度はツナ達が困惑することになる。

「江戸時代？ 何で江戸が年号になってんだ？」

……………。

そこから更に質問を重ねた結果、七花がいた時代 歴史は、ツナ達が知るものとは別物であることが解ることとなる。

まず年号、というか支配している将軍家と都の場所だ。

尾張である。尾張に都があるのである。

そして将軍家の名前は家鳴家。徳川のとの字も無かった。

それから、各地に存在する建物などの名前もツナ達には聞いたことが無い。

因幡の下酷城だとか出雲の三途神社だとか薩摩の濁音港だとか蝦夷の踊山だとか土佐の清涼院護剣寺だとか江戸の不要湖だとか出羽の天童将棋村だとか奥州の百刑場だとか尾張の尾張城だとか、地名はともかくめちゃくちゃである。

睦月如月 というのは当時の月の呼称であり、地名も同じくだ。なのになぜその他もろもろが違うのだろう。

そこでリボーンの結論である。

「七花は、パラレルワールドの過去の人間じゃねえか？」

大きく違う歴史を歩んだ世界の存在だろうと、そう考えたわけだ。



無論、カタカナなんて無い時代の七花は「ぱられるわーんど？」と首を傾げていたが、その点はリボーンが補完した。そして冒頭に至るのである。

「何か……信じられないなあ」

「俺も信じられないがな。だがそうとしないとおめーの存在に説明がつかねえ」

唸る七花に、リボーンは肩をすくめるしかなかった。

実際問題そう考える他無いのである。でないと七花を否定することになりかねない。

残った疑問はどうして七花が平行する別の世界の未来に来てしまったのかであるが、それは七花にも解らなかった。

「何でか……ちょっと前の記憶が消えてるんだ。わけあって二人旅をしてただけどさ、それは　それ以前のことは覚えてんのに……」

七花の顔が歪む。

「……何か気持ち悪い。思い出せそうで思い出せない」

「……まあそれはおいおい思い出していくとしてだ。七花」

リボーンの呼びかけに七花は「ん？」と顔を上げた。

「来てしまった理由はどうあれ、戻る方法は解らねー。帰る方法を見付けるまでボンゴレファミリーに入らねーか？」

「なっ……リボーン、またその話かよ！」

ずつと黙っていたツナは慌てて腰を浮かした。

「いきなり未来に連れてこられた人に対して何言っただよ！知らない場所に連れたことがどんなに不安か、解ってるだろっ」

「知らねーぞ。第一こいつは選んでられねえ」

リボーンはばっさり切り捨て、七花に向き直った。

「こんなとこじゃこいつはどうすることもできねー。常識も何もかも違うんだからな。さっきの真庭忍軍って奴らのこともあるし、こいつはなるべく近くに置いといた方がいい」

「っ、でも……」

ツナはなおも家庭教師に反抗した。

「それは七花さんが決めることだし！ 第一ボンゴレのことをこの人は知らないんだからっ」

ツナの言い分はもつともだ。今まで説明をしてきたのは七花のみであり、こちらのことなど何も話していない。

実際七花は最初、マフィアのことも知らなかったのだ。当然だろう。江戸時代ほど昔の日本に、マフィアという概念があるはずない。そして今も、リボーン言葉に？マークを飛ばしている真っ最中である。

「な、なあ。入るかどうかはともかく、そのぼんこれってのが何か教えてくれよ」

七花の当然の質問に、リボーンは一つ頷いた。

「ああ。話してやるぞ。ある程度はな」

すでに七花が来てから三時間が経過している。

七花の説明が長かったのもあるが、過去の人間である七花にマフィアやボンゴレのことを理解させるのに時間がかかったのも原因だった。

考えるのが苦手な七花にとって、この時間で理解できたのは素晴らしいことなのだが。

少なくとも二転三転する話は二転までが限界という晴れの守護者よりずっとまだ。

「ふうん……つまりそいつ、綱吉は、そのぼんこれの次期当主ってわけか」

七花はふむふむと頷いた。まだあいまいにしか理解できてないところもあるが、まあ問題無いだろう。

「でもよ……聞けば聞くほど解らねえ。得体の知れない俺を、どうしてそんな重要な奴の傘下に付けたいんだ？」

「さっきの戦いで、おめえの実力が解った。それに真庭って連中のことを知ってるのも、気になるしな。それだけで充分だ」

「ふうん」

つまり自分の持つ武力と情報が欲しいのだろう。

なら自分を仲間にしたいという、この赤ん坊の言い分はよく解る。

……どちらにせよ、帰れるあてもないのだ。知らない世界を放浪するより、こいつらと一緒にいた方がいいかもしれない。

それに、こいつらに興味が無いでもないし……

（つて、何か否定姫のが移ったような）

気付けば二重否定をしていた自分に少し驚きつつ、七花は頷こうとした。

入る、と言おうとしたのである。

しかし空気を読んでいなかったのか、向こう側からそれを阻む声が上がった。

「俺は反対ッスよ、リボーンさん！」

なぜ今更、と言いたくなった。

何で今頃、とも言いたくなった。

嵐の守護者、獄寺隼人に対し、とりあえず七花は一言。

「遅くねえか？」

「まあ成功するとは思ってなかったがな？」

彼女は言った。ひれ伏す部下に対して。

「まっさかボンゴレが偶然通りがかるとは思わなかったぜ」

はあ、とため息をつく。背中に流された長い黒髪が揺れた。

粗暴な口調だった。繊細な見た目からは想像できないほどだ。つんとつり上った目が印象的な、人形のように愛らしい顔立ちの女だ

った。

「できればボンゴレに真庭忍軍のことは知られなくなかったんだが、ま、知った以上、しょうがねえか」

どうしよーもないしー、と彼女は表情を改めた。

「ま、仲間をすぐ減らしたくないし？　少しの間は日陰者でいようぜ。あ、元から日陰者か」

「……あいかわらず明るいな」

彼女の後ろ、少し離れた場所に立っていた男が口を開いた。

長い黒髪を真っ直ぐ伸ばした、背の高い男だった。

彼を振り返り、彼女は薄赤い唇の端を釣り上げる。

「あいかわらず、というのは正しくねえ。記憶と忍法は俺だけど、あくまで俺は俺じゃない……ま、記憶ありでこの世界に転生できたのは偶然、必然、いや運命だろうけど」

そう言って彼女は、くくつと笑った。

女性らしからぬ、随分卑下た笑いだ。

「それはともかく、もう少し待っててくれよ。仲間全員、所有者全員は体力的にまだちょい無理だし」

「構わんよ。それまで気長に待つさ」

男は引き締まった唇を少しだけゆるめた。

「おぬしの忍法は真庭忍軍の中でも規格外だからな。その反動ゆえの体力消耗を責める気は無い」

「ありがとうございます」

未だひれ伏している部下達を無視し、彼女と男の会話は続けられる。

二人共、奇妙な格好だった。

現代にそぐわない、時代錯誤なしのび装束。しかし、もっともおかしいのはその形である。

袖を切り落としたしのび装束なのである。しかも全身に鎖を巻いている。

おおよそ、忍ぶ者の格好ではない。むしろとんでもなく目立つ。  
忍ぶ気を感じられない。

おかしな、男女だった。

しかし彼らがいるその場に、それを指摘するものはいなかった。  
それは当然で、彼らにとって、部下から見ても、その格好は普通の格好だったのである。

「虚刀『鑢』、ボンゴレ十代目。せいぜい平和にすごしな。気付いた時には、もう俺の思い、願い、いや野望は始まつてる」  
そう言つて、彼女は低く笑つた。

女とは思えない、そんな笑い方だった。

## 第二録 現状確認（後書き）

はい、オリキャラです。おりまにです。

ちなみにおりまになのは片方だけで、もう一人はちゃんと刀語に出てくる人物です。誰なのかはまだ明かせませんが……

では、次回！

### 第三録 実力試し

並盛町にある山。そこに、リボンやツナ、獄寺がいる。

そして彼らの前にいるのは、それぞれ向かい合い、構える山本と七花だ。

山本は両手で時雨金時を持ち、中段に構えている。

一方無手の七花は、左足を前に右足を後ろに引いて、右手を上左手を下に平手で壁を作るような構えを取った。

虚刀流一の構え、『鈴蘭』

と言うらしい。

獄寺が七花のボンゴレ入りに反対した。

七花が遅いと指摘した通り今になってとツナも思ったが、獄寺が言うには七花の話に聞き入っていたらしい。

ともかく、得体の知れない輩に十代目が守れるかつ、というのが獄寺の主張だった。

それに対し七花は実力には自信があるとはつきり言った。

ツナ達は知らぬことだが、七花は際物達との死闘をくぐり抜けてきたのである。侮られるのはいい気分ではなかった。

「だったら証明してもらおうか」

獄寺は明らかに年上である七花に、嘲るような口調で言った。

さすが年上の野郎は全員敵と言うだけあって、七花も例外ではなかった。

「証明？ 何だよ、戦えってことか？」

一方七花も望むところ　とまではいかないが、受けて立つという姿勢を取った。

しかしである。

「待て、獄寺」

リボーンの仲裁により、睨み合い（獄寺の一方的なものだが）は中止された。

「おめーの言葉はもつともだが、今は日が悪い。もう夕方だからな」「リボーンさん……」

「明日は休みだし、明日七花の実力を確かめればいい」  
ただし、トリボーンは山本を振り返った。

「七花と戦うのは山本だ」

「ん？ 俺？」

「な！ 何でっ」

目を瞬く山本に対し、獄寺は愕然とした声を上げた。

「獄寺の武器は、七花のいた時代には無いものだ。勝敗はともかく、そのせいで実力が解らなかつたら本末転倒だろ。だったら、刀を使う山本と戦った方が解りやすい」  
「ですが……」

「……あのさ」

急に七花が口をはさんだ。

先程までののんきさはどこにも無い。

戦う者の厳しさと、強者の余裕がはつきり感じ取れるような声音だった。

「戦う相手はそっちで決めればいいよ。それに関しては文句言える立場じゃないし。でも、そいつが刀を扱う以上、そいつに勝ち目は無いぜ」

「……どういうことだ？」

「そのままの意味だ。刀相手なら俺は負けない自信がある。虚刀流は、刀を持つ相手に対する無刀の剣法なんだから」

拳法でなく剣法。そう言った。



無刀なのに、剣法？ わけが解らない。

だが、その言いぐさには絶対の自信があった。

「……おもしれーじゃねーか」

だが、山本にも父より受け継いだ時雨蒼燕流に対して誇りを持っている。

こんなことを言われて、何も思わないわけ無い。

「小僧、俺もこの人と戦いたくなつた。獄寺には悪いが、俺がやるぜ」

そんな形で

虚刀流七代目当主、鑢七花と、時雨蒼燕流九代目継承者、山本武の対決が決まったのである。

その日、七花はツナの家泊まった。

リボーンの知り合いと言うと、ツナの母、奈々はあっさり受け入れたのである。

さすがリボーンやランボを受け入れただけある。この包容力には七花も驚いていた。

「自分でいうのもあれだけどさ、普通俺みたいな得体の知れない奴受け入れるか？」

もっともな感想だった。

そして現在。七花は山本と向かい合っていた。

「だ、大丈夫かな、七花さん……」

リボーンが見込むだけあって実力はあるのだろうが、やはり不安なツナである。

山本の実力をしっかり知っているだけに、怪我をしないか心配なのだ。

無論、山本はリングを使わないと決めていたし手加減もするだろ

うけど。

七花の実力は、まあ山本より下かなと思う。

七花がどんな戦いをするかは知らないが、多くの激戦を繰り広げてきた山本には敵わないだろうから。

獄寺も同じことを考えているのか「結果は目に見えてるな」と呟いたりしていた。

「二人共、準備はいいな」

リボーンの言葉に、山本と七花は「おう」と答える。

「んじゃ……始め！」

リボーンの声に、先に動いたのは山本だ。

ただ、走り出したのではなく、かといって刀を振り上げたのでも無い。

刀を、落としたのだ。

手を滑らせたのではない。

時雨蒼燕流の技の発動だ。

時雨蒼燕流、攻式三の型

遣らずの雨。

山本の足先が、刀の柄の石突きを捉えた。

とたん、矢のように刀は七花へと放たれる。

斬るのではなく、突くでなく、貫く。

それこそ、矢のように！

「……」

しかし七花は、その瞠目するべき技に対し、冷静に対処した。

構えた右手で、刀を弾いたのである。

無手にも関わらず、素手にも関わらず、避けること無く弾いたのだ。

「っ……!？」

これに山本は当然驚いた。  
が、すぐさま戦闘に意識を戻し、横に弾き飛ばされた刀を掴む。  
元々避けられると思っていた一撃だ。七花の動きは予想外だった  
ものの、すでに動いていたために遅れることは無かった。

すぐさま次の行動に移る。

今度は両手で持ち、七花へと突っ込む。

それと共に七花も走り出している。

むしろ、七花の方が速かった。

「え、えっ」

「虚刀流 『董』!」

気付けば振り上げられた七花の右足に、山本は両足を絡められて  
いた。

更に平手で上半身を思いきり突かれる。

当然、山本は後ろに倒された。

「や、山本!？」

ツナは目の前の光景を信じられないでいた。

共に強敵を倒してきた山本が、あしらわれている。

「お、おいマジか」

獄寺も愕然とした表情を浮かべていた。

「何で山本がいいようにやられてんだよ」

「……なるほど、無刀の剣法な」

その中で、リボンだけが納得したように頷いた。

それをツナが問う前に、山本が立ち上がった。

倒された身体を転がし、七花から遠ざかった後でだ。

「……強いな、あんた」

山本の言葉に、七花は「ずっと戦ってたからな」と笑った。

「まあ一年前の俺だったら、おまえに負けてたかもな。実戦経験皆  
無だったから」

「……？ 七花さんていくつ？」

「ん？ もうちょいで二十五になるけど……それが？」

「いや……」

つまり二十四になるまで実戦など経験してなかったということか。そこはまあ、自分と同じか。

「……よし」

山本は再び走り出した。

刀を下段に構え、先程よりも速く走る。

片手で刀を持ち、七花との間合いを詰めると、その手を振った。七花は当然、後ろに避ける。

「……！」

だがその手に。

時雨蒼燕流、攻式五の型

刀は、無い！

五月雨。

手を離れた刀はもう片方の手に落とされる。

その手で刀を掴むと、ブンツと横殴りに振った。

「！ ぐっ」

さすがにこれは七花も避けられなかったらしく、その長身が吹っ飛んだ。

しかし、空中で身体をひねり、難なく地面に降り立つ。

だが山本は間を置かず、また突っ込んでいった。

刀を突き出し、切っ先を相手に向ける突きの技。

時雨蒼燕流、攻式一の型

車軸の雨。

速さと威力を伴った突きを、七花は避けようとはしなかった。

「虚刀流 『菊』」

右足を一気に弧を描く動きで、左爪先の前を前にしながら左半身になる。

刀の刃は、七花の背を皮一枚分の間を開けて通過した。

そしてその刀を左二の腕で根元をひっかけ、反対の右肘を剣先に炸裂させる。

そうして刀を完全に固定された山本は目を剥いた。

動けない山本に、七花は追い討ちをかけるように足刀を放つ。

「虚刀流 『牡丹』」

痛烈な回し蹴りを横腹に受け、山本は呻きながらぶっ飛ばされた。その際に、刀は手放してしまう。

「やめ！」

リボーンの声に、一気に場の緊張が解けた。

「や、山本！」

ツナは地面に倒れ込んだ山本に駆け寄った。

「だ、大丈夫？」

「手加減したから、少ししたら動けるようになるぜ」

答えたのは山本ではなく七花だ。

「それにしても面白いな、これ。手から離れたとたん、竹刀に戻った」

言う通り竹刀に戻った時雨金時を、七花は山本に差し出した。

「大切なもんなんだよな、これ」

「え？」

「だってこんな風に見た目が変わるなんて普通の刀じゃないし、もしかしたら流派に伝わる刀じゃないかと思って折らなかつただけだ」

「どういうことだ？」

リボーンが七花の肩に飛び乗った。

そんな彼に、七花は技の解説をする。

「さっきの『菊』って技は、てこの原理で相手の刀を折る技なんだ。さっきは手加減したから固定だけにとどまったけど」

手加減、という言葉に、山本は酷く傷付いた顔をした。

ツナも、山本相手に手加減できるなんてと目を見開く。

侮っていた。七花を甘く見ていた。

彼はとんでもない実力の持ち主だった！

「ま、これで七花のボンゴレ入りは決定だな」

リボーンはニツと笑った。

「とりあえずはしばらくツナン家にいそうろうしとけ。ここでの常識やその他もろもろは俺が叩き込んでやる」

「ありがとう。世話になるな」

七花は屈託なく笑った。

一方、ツナ達は山本敗北のショックからまだ抜けられないでいる。

「山本……ほ、本当に大丈夫？」

「あ、ああ……」

山本は座り込んだまま、まだ立てないでいた。

「なんてヤローだ。あんなに強かったなんて」

山本が負けるとはよ、と獄寺も顔をしかめて言った。

「それだけじゃねえ。まだ余力を残してる感じだ」

「うん……」

ツナはじつと、七花の背を見つめた。

（あの人……一体何者なんだろう）

ツナがそれを知ることになるのは、まだまだ先のことである。

否定姫は現状を否定しなくなった。

「七花君はいなくなるし、わけ解んない奴らには取り囲まれるし、

最悪ね」

短くなつた金髪を揺らし、目の前を占める黒い着物の男達を見渡す。

服装はただの町人だ。だが、この人気の無い道にいきなり現れたということとは、盗賊か何かか。

七花がいなくなつてすぐこれとは、全くついていない。

無論、自分の運の無さを彼女は即座に否定するのだけれど。

「……否定姫、だな」

だが、男のこの言葉は無視、いや否定できなかった。

「……何で私の呼び名を知ってるわけ？」

「教える気は無い。一緒に来てもらおう」

男の一人が否定姫へ手を伸ばした。

どがああああつ

が、その男はなぜか急に吹っ飛んだ。

「……え？」

否定姫は目を見開いた。

今……何が起こつた？

「女一人に男が大勢で襲うとは、外道極まり無いな」

黒い、光沢を持った布がひるがえつた。

否定姫が視認できたのはそれまでである。

後は自分を取り囲んでいた男達がなすべ無く倒れていくのを見るしかできない。

気付いた時には、男達は誰一人として立っていないかった。

「……え」

否定姫は呆然と立ちすくんだ。

黒い衣　外套を羽織つた男の背を、じつと見つめる。

「……誰？」

否定姫が問うと、男は振り返つた。

自分と同じ金髪だ。陽光にまぶしいくらい輝いている。

だが瞳は碧眼ではなく、澄んだ、どこまでも澄んだ橙色だ。

黒い外套の下は洋装で、外国について詳しい否定姫でさえ知らない形だった。

「大丈夫だったか？」

男は少しだけ唇を緩めた。先程までは凜とした表情だったのに、そうすると柔和な顔立ちに見える。不思議な印象の男だった。

「大丈夫だけど……あなた、誰？」

否定姫は眉をひそめた。

男は「ああ」と思い出したように頷いた。

「まだ名乗ってなかったな。俺もまだ君の名を聞いていない」

「私？ 私は否定姫と名乗っているわ」

「……偽名だよな？」

「本当の名なんて否定してるわ」

男は黙り込んだ。

しかしごほんと咳払いをして、男はまた微笑んだ。

大勢の男を薙ぎ倒したとは思えない、優しい笑みだった。

「俺はジョットと言う。よろしく、否定姫」



### 第三録 実力試し（後書き）

最後は否定姫のターンでした。

それから山本ファンには謝らなければ……

山本負かしてすみませんでしたあああああ！

でも、刀語知らない人に七花の強さを解ってもらうにはこれしかなく……;;;

さて、次回では時系列に間を空けます。十日ぐらい。  
では、また次回！

## 第四録 世間勉強

七花が現代に来て十日経った。

その十日でとりあえず七花はひらがなを覚えている。

漢字は読めてひらがなは読めないという現代人から見たら矛盾した国語能力は正直死活問題のため、まずそこからである。

しかし未だカタカナは読めない。そして現代の常識も危険レベルにあやふやだった。

とりあえず、服装だけは一般人に近付けたのだが。

「どうも違和感がぬぐえないんだよなあ」

七花は姿見の前で唸った。

彼が今着ているのは、あの豪華な着物と袴ではない。

上は黒のタンクトップに白いパーカー、下はガーコパンツという今風の服装だ。

ちなみにリボンから支給されたものである。

七花の背は現代でも群を抜いて高いため、身体に合う服などそうそうあるわけではない。

なのでリボンがそれらの服をどう手に入れたかは謎である。

まあ服だから別に怪しいところではないだろう。ツナはそう願っている。

そのツナは今、学校に行っていた。学校が寺子屋と同じということとは、七花は認識済みである。

「どこに違和感があるんだ？ 似合ってるぞ」

七花の足元でリボンがニツと笑った。

実際似合っている。

七花はスタイルがいいし、顔もそれなりだ。

かつて奇策士は七花のことを見てくれはまあまあだと言ったが、どちらかといえば、七花は顔が整っている部類に入るだろう。

単に、少し地味な顔なだけである。つまり花が無い。

これ以上言えば七花といえど傷付くので、ここでとどめておくがともあれ、そんな理由で現代の服は七花にぴったり似合っていた。だが、洋服に関しては知識がほとんど無い七花にはよく解らない。「そうなのか？ よく解んねえなあ。もともと、服装なんて興味無いけどさ」

七花はパーカーの裾を引っ張った。

ちなみに彼が着ていた着物は、彼が借りている部屋の押入れに入れている。

借りた部屋はツナ之父、家光のものであり、本人の了解も得ている（リボン談）。

家光も七花が元の時代、元の世界に戻るよう協力してくれるらしく、七花はほっと安堵した。

できるなら早く元の世界に帰りたい。

現代に<sup>ここ</sup>いることが面倒だと思っているのもあるが、過去<sup>むかし</sup>にいるであろう否定姫のことも心配だ。

七花も否定姫も、幕府に追われる身である。いつ彼女に追手が差し向けられるか解らないのだ。

それに現代に来る前後の記憶が戻らないのも、不安要素の一つである。

そんな身の上であるためか、七花は少し用心深くなっていた。

……根本的なお気楽思考は変わらないけれど。

「それにしても、もうずっと家にこもりっぱなしだぜ。いい加減身体なまっちゃうよ。なあリボン」

七花は足元の赤ん坊を見下ろした。

「駄目だ。今のおまえが外に出るのは色んな意味で危険過ぎる」  
「けち」

七花は少しだけ頬を膨らませた。  
言葉通り、七花はこの十日間外に出ていない。  
常識が無いゆえの危険性があるからである。

一人にして何を起こすのか解らないのだ。

無論、七花もそれは理解しているが 理解しているからと言って、納得しているわけじゃない。

実際身体はなまってるだろうし、かといって室内で修行をするわけにもいかない。

七花は三途神社のことを思い出した。

あそこでも、長いこと外に出れなかったなあと思ったのだ。

だが、黒巫女達のことを理解し、情緒が発達した今となっては、充分納得できるものだ。

しかし今は。

「んー…… やっぱじつとしてるのは性に合わねえんだよな」

「…… まあ、だろうな」

リボーンはふむ、と唸った。

確かに家にこもりっぱなしはよくないかもしれない。

まだ不完全とはいえそれなりに常識は手に入れてきてるし、自分の監視付きでなら外に出してもいいかもしれない。

ただ、そのための理由が必要だ。

七花が外に出るための理由が……

「七花くん？」

急に部屋のふすまが開いた。

「あら。着替えたの？ 似合うわねえ」

奈々がにこにこ笑いながら部屋に入ってきていた。

「あ、奈々 さん。どうかしたのか？」

七花は首を傾げた。似合うという言葉はとりあえず受け流す。奈々は「そうそう」と七花の前に進み出た。

「リボン君と一緒に頼まれてほしいんだけどね、ツナのお弁当届けてほしいのよ」

「あいつ、弁当忘れたのか……」

リボンがあきれたようなため息をついた。

「それで俺達に頼んだのか」

七花は顎を引いた。

「解った。行くよ。それだけ？」

「あ、買い物もしてきてほしいわ。これ、お弁当とメモ」

「……」

七花は奈々からそれらを受け取った後、リボンを見下ろした。

「メモってのは用件が書かれた紙のことだぞ」  
「なるほど」

七花は小さな紙に目を落とした。

ひらがなや漢字で食材の名前が書かれている。見たこと無い名前の食材は、おそらく洋食のものだろう。

こちらに来て洋食は幾つか食べたが、味は七花には濃いものの、おいしかったと思っている。

最初に食べた『かれー』というものの辛さにはびくりしたが。

「よし。じゃ行くか」

リボンは高い位置にある七花の肩に難なく飛び乗る。

この十日間、リボンの定位置が七花の肩になりつつあった。

七花がはいっている履物は草鞋ではない。

現代人がよく履いてるスニーカーである。靴下もちゃんと履いていた。

正直七花としては抵抗があったのだが……履いてみたら、意外と

動きやすくてびっくりしている。

まあやっぱり裸足の方が戦いやすいよな、というのが七花の感想である。

「ここを右だぞ」

「おう」

七花はリボーンに言われた通り道を右に曲がった。

「離してください!」

いきなり前方から叫び声が投げられてきた。

「ん?」

「え?」

リボーンと七花は顔を見合わせ、次いで前方を確認した。

何というか、ありがちと言うか。

不良らしき数人の男に、一人の少女が囲まれていた。彼女は腕を掴まれており、怯えた顔で男達を見渡している。

不良という概念は七花には無かったが、それでもこの場の雰囲気を読むことはできた。

「ああいうのをほっとくわけにはいかねーよなあ」

七花は「あー面倒だ」とぶつくさ言いながら、男達に近付いていた。

「なあ、離してやれよ」

ストレート過ぎる、とりボーンは思ったがとりあえず黙っていた。

「ああ? 誰だ…… って背えデカ!」

「いや、身長関係無いだろ」

七花はツツコんだ。

「それより離してやれよ。その娘痛がつてるじゃないか」

「うつせえよ! 背が高いからっていい気になんじゃねーよ!」

「いや、背はもういいよ」

七花は面倒になってきた。いや、最初から面倒だと思ってたのだが。

「このデカ男が！」

不良の一人が拳を振り上げた。

素人同然の拳は、七花には避けるまでもない。

自分に拳が届く前に相手の足を蹴り飛ばして横倒しにした。

「あだっ」

「な！ てめえ！」

不良達は七花を睨み上げた。

七花は特に気にせず、ぼさ髪をかいた。

「はあ……面倒だ」

そう気だるそうに言って 素早く動いた。

虚刀流の技を使うまでもない。ただ腕を振っただけで、足を振っただけで、不良達は倒れ伏した。

もし七花の姉だったらここで追い討ちをかけるのだが、当然七花はそんなことをするような悪い性格ではない。

「怪我したくなかったら帰れよ」

ただ見下ろして、それだけ言った。

見下したわけではない。見下ろしただけ。

睨んだわけではない。見つめただけ。

だがそれだけで、不良達に恐怖を与えるのには充分だった。

「く、くそっ！」

「お、覚えてろっ」

お決まりの捨て台詞を吐き、不良達はその場を走り去った。いや、逃げ去った、か。

「いつの時代にも、ああいうのはいるもんだな」

七花は変に納得しつつ、自由になった少女に目にやった。

「大丈夫だったか？」

「は、はい」

少女はこくこくと頷いた。

長い黒髪を背中に垂らし、大きい目に眼鏡をかけた少女だった。着ている制服に、リボンは見覚えがある。

「助かりました。ありがとうございます！」

少女はぺこつと頭を下げた。

「あの……助けてもらったお礼がしたいんですけど……」

「そんなのいいよ。お礼言われるようなことじゃないし」

七花はひらひらと手を振った。

「じゃ、名前！ 名前だけでも教えてくださいー！」

やけに熱心な顔で少女は七花に近寄った。

「名前？ 鑢 七花だけど」

「鑢……さん。変わった名前ですね。あ、私は伊瀬<sup>イセ</sup>遊莉<sup>ユウリ</sup>です」

訊いてないのに名乗った。

「なあ、おめーなんでこんな時間にこんなところにいるんだ？」

いつの間にか七花の足元に移動していたリボンが少女 遊莉に尋ねた。

「学校はどうしたんだ？」

「赤ちゃんが喋ってる……」

遊莉は愕然とした後、ハツとして説明をした。

「実は私、朝体調悪くて……でも数時間寝たらよくなったんで今からでも学校に行こうとしてたんです。そしたらさっきの人達に……」

さっきのことを思い出したのか、遊莉ははあ、とため息をついた。

「……ともあれ、助かりました。今度お会いした時は必ずお礼します」

「だからいいって」

七花は困り顔になった。

「でも……ってあ！ じ、時間もやばいんで私もう行きますねっ。それじゃあまた！」

遊莉は腕時計を見て慌てたように走り去ってしまった。

「……何だったんだ」

「今の奴……緑中だな」



「緑中？」

また肩に乗ったりリボーンに対し、七花は首を傾げた。

「この辺りでかなり勉強ができる女子校だ。ちなみに女子校ってのは女しかいかねえ学校のことだぞ」

「へえ……」

七花は遠ざかっていく少女の背を見つめた。

「……それより、ツナに弁当届けるんじゃないのか？」

「あ……」

七花は肩にかけた鞆の存在を思い出した。

「えっと……中身大丈夫かな？」

「あれぐれーの動きでぐちゃぐちゃにはならねーぞ。早く渡して買  
い物も済ませるぞ」

「了解」

七花はリボーンを肩に乗せてまた歩き出した。

なぜかいきなり捕まった。

七花の目の前にいるのは黒衣の少年である。

黒い上着を肩に羽織った黒髪の少年は、切れ長の瞳で校門の前で  
七花をじいつと見つめているのである。

並盛中学に着くと、リボーンは門の奥にいたこの少年に声をかけ  
た。

知り合いらしく、リボーンが二、三言うとすんなり入れてくれた  
のである。

「それで、背の高い彼は誰だい？」

また背かと七花はうんざりしたが、リボーンが説明していたため  
に口を閉ざしていた。

その間、少年は興味が無さそうに相づちを打っていたが、リボー

ンが「七花は山本を負かしたんだぞ」と言つと、目の色が変わつた。  
「へえ……あの山本武にねえ」

そして冒頭に至る。

何でか知らないが、少年は自分に興味を持ったらしい。

……そういえば。

「俺、おまえの名前の訊いてないな」

七花の言葉に、少年は瞳の鋭さを和らげた。

「僕は雲雀恭弥。一応よろしく」

「一応つて……」

変な奴。それが七花の感想だった。

「とりあえず校内に入るのは許可してあげるよ。でも、風紀を乱すことはしないでね。でないと」

少年はくりりと七花とリボーンに背を向ける途中で言った。

「容赦無く咬み殺すから」

そして去っていく少年　雲雀。その後ろ姿には隙が無かった。

「……一体何なんだ、あいつ」

七花は疲れたような声を出した。実際じろじろ見られて疲れている。

「雲雀恭弥。守護者の中でも群を抜いて強え奴だ。俺が思うに、おめーとあいつは同じくらいの強さだと思うぞ」

「そうか……」

あの若さで最強。驚きだ。

何だが錆　白兵を思い出す。

二十歳という若さで日本最強の称号を得た青年。自分が勝てたのは、ほとんど運に恵まれていたからだ。

もし運が悪かったら、自分は刀集めを続けるどころか生きてさえなかったらう。

「……そういえば、あいつの咬み殺すって台詞は？」

「ああ、あいつの口癖だぞ」

「……」

口癖は雲雀の方がかつこいいな。  
そんな感想を抱いた七花だった。

「俺はちよつと用事があるから、おめー一人で行け」  
リボーンは校内に入るなり、そう言い残していなくなってしまうた。

残されたのは、途方に暮れた七花一人である。

（俺一人でどう綱吉を探せと……？）

来たこと無いのに、道に迷うのが落ちだ。

「せめて誰かいてくれたら……あ」

きよろきよろと辺りを見渡すと、ちょうどいいところに二人の少女が階段を上がっていくところを見つけた。

あの二人に訊いたら解るかもしれない。

「なあ、その二人」

七花が遠慮がちに声をかけると、少女二人は驚いたような顔で振り返った。

片方は短い茶髪、もう片方は背中の半分ほどの黒髪だ。

「えつと……何ですか？」

茶髪の方が首を傾げた。

「あのさ、沢田綱吉って奴、知らないか？」

「ツナ君、ですか？」

ツナのことを愛称で言っている。ということとは。

「おまえ、綱吉の知り合いか？」

「はい！ ツナ君なら私と同じクラスですよ」

（くらす？）

七花は目を瞬かせたが「沢田に何の用？」という黒髪の質問に、我に返った。

「あ、ああ。実はあいつの弁当届けに来ただけだ」

「何でツナ君のお弁当……」

少女二人は顔を見合わせた。

「……とりあえず綱吉のところに連れてつてくれるか？」

七花が頼むと、茶髪の少女は「あ、はい」と笑顔で承諾してくれた。

「そういえば、お兄さん名前何て言うの？」

黒髪の少女に訊かれた七花は、今日は名前訊かれてはつかだなと思いつながら口を開いた。

「鑓 七花。綱吉とここで居候してんだ」

「ツナ君の家に？」

茶髪の少女は目を見開いた。

「そうだったんですか。それでツナ君のお弁当を」

「まあな。それで、おまえら二人の名前は？」

「あ、私は笹川京子って言います」

「私は黒川花。よろしく、七花さん」

ツナは追いつめられていた。

どうして山本や獄寺がいない時を狙ってこういう奴が寄ってくるんだろう。

「なあダメツナ、いいじゃん金借りるぐらい」

……泣きたい。

ツナは椅子に座りながらうなだれた。

こういうのは無視するに限るが……耐えられないかもしれない。早く獄寺と山本、どっちでもいいから戻ってきてほしい。

ツナがそう思っていると……

「ツナ君」

ツナの背筋がぴんと伸びた。

「き、京子ちゃん！」

頬を赤く染めて首を動かす。目に映ったのは、憧れの少女である京子だった。

「ど、どうしたの？」

自分をカツアゲしている二人の同級生の存在も忘れて尋ねると、京子は後ろを振り返った。

「あのね、ツナ君のお弁当を届けてくれた人が来たの」「えっ」

ツナが驚いていると、その人物が教室に入ってきていた。

「よう、綱吉」

「し、七花さん!？」

ツナはガタツと立ち上がった。

「何で？」

「いや、弁当届けに来たんだって」

七花はツナの席に近付いて弁当箱を机の上に置いた。そしてツナにカツアゲしていた同級生を見下ろす。

「……綱吉の友達か？」

七花の問いに、同級生達はハツとした。

七花の登場により、クラス全体が固まっていたのである。

そんな彼の言葉に、クラスは硬化から立ち直った。

「お、おう！ 友達だぜ、なあダメツナ」

同級生が肩に手を回してきた。

七花の反応が怖くて、それを回避しようという魂胆だった。

「え、でも今駄目って……」

「いや、こいつのニックネーム！ 勉強も運動もダメダメだからこんなあだ名がついたわけッスよっ」

「何にも取り柄が無いし、やることなすこと失敗ばっかだし！」

回避したいのか神経を逆撫でしたいのか解らない。

そんな同級生に、七花の反応は

「駄目じゃねえよ」

誰もが黙り込んだ。

実はカツアゲ二人の言葉に、数人笑っていたのだが、それらすら止んでしまう。

「え、えっ……」

「綱吉は駄目な奴じゃ無い。こいつの家に世話になって思ったけど、綱吉はむしろ凄い奴だと思う。俺馬鹿だからさ、うまく説明できないけど、これだけは断言できる」

誰も言い返せなかった。

そんな中で、ツナだけが慌てる。

「そんな、俺凄く無いですって！ むしろ七花さんの方が……」  
「ん？ そうか？」

七花は首をひねった後、踵を返した。

「とりあえず俺、まだ用事あるから。また後でな、綱吉」

「あ、はい」

「それと、おまえら」

七花は教室を出かけたところで、首だけを振り向かせた。

「もう二度と、綱吉を駄目だなんて言うなよ。それは単におまえらが綱吉の凄さを知らないだけだからな」

それだけ言い残して、七花は教室を後にした。

そんな様子を、リボーンは窓の外でじっと見ていた。

「……」

そこでニツと笑ったことを、ツナと七花は知らない。

#### 第四録 世間勉強（後書き）

予想より長くなりました……

七花に洋服着せたのは、きっと現代の服が似合うと思った沙伊の独断です。

それにずっと着物着せてるわけにはいけないので……

次回は否定姫サイドから始まります。

では！

## 第五録 否定と襲撃

「貴方何者なの？」

夜の旅籠にて、否定姫はそう言った。

目の前にいるのは、数時間前に自分を助けた男 ジョットだ。  
名前と服装、そして容姿。それらは完璧に外国の人間のものであり、鎖国中のこの国ではありえない存在だった。

しかし彼はここにいるし、否定姫はありえないという言葉を否定している。

問題はこの男が何者かだ。

同じことが起きてはいけないということで次の町まで同行するのは、まあ解る。

しかし、彼自身がどこに行くのかと問えば解らないというのだから否定姫の猜疑心は深くなる。

そして冒頭に至るのだ。

その言葉は彼女にしては直球過ぎるが、それには理由があった。

ジョットとは少し話ただけだが、どうもぬぐえないのだ。

見透かされてる……そんな感じが。

彼の目は、まるで全てを見透かし、見通し、見抜いているようなのである。

こちらが知略謀略を巡らせても彼には通じないような、そんな気がしないでもない。



だからあえての直球だ。

「……何者、か」

ジョットは目を細めて旅籠の外を見つめた。

「言っても理解できるか……正直、常識も何もかも壊れるようなことだ」

「否定する。言っとくけど私は常識さえも否定しているわ。だから貴方の話を理解できなくもないのよ」

どういふ話かはともかくね、と否定姫は肩をすくめた。

「……そうか。だったらいいんだがな。ただ俺の正気を疑わないでくれよ」

「なら貴方の狂気を否定しましょう」

「面白いな、おまえは……さて、何から話そうか」

ジョットは畳に腰を下ろした。否定姫との距離は、少しの間が空いている。

「俺は……この時代の人間じゃない。いや、おそらくは世界そのものも、俺がいた世界とは異なっているだろう」

「……」

否定姫は黙り込んだ。

別にジョットの言葉に呆然としたのではなく、自分の予想が半分当たって半分外れていたことにちよつと顔をしかめたのだ。

「服装見てもしかして未来の人間かなとは思ってたけど、異世界？ 架空小説より奇異じゃない。驚き過ぎて逆に馬鹿馬鹿しいわ」

「まあ、俺も現状は馬鹿馬鹿しいと思いたいかな。現実である以上、笑い飛ばすことはできないな」

「こつちも笑えないわよ。おかげで彼が消えた理由のおおよその予測が立つちゃったじゃない」

「彼？」

首を傾げるジョットに、否定姫は説明をする。

「私の同行者よ。急にいなくなっちゃってね」

否定姫はため息をついた。

「でも貴方という存在があるということは、七花君が過去か未来に行った可能性が無くもないのよ。もしかして異世界とやらの過去や未来かもね」

「なるほど……」

ふむ、と唸るジョット。

「つまり、俺と入れ違いにそのシチカという男が過去や未来に行ったかも知れないということか」

「そうとも言えなくもないわね」

否定姫は自分の短い金髪をいじった。

「確定できないけどね。確定どころか確証も無いわ。でもそれ以外に考えられない」

「……そうか。いや、そうなのか……？」

ジョットは納得のいつてなさそうな顔をした。

別に自分の考えを否定するのは結構だが（むしろ上等である）、一体何が引っかけかかっているのだろう。

それを訊く前に、ジョットは再び立ち上がった。

「つかぬことを訊くが、そのシチカという男は腕がたったのか？」

「ん？ ええ、かなりね」

「そうか」

なぜか畳の上に置いてあった外套を羽織るジョット。その目は、鋭さを増していた。

「そいつなら外の連中に気付いてたろうな」

「……！？」

否定姫が言葉の意味に気付いて立ち上がった瞬間。

ずばあああああんっ

襖が外から蹴り倒された。

「夜を狙ってきたか」

ジョットは否定姫を後ろにかばった。

襖を蹴破つて来たのは、黒い着物を着た男達である。

おそらく外で襲ってきた奴らとは違っただろう。彼らはしばらく動けないだろうとジョット自身が言っていたのだ。

だとしたら彼らの仲間か……

否定姫はあとため息をついた。

「全く……七花君がいなくなったことを樂觀視してた自分を、私は否定するわ。彼がいたらこんな奴ら一発なのに」

「俺は信用してないのか……」

ジョットは苦笑した。

「まあ今日会ったばかりの男を信用しろというのが無理な話か。…

…さて、否定姫」

ジョットは顔だけを否定姫に向けた。

「ここでこいつらを倒してもいいが、それだと後がまずい。野宿してもかまわないか？」

「……かまわなくもないわよ」

三重否定。それに頷き、ジョットは「失礼」と断りを入れて否定姫を抱き上げた。

そして窓の外へ飛び出す。

階は二階。高さはそれなりにあるのに、迷い無く、だ。

しかしジョットは否定姫を抱えているにも関わらず、音も無く地面に降り立った。

上で男達が騒いでいるのが聞こえる。しかしジョットはそちらには目を向けず、外にいた数人の男達を見ていた。

否定姫は抱き上げられたまま、その男達の武器に眉をひそめた。

刀だ。別にそれ自体は珍しくない。武士でなくとも刀を使う人間は大勢いる。

問題はその刀身だ。

刀身には赤や青、紫などの炎が灯っているのだ。

（何あれ。変体刀でも刀身に炎を灯した刀なんて無かったわよ）

雷を帯びた刀ならあったが、あれだつてあからさまに雷が見えて

いたわけじゃない。

一体あの刀は何だ？

「死ぬ気の炎」

ふと、ジヨットの声が降ってきた。

「まさかこんなところで使われているところを見るとは」

「何よそれ。死ぬ気の炎……？」

「……おいおい説明する」

ジヨットは否定姫を下に下ろした。

「こんなところで足止めを喰うわけにはいかないんだ。早急にかたをつけさせてもらおう」

上の奴らも降りてくるだろうしな。そう言っただけでジヨットは両手に手袋をはめる。

手の甲に縦に『？』と書かれた、不思議な意匠の手袋だった。

「零地点突破」

その時否定姫は見た。

ジヨットの額に、瞳と同じ色の、美しい炎が宿ったのを。

「まさかボンゴレ？<sup>フリーモ</sup>世が出っ張ってくるとは思いませんでしたね」  
空中にて、男は言った。

足に紫色の、雲のような炎が吹き出ており、それが彼の身体を空に浮かべていた。

「どうするよ。あの否定姫とか言う女の情報が必要なんだろ」

同じく空中に浮かんでいたもう一人の男が尋ねた。

彼もまた足から炎が吹き出ており、しかしそれは荒々しい赤の炎だった。

尋ねられた紫の炎の男は長い髪を後ろに払った。

「別に力づくでもかまいませんが、そうなれば我々として無傷ではい

られないでしょう。何より彼女に傷を付ける」

「チツ……あの時と同じか」

赤い炎の男は舌打ちを漏らした。

「しかしあの時と違い、彼は孤軍です。例の虚刀流はあつちの世界ですし、我々にとつての邪魔者は彼一人」

紫の炎の男はふつ、と笑った。

「こちらに大いに有利ですよ。戦況はこちらに傾いている」

「……とりあえず、今回は退くか」

「ええ」

そして二人の男はその場　その空を後にする。

この時代の日本には無いはずのコートを着た、奇妙と言ってもまだ足りないぐらい奇妙な二人組だった。

七花は買物袋をさげて帰路についていた。

肩にはリボンである。

リボンは今回のことは七花にとっていい経験になったと満足している。

七花も七花で、並盛を見て回れて有意義な一日だったと感じていた。

二人とも、それぞれそれなりに楽しんでいたのである。

つい今までは。

「アルコバレノ！」

いきなり目の前に現れた二人の黒曜生に、リボンは眉をひそめた。

一人は城島犬、もう一人は柿本千種である。

別に二人が一緒にいることはいつものことだ。並盛にすることも、

まあ珍しくない。

問題は、どうやら自分を探していた様子の二人の剣幕である。わざわざ彼らから自分に関わってくるとは、本当に珍しい。

「つて、うわ！ そのデカイ奴誰だびょん!!」

「身長のこと言われるの何回目だろ……」

騒ぐ犬に、七花は遠い目をした。

「こいつは新しくファミリーに入った鑓 七花だ。それより、一体どうした？」

リボーンに訊かれ、城島の代わりに千種が答えた。

「クロームがいなくなった」

「……!」

リボーンは眉をぴくりと動かした。

「何だと……」

「? クロームって誰だ？」

七花が困惑したようにリボーンを見た。

「ツナの守護者の一人だ。しかし……いなくなったっていうのは本当か？」

「本当ら！ 昨日から黒曜ランドに戻らねーんだびょん!」

「昨日銭湯に行ったきり戻ってこない。知らない？」

「いや、見てねーな」

リボーンは首を横に振った。

「……あんたはどうなんだ？」

千種は七花を見上げた。

「右目に眼帯を付けた娘なんだけど」

「いや……そもそも俺、昨日外出てないしな」

七花は顔をしかめた。

「……とりあえず、俺達はツナ達にもそのことを知らせる。俺達の方もクロームを探そう」

「な！ おまえらの力は借りねー……」

「解った」

「柿ピー!？」

荒れ狂う犬に対し、千種は冷静に頷いて踵を返した。

「こっちはこっちで探すから……そっちはそっちで探して」

「解ったぞ」

リボーンが頷くと、千種はすたすたとその場を離れていく。

「ちよっ……おい待てよ柿ピー!？」

犬も引きずられるように千種の後を付いていった。

その後ろ姿を見つめながら、リボーンは考える。

（クロームがいなくなった？ 偶然じゃないとしたら、この間の真庭忍軍って奴らに関係あるのか？）

真庭忍軍。暗殺専門のしのび集団。異常な際物達。

七花からはそう聞いた。

七花が戦った、または会った真庭のしのび達は、どこか人格が破綻していたという。

だが七花の話を信じるなら、彼らは壊滅したはずだ。

その経緯を七花は話しながらなかったが、壊滅した真庭の里を見たというから間違い無いだろう。

いや、例えば真庭忍軍が滅びていなくても、現代にいるはず無い。しのびなど、時代の異物としか言いようがないのだから。

（一体何が起きてるんだ？ 七花のことといい、ありえないことが起きている……？）

最強の殺し屋と呼ばれるリボーンでさえ、現状では予測も推測も立てられなかった。

女は気配を消しながら屋根の上に立っていた。

「ふふふ……見付けられるわけ無いじゃない。見付かるわけ無い。だって探してる女はもうあたしなんだもの」

女はにいと笑う。刺青だらけの顔で笑う。

袖の無いしのび装束、全身に巻いた鎖、そして肌という肌にてた

らめに刻まれた刺青。

奇妙な姿の女は、笑う。

「虚刀流ちゃん……今はとりあえず我慢してあげる。でも覚悟してな。あんたは必ずあたしが殺害してやる」

女は笑う。眼帯で隠れてない、片目を細めて。

「真庭忍軍十二頭領が一人、この真庭狂犬ちゃんがね！」  
女は笑う。

幼さの残る顔に不釣り合いな、狂気に見える顔で。



## 第六録 二人の頭領

「ええ！ クロームがいなくなつた！？」

ツナはベンチから立ち上がった。

並中の通学路にある公園である。そこに、ツナ、獄寺、山本、そしてリボンと七花が集まっていた。

リボンからクロームがいなくなつたと聞き、ツナ達は驚きを隠せない。

「城島や柿本すらどこに行ったか解らないとなると、心配ですね」  
獄寺の言葉に、ツナは「うん……」と頷いて再びベンチに腰を下ろす。

「もしかしたら十日前に七花を襲つた真庭忍軍が関係してるかもしれないねえ。そこでだ、七花」

肩に乗つたりリボンに名指しされ、七花は「ん？」と首を傾げた。  
「何だ？」

「参考までに、真庭忍軍の戦い方を教えてくれるか？」

「まにわにのことをか？」

「……その言い方だと随分間抜けに聞こえるが、まあいい。おまえの知る真庭忍軍と同じかどうかは解らないが、戦略を立てる材料になるだろう」

「ん」

七花の眉間にしわがよつた。

「えっと……確かまにわに、真庭忍軍は集団行動をしないしのびなんだ」

「集団行動をしない？」

「ああ。する必要が無いって聞いた。忍法が忍法だから」

そして七花は真庭忍軍の忍法の説明し出す。

あり得ない、忍法を。

「まず真庭蝙蝠って奴の忍法なんだけど……確か骨肉細工、だったかな？」

「どういう忍法なんだ？」

「一言で言つと、姿を変える忍法だ。変化の術とかそういうのじゃなくて、自分の身体を粘土みたいに形を変えるんだ。実際俺の目の前で俺に成つたし」

「……狸とか狐の妖術みたいなのじゃなくてか？」

「うん。髪の色や長さも変えられてさ、内蔵とかも全く一緒らしい。そこは本人に聞いたんじゃないけど」

あいにくツナ達には全く伝わらなかった。

ただ、リボンだけが何となく察する。

結果、あまり見たくない忍法だなという結論に至った。

「次は？」

「次は……真庭喰鯨って奴。そいつの忍法は……えっと確か、渦刀。腕に巻いた鎖に繋いだ刀を振り回して攻撃するんだ。……それを逆手に取られて瞬殺されたけど」

「……次」

「あ、うん。えっと次は真庭狂犬。こいつは、他人の身体を乗っ取る忍法を使った。狂犬発動って言つたかな。ただ、狂犬自身が女だから女しか乗っ取れない……らしい」

「次は」

「真庭川獺。こいつは物の記憶をたどることができたらしい。記録辿りって言つたかな」

七花はそこであ、と声を上げた。

「誰かのかは解らないけど、忍法足軽って忍術もあつた。自分や物質の体重を無くす技だ」

「……渦刀ってのはともかく、他はもはや妖術じゃねーか」  
さすがのリボンも頭が痛くなってきた。

「あと……」

「まだあるんですか!？」

ツナがすつとんきょうな声を上げた。

「いや、あと一つ。真庭鳳凰って奴の忍法で、命結び」

「命、結び……?」

「……相手を殺して、その身体の一部と能力を自分のものにする忍法だそうだ」

「……」

「実際鳳凰は自分の腕を自分で切り捨てた後、別の奴の腕を引っ付けてた」

「……」

最後にとんでもない忍法が来た。いや、最初からとんでもなかったけど。

「……それをもし 本当に奴らが真庭忍軍だとして、そんな忍法使ってくるやつかいだな」

リボーンが七花の肩の上で考え込んだ。

「……まにわにの奴らは、忍者は卑怯卑劣が売りだっていった」

「となると正攻法でこないな」

獄寺は眉間にいつもよりしわを寄せた。

「……それにも、そんな奴らとよく知り合えたよな、七花さん」

山本の言葉に七花は苦く笑った。

「色々合つてな」

その笑みに虚を突かれ、ツナ達は言葉を失う。

七花のその表情の理由をツナ達を知るのは、もう少し先になることになる。

とは言え、それはそう遠く無い未来であつた。

ツナ、リボーン、七花は帰路に着いていた。

ツナはさつきから、七花の顔をちらちらと見ている。リボーンは勿論、七花もそれに気付いていたが、無反応でいた。

ツナは、先程の七花の反応について考えている。

普段、山本ばりに能天気というかおおらかな七花のあの顔には、何かあるはずだ。

真庭忍軍と一体何があったのか。浅からぬ因縁がありそうだが……

ドンッ

「ぶっ!？」

突然立ち止まった七花の背に、ツナは顔をぶつけてしまった。

「ど、どうしたんですか？」

「綱吉、前……」

「え？」

七花に示された通り、ツナは前に目をやった。

「!？ ク、クローム!」

ツナは驚いて前に出る。

前方、数メートル離れた先に、少女が一人たたずんでいる。

髑髏が描かれた眼帯で片目を覆っている独特な髪型の少女。間違いない。クローム髑髏だ。

「クローム、黒曜の二人が心配してたよ。一体どこに……」

「綱吉、待て!」

七花が進み出ようとしたツナの肩を掴んだ。

「七花、一体どうした？」

リボーンも妙な顔をしている。

「あいつは、仲間のクロームだぞ」

「違う……いや、身体はそうなんだろうけど……」

七花の妙な言い種に、ツナは再度クロームを見た。

そつえば、とツナは片眉を上げる。クロームは黒曜の制服を着ていない。

着ているのは、袖の無い、妙な着物である。しかも身体中に鎖を巻いていた。しかも、全身にでたらめに黒い刺青が走っている。

自分の知ってるクロームじゃ、ない。

「クロー、ム？」

ツナはクロームの顔をじいつと見つめた。

「綱吉、そいつはくろーむ髑髏つて奴じゃないと思うぜ」

七花は前方の少女を睨み付けた。

「倒した、はずなんだけどな」

「……意外と気付くのが早いじゃない、虚刀流ちゃん」

彼女はクロームの声でそう発し、クロームの顔で笑った。

しかしその口調も表情も、クロームのものじゃない。ツナの知る、クロームじゃない。

「改めて、久しぶりね、虚刀流ちゃん。そして初めまして、ボンゴレ十代目ちゃん」

クロームは、クロームではない者の笑みと口調で高らかに言った。

「真庭忍軍十二頭領が一人　真庭狂犬ちゃんよん！」

獄寺と山本は妙な気配を感じて顔を上げた。

「獄寺……」

「ああ……」

二人はあくまで平静に振舞い、しかし警戒心を強くして歩く。付けられてる。二人はそれに気付いた。

隠そうともしてないのだろう。どこからか、強い殺気を感じていた。

どこから来るのか。正面か、はたまた背後からか。どちらから来ても対応できるように二人は歩きながらも身構えていた。

しかし。

「ああいいですね　いいですね、いいですね、いいですね」

上からとは予想していなかった！

二人は突然降ってきた声に驚き、顔を近くの民家の屋根に向けた。  
「殺すというのは、本当にいいですね」

声の主である男は、獄寺と山本に笑いかけた。

前髪を垂らし、袖の無い妙な着物を着た、全身に鎖を巻いた男である。特に、腕に巻いた鎖が異様に長く、腰の左右に帯びた刀に繋がっている。

「おおよそ現代にそぐわない（いつの時代でもそぐわないだろう）格好の男に、山本はともかく獄寺はおおげさなほど顔をしかめた。

「誰だ、てめえは。妖しさ満載の格好と登場方法しやがって」

「おや、これは失礼。そういえば私、名乗ってもいませんでしたね」男は笑みを深め、「堂々と名乗れるのはいいですね」と言った。

「さて、初めまして獄寺隼人さん、山本武さん。私は真庭忍軍十二頭領が一人、真庭喰鯨と言います」

「……！」

二人は目を見開いた。

「喰鯨って……！」

「七花さんが瞬殺されたって言ってた……！？」

七花から聞いた情報を思い出す。

いやそれよりも、なぜ。

なぜ七花と同じく過去の人間であるはずの真庭喰鯨がここにいるのだ！？

「ああ、驚くのも無理はありません。確かに私は一度死んでますからねえ。生き返ったのは奇跡と言えましょう」

喰鯨の言葉に、二人は眉をひそめた。

死んだ？ 生き返った？ 何をわけの解らないことを。

「妙なこと言つてねーで早く降りてきやがれ！」

「勿論です。私は貴方達と戦いに来たんですから。ああ、楽しいですね、楽しいですね、楽しいですね。戦いというのは本当に楽しいですね」

そう言つて喰鯨は腰の二本の刀を抜いた。

ただ抜いたのではなく、繋がれた鎖を腕を振り上げること引つ張つて、そうして抜刀したのだ。

そしてそれを自分の両横で、それぞれ縦向きに回転回転させ始めた。

まるで水車のようなだった。しかし速度は水車の非ではない。

瞬殺されたと聞いていたので大した忍法でないと思つていたが、あんなのにぶつかったら、たちまち肉塊と化してしまう。

「な、な……」

「これぞ忍法渦刀。私が『鎖縛やちくの喰鯨』と呼ばれるゆえんですよ」  
喰鯨はそう言つてに、と笑い、楽しいですねと呟いた。

「人殺しというのは楽しいですね」

たん、と屋根を蹴つて、喰鯨は二人の元へ飛び降りた。

旋回する刀が獄寺と山本の頭上に振り下ろされる。二人は慌てて左右に避けた。

「っの！」

獄寺は六本のダイナマイトを投げる。ダイナマイトは喰鯨の上空に展開され、落下していった。

が、喰鯨が腕を上げると渦刀によつてダイナマイトは斬り裂かれ、防がれてしまう。

「くっ……」

「現代の武器ですね。ですがこれで私は倒せませんよ」

喰鯨は凶悪な笑みを深めた。

一方山本は、攻撃をしかけかねていた。

接近戦を得意とする自分は、相手の隙を見て渦刀をかいぐるしかない。しかし喰鯨がその隙を与えるとは思えなかった。

無理にあの技を止めようとすれば、刀を吹っ飛ばされない。  
いつそのこと、特式で……

「一つ聞いていいか？」

獄寺が突然口を開いた。

それは相手を油断させようという試みだったが、うまくいかなかった。

喰鯨は油断しない。殺気を緩めたりもしない。

「何でしょう？」

ただ、そう返す辺りは律義だった。

「おまえ、俺達の名前を何で知ってた？」

「ああ、そのことです。申しわけありませんがそれにはお答えできません。それに答えたところで何の意味も無いじゃないですか」

そう言った喰鯨の刀に、ボオオツ、と炎が灯った。

「もうすぐ貴方達は、死ぬのですから」

それは獄寺と山本も馴染みのある赤い炎。

嵐属性の、死ぬ気の炎だった。

「何……！？」

「またまた驚いても無理はありません。しかしそれにいちいちお応えするほど私は優しくないので、そろそろ終わらせてもらいます。」

ああ いいですね、いいですね、いいですね」

喰鯨の指をよく見ると、鎖に隠れて一つのリングがはまっていた。そこから死ぬ気の炎が吹き出している。

しかしそれが解ったところで何になるのだろう。

喰鯨は、気付けば獄寺の目の前に迫っていた。

「獄寺！」

「っ……！！！」



「いいですね、人殺し」

嵐の炎をまとった渦刀が振り下ろされる  
！

「待て」

しかしその一言で。

一旦その場の全てが止まった。

## 第六録 二人の頭領（後書き）

狂犬さん、喰鯨さん登場です。

書いてみて解りましたが喰鯨さん口調難しいですね。雲雀さん並にキャラが解らない……；；；

ていうか今気付いたけど七花、了平と絡んでない……！？

でも了平、七花に会ったらきつとボクシング部に誘うから大騒動になりそうだなー

まあいずれ絡ませなければいけないんですが……では！

## 第七録 真庭忍軍

一瞬思考が停止した。

悪い冗談だと思った。

ありえない夢だと思った。

でもこれは悪い真実で。

ありえない現実だった。

「真庭……狂犬……!?!」

「綱吉、おまえは下がってろ!」

呆然とするツナを更に後方に押しやり、七花はすぐさま構えた。

「何で生きてんのか解んねーけど、真庭狂犬で間違い無いんだな」

「そう。今名乗ったでしょ」

クロームは 否、クロームの姿をした真庭狂犬は、にっこり笑った。

いや、ざたり、という表現の方がしっくり来る笑い方だった。

それはクロームが浮かべるはずの無い笑みであり、ツナがクロームではないと完全に理解するには充分だった。

「なるほど、身体を乗っ取る忍法か。むしろ憑依と呼べる代物だ」

リボーンは冷静に、現状を解析し始めた。

「しかし理屈が解らねー。どうして身体を乗っ取れる?」

「……身体中に刺青があるだろ」

七花は厳しい表情を崩さないまま説明を始めた。

「あの刺青が、あいつの本体 だと思う。実際別の身体に移り移る時、あの刺青は生物みたいに別の身体に移っていった」

「……なるほど」

七花の説明はつたない。つたない以上に説明しようが無い。

しかしリボンにとって、理解するのにはそれだけでこと足りた。問題は、である。

「どうやってクロームから狂犬を追い出す？ あれじゃあクロームを傷付けずに狂犬だけを倒すことはほぼ不可能だぞ」

「簡単だ、刺青だけを攻撃すればいい」

七花は自信ありげに言った。

「虚刀流には、鎧崩しの技がある。飛花落葉って技でな、俺は一度、それで狂犬を倒している」

「そう。あの時はそのせいで、あたしはやられた」

狂犬が言った。こちらも 自信ありげだ。

「でもね、虚刀流。それを防ぐ方法はとっても単純なのよ。もっとも、この身体だからこそ可能な戦法だけどね」

「……？ 何を」

「接近せずに戦えばいい。それだけのことよ」

そう言って狂犬は、手に持っていた三叉槍の石突で地面を叩いた。力強くではないが、ぶつけるように叩く。

ビュビュッ

「…… な、あ！？」

七花が眉をひそめた瞬間、彼の腕に何かが巻き付いた。

紫色の触角だ。それが幾つも七花の両腕、だけでなく足や肩にまで絡み付いてくる。

振り払おうとしても、ますます巻き付いてきた。

「な、何だこれ！？」

「げ、幻覚！？」

ツナの声に七花は目を見開いた。

「こ、これが幻覚……？ でも、ぐっ、巻き付いてきて……」

「当然よ。それはただの幻覚じゃない」

狂犬は片手を掲げて見せた。

細い指に不似合いな、ごつい輪がはめられている。環にはめ込まれた石からは、藍色の炎が吹き出していた。

七花は始めて見るが、知識としてなら知っている。

確か 指環だったか？

しかし 指環から炎が出てくるなんて、そんなことありえるんだろうか？

「霧属性の死ぬ気の炎によって強化され、実体を得た幻覚、有幻覚よ！」

「死ぬ気の、炎……？ ゆ、幻か……っあゝ！」

「絞殺されな、虚刀流！」

気管を抑え付けられ、七花の息が強制的に止められた。

酸素が脳に行かなくなり、意識が薄らいでいく……

ズガアアアアンツ

どこかで聞いたことがあるような音が響いた。

いつだったか。そうだ、あの時の。

とがめを貫いた『刀』と同じ音だ。

そう思うと同時に触角の力が緩んだ。

「げほっ、ごぼごぼっ」

「忘れるな、真庭狂犬」

咳き込む七花の隣で、リボーンが硝煙を上げる銃をしまった。

「俺の生徒もいるぞ」

幻覚の要の一つである三叉槍。その柄に、ツナが拳を叩き付けていた。

額にオレンジの死ぬ気の炎を灯して。

「幻覚を解け、真庭狂犬」

「はっ……誰があんたの命令なんか聞くか！」

狂犬は鼻で笑い、三叉槍をぶんと振った。

ツナが後退するのを受け、三叉槍でまた地面を叩く。

今度はツナの頭上に巨大な岩が落下していった。

当たれば致命傷ではすまないだろうそれを、ツナは冷静に見つめながら右手を振った。

とたん、炎がツナの拳から放たれる。炎は岩を砕き、辺りに石片をぶちまいた。

その合間を縫って、狂犬はツナに特攻をかけた。

突き出される槍。ツナは紙一重でそれを避ける。

しかしそれに呼応するように、狂犬は槍を振った。

狂犬は、ツナの動きに合わせて槍を操っているのだ。

「っ……!？」

「虚刀流ちゃんから聞いてない？ あたしは身体を乗っ取るだけじゃない。記憶を引き継げるんだ。今まで代えてきた身体は千や二千じゃない。そのほとんどが武芸に秀でた女武者だった。だから！」

槍の先がツナの前髪を掠めた。

「くっ……」

「槍術や棒術も、あたしは使えるんだ！」

少しずつ、ツナが押され始めた。

七花と戦った時。狂犬の経験は敗因となってしまった。

何千という経験ゆえに、七花に動きを読まれてしまったのだ。

だがツナは、七花とは違う。

確かにツナは超直感によって相手の動きを読むことができる。

しかしそれは能力によるものであり、七花のように武芸に精通しているからではない。

こうした後はこうするという、そういう武芸をたしなむ者の常識すら、ツナは知らないのだ。

だから無数の経験を詰め込まれた狂犬は、ツナにとって脅威以外の何物でもない。

第二に、狂犬の姿だ。

たと言動が違い、身体中が刺青まみれだとしても 顔は、その身体は、クロームのものなのだ。

その現実が、ツナの動きを鈍らせていた。

もし七花か、それかりボンなら、クロームを助けるために多少の怪我也やむ無しと考えて反撃できただろう。

しかしツナは、そんな考えはかすめもしなかった。

助けたい。攻撃したくない。怪我をさせたくない。

それだけが、頭の中でぐるぐる回っていた。

当然それは隙になり、その隙を、熟練したしのびである狂犬が見逃すはずがない。

「終わりよ！」

狂犬の槍が、ツナの腹を捉えた。

「がっ……」

ツナの動きが止まる。

三叉槍の先は、ぶすりとツナのみぞうちあたりを貫いていた。

狂犬がその槍を抜くと、ツナは重力に従うように横倒しになった。

「……っの、やるおおおおおおおおお！」

七花が咆哮を上げた。

動きを封じ続けていた触角を力任せに引きちぎり、狂犬に走り寄る。

「なっ」

「虚刀流 『薔薇』！」

七花は爪先による蹴りを狂犬の腹に喰らわせた。

勢いに任せた攻撃だったが、すんでで手加減したのでクロームの身体に傷は無い。

しかし、狂犬の動きを止めるには充分だった。

「虚刀流」

七花はたたみかけるように、あるいは狂犬を逃がさないように、次の動作に移っていった。

構えるのは虚刀流五の構え 『夜顔』だ。

両足を肩幅ほどの広さで左右に揃え、両手はゆるい平手で肘を折り畳むように胸の前に置く。

心なし前傾気味のその構えから繰り出されるのは、五の奥義！

「『飛花落よ』……！？」

しかし、それは不発に終わった。

数十ほどの、手裏剣によって。

まるで銃弾のごとく上空から迫ってくるたくさんの手裏剣に、七花は放とうとした両の平手を引っ込める。

そして反射的に後ろに跳んだ。被害を受けないよう、ツナを抱えてだ。

その半瞬後に手裏剣はコンクリートに突き刺さった。

それこそ本当に銃弾のように、コンクリートの地面を穴ぼこだらけにしていくな。

そして全ての手裏剣が突き刺さってほっとした瞬間、辺りを煙が覆った。

煙幕を張られたらしい。しかし一体誰が。

「げぼげぼ。く……おい、綱吉！ 大丈夫か？」

視界が明瞭にならないために狂犬を探すのは諦め、七花はツナに声をかける。

ツナは固く目を閉じていた。息はしているし、小さく返事をしたので、意識もあるようだ。

しかし傷が酷い。制服にはじわじわと紅い染みが広がっていた。

「っ……！ 綱吉！」

「七花、揺らすな」

と、煙からリボーンが姿を現した。

「リ、リボーン」

「応急処置をする。救急車も呼んでおいた」

「あ……！ 狂犬は……」

七花は煙が晴れ出したことに気付いて辺りを見渡した。  
いない。煙幕にまぎれて逃げたのか、全く見当たらなかった。



「どこ行っただ……?」

七花は急に様々なことが起こったせいで、頭が付いていけてなかった。

倒したはずの狂犬が生きていて、ツナの仲間の身体を乗っ取って、そしてそのツナは。

「綱吉、大丈夫か!？」

七花は顔を歪めてツナの顔を覗き込んだ。

「は、い……」

小さな声が帰ってくる。しかし、さっきより弱々しい。

「こう見えてツナはそれなりに鍛えてんだ。これくらいでどうにかなったりしねえ」

「……」

リボーンの言葉を聞きながら、七花は無言でツナを見下ろしていた。

混乱する頭を、普段ほとんど使おうとしない頭を、必死に落ち着かせようとしながら。

狂犬は抱えられていた。

片腕で、荷物を運ぶようにされながら。

「下ろしなさいよ!」

「下ろしたらまた虚刀流んところ行くだろ。怒られんの俺らなんだけど」

狂犬を抱えた男は、家々の屋根を走ったり跳び移ったりしながら顔をしかめた。

「んなこと知らないっつーの! 虚刀流を殺害してやらないと気が収まらないわよっ」

「だーから、虚刀流は殺したら駄目なんだって」

狂犬を抱えた男の隣を走る男が肩をすくめた。

「第一よー」

狂犬が見上げると、彼女を抱えた男はきやはきやはと笑った。

耳障りな、甲高い笑い声だ。

「俺達生き返ってんのに、虚刀流に仇討ちはおかしくねえ？」

「う……」

狂犬は言葉につまる。

虚刀流の居場所を聞いて、勢いで行動だったのである。言いわけが思い付くはずがない。

「しかしボンゴレ十代目ってのも、かなり危険人物だねえ」

隣の男がのんびりと言った。

「狂犬が霧の守護者の身体を乗っ取ってたからいいけど、そうじゃなかったら倒されてたな」

「全くだ。虚刀流並にやべえっての、あいつ。つかまじで危なかったぜ。危うくせつかく手に入れた霧のボンゴレリング失うところだった」

噛ませ犬はもうたくさんだ、とため息をつく二人の男。その視線は、狂犬の指にはまった指環に向けられている。

「……そういえば、あたしと一緒に喰鯨が並盛に繰り出していたはずだけど」

抵抗を諦めた狂犬は二人に尋ねた。

隣の男がああ、と答える。

「あっちには」

獄寺と山本は眉をひそめた。

また妙な男が現れたのである。

若い風貌の男だった。すらりとした長身で、伸ばした黒髪をまっすぐに下ろしている。無表情だが、眼光だけがやけに鋭い。

そして喰鯨と同じ、袖の無い妙な着物を着ている。全身には鎖が巻かれていた。

喰鯨の仲間だということはすぐ解った。服装が同じだし、何より男の一言で喰鯨の動きが止まったのだ。渦刀は発動されたままだった。

「おや？」

喰鯨は首を傾げ、男を注視した。

「どうしてここにいますか？ 狂犬以外、私が彼らを襲うことは知らないはずですが……おかしいですね、おかしいですね、おかしいですね」

「おぬしら二人の行動は、正直解りやすい。狂犬も今頃、同じ獣組の二人に確保されているだろう」

男は表情を全く動かさずに言った。

そして「さて」と獄寺と山本に向き直る。

「仲間が世話になったな。詫びもできんが許してくれ」

喰鯨とは対象的な印象に、二人は戸惑う。

とりあえず獄寺は男に尋ねることにした。

「誰だ、おまえ」

「うむ……本来ならまだ名乗るべきで無いだろうが、どうせそいつは名乗っているだろうしな。狂犬も名乗ってるだろうし、しょうがあるまい」

男はやれやれとばかりに首を振り、名乗った。

「真庭忍軍十二頭領が一人、真庭鳳凰。一応、よろしくと言っておこうか」

やはり、この男も真庭忍軍だったか。

いや、それより気になるのは。

「あ、あのさ。その喰鯨って人の時も思ったけど、山本が遠慮がちに口をはさんだ。」

「十二頭領って、何？」

「文字通り、真庭忍軍を束ねる十二人の頭領だ。我も喰鯨も、その一人なのだ」

「十二人の頭領って、んなに統率者が必要かよ」



「おい、携帯鳴ってるぜ」

「あ……おう」

獄寺はズボンのポケットから携帯を取り出し、通話ボタンを押した。

「もしもし。あ、リボーンさんスカ？ はい。……え……？」

獄寺は沈黙した。

しばらく説明を聞いたのち、通話を切る。

「獄寺？ 小僧、何て？」

「……十代目が」

「ツナ？ ツナがどうした？」

山本の声に答えず、獄寺は走り出していた。

「お、おい獄寺！？」

「病院行くぞ、山本！」

戸惑う山本を尻目に、獄寺は必死に走っていた。

ツナの無事を、必死に祈りながら。

真庭狂犬、真庭喰鯨、真庭鳳凰。

この三名の登場はのちの戦いの序章でしかないと、ボンゴレと虚刀流はまだ知らない。

## 第七録 真庭忍軍（後書き）

鳳凰登場です。ここまで来ると解ると思いますが十二頭領全員出します。

次回は否定姫 & a m p ・ジヨットオンリーでいこうかと思っています。  
では次回！

## 第八録 消失

「青い……彼岸花？」

ジョットは首を傾げた。

彼と、そして否定姫が歩いているのは、薩摩に続く街道だった。

当初の目的地 濁音港に向かっているのである。

本当は七花が寄りたいと言い出した港町なのだが、七花がいない以上、彼を探す目的も含めてそこを目指していた。

その道中、成り行きで同行者となったジョットから先日謎の男達が使っていた死ぬ気の炎について説明を聞いた。

死ぬ気の炎とは人体に流れる波動が元となる炎で、いわば生命力を炎に置き換えたものだという。一般人が死ぬ気の炎を操るには特殊な指環を必要とするらしい。

そういえばあの男達の指には指環がはめられていた気がする。

特に気にしていなかったが、彼らがそんな似合わないものをはめていたのも納得できた。

死ぬ気の炎には七種あってそれぞれ特性があるらしいが、否定姫はそれを聞いていない。聞こうとも思わない。

そんなものを知ったところで、自分がどうこうできることじゃないだろう。

その後、否定姫は七花がどうしていなくなったかを尋ねられたので説明した。

しかし、否定姫にもよく解っていないのである。

ただ、七花がいなくなったあの時、道端で彼岸花を見たのである。季節外れというのもあったが、何より否定姫が驚いたのは花の色である。

青だった。本来なら鮮やかな赤であるはずのその彼岸花は、深い青だったのである。

七花もその花を珍しがって、手を伸ばした。そしたら　いなくなっていた。

まるで最初から存在していなかったように、七花はその姿を消したのだった。

唐突過ぎた。ただ、青い彼岸花だけが変わらず咲いていた。

「ふむ……それは確かに妙な話だ」

ジョットは顔をしかめて考え込んだ。

「どこに行ったのか……やはり俺と同じように別の時代、別の世界に行ったか」

「まあ考えつつあってしょうがないわよ。予想予測立てたって現状が好転するわけ無いし。七花君が戻ってくるわけじゃないしさ」

否定姫はひらりと手を振った。旅の同行者がいなくなったというのに、何ともお気楽である。

そんな彼女の本質を早々に見抜いていたジョットは苦笑しつつふと、今気付いたように「そういえば」と視線を否定姫の頭に向けた。

正確には、頭に付けた仮面か。

「話は変わるが、その仮面は何だ？　前々から気になっていたんだが」

否定姫は目をぱちぱちさせた後、「ああ、これ？」と頭の仮面に手をやった。

まるで縁日での子供のように頭の右側に付けられた仮面。縦に『不忍』と書かれたその仮面は顔の上半分を隠すぐらいの大きさで、形をよく見れば男性の顔に合わせたものだというのが解った。

否定姫はその仮面に触れ、けらっと笑った。

「これはさ、昔私の部下だった根暗暗黒面男が付けてた仮面なの」  
「……酷い言いようだな」



「いいじゃない、私の元部下をどう言おうとさ。まあそいつは死んじゃったんだけど、この仮面は私が与えた物だから返してもらったのよ」

「そうか……大切な部下だったのか？」

「まさか。私に大切な部下なんかいないわよ。まああいつのこと、信頼してなくもなかったわ。何だかんだで、あいつには色々助けられたしね」

否定姫は終始楽しそうに話していた。

そこには哀愁も何もない。

ただの、笑い話をしているかのようなだった。

「まあそいつの存在は、今は否定しちゃいましょう。それより、まずはやっぱり七花君よね」

別に今の話に思うところがあつたからではないだろうが、否定姫は話を最初に戻した。

「ほんとにどこ行っちゃったのかしら。この間立てた仮説が本当なら、探しようがないじゃないの。ま、私までここじゃないどこかに連れてかれるなんて事態にならなかっただけ、まだまして感じ？　そう言つた意味じゃ、ちよつと慌てちゃつた過去の私を否定できるわね」

「いつも思うが、なぜおまえの言動はそう否定ずくめなんだ……」  
ジョットはそう言いつつ、会話を楽しんでいるようだった。

このジョットという男、否定姫と同じくどこか余裕を残した雰囲気なのである。現状を楽しんでいる節もある。

否定姫とジョット。そういった意味では似た者同士だった。

濁音港に着いた。

着いたはいいが……様子がおかしい。

何というか、港町全体が落ち着かない雰囲気になっている。

否定姫とジョットは、そんな張り詰めた空気をすぐ感じ取れたが、

しかしその理由が解るのは旅籠を決めてからである。

奇しくもそれは、かつて奇策士と鑢七花が泊まった旅籠だった。

「ふうん……校倉必が失踪ねえ」

旅籠の人間からこの町全体の様子のことを尋ねたところ、そんな解答が返ってきた。

校倉必。濁音港を拠点とする海賊の船長だ。

否定姫は実際に会ったことは無いが、確か七花と、この町の名物である大盤で戦ったことがある男だ。

一人の女をかけて。

校倉はこの町では人望が厚い海賊で、権力も町長より上だそうだ。そんな男の失踪。落ち着かなくなるのも解る。

「七花君といい、校倉必といい、なーんでこう人がいなくなるかしらねー」

否定姫は畳の上に腰を下ろしながら眉をひそめた。

「関係が無いとも言い切れないな。明日その鎧海賊団とやらに会ってみるか」

ジョットは外套を脱ぎながら言った。

「会いにつて……相手は海賊よ。正攻法が通じる相手でも無いでしように」

「その点は大丈夫だ。海賊ではないが、似たような輩と交渉の場を設けたことは多々ある」

ジョットは余裕ありげな笑みを浮かべた。

「へえ……元の時代では何をしてたのかしら？」

「犯罪組織のかしらだ」

さらりと言われた言葉に、さしもの否定姫も脳の活動を停止した。しかし、すぐ我に返って納得する。

「なるほど、ねえ。道理で」

一般人らしくないと否定姫は呟く。

人のことを言えた立場ではないが、彼の立ち姿は一般人のそれで

はない。

戦う者の立ち姿であり 人の上に立つ立ち姿だった。

「んじゃ、話し合いは任せたわ。私は見物でもしてるわよ」

「投げやりか」

ジョットは少しかだけ顔をしかめた。しかし早々に切り替えたのか、考え込む仕種をする。

そんな彼を、否定姫はじっと見つめた。

この男は七花とも、かつての部下である左右田右衛門左衛門とも違う。

それは当然なんだろうけど、同じ人の上に立つ者であるかの家鳴家八代目将軍と、随分な差だ。

八代目将軍、家鳴匡綱。

実に 度量も器も大したこと無い男だった。

もし彼が上に立つ者としての実力があつたら、何か変わっていたろうか。

いや、変わらなかったに違いない。

変わらず、同じ結果を生み出してたに違いない。

例えかの男がどれほどの実力を持っていようと、歴史的に見れば些末なことだ。

逆に あの不愉快な女は、多少歴史を変えたのかしらね。

否定姫はかつての宿敵を思い出し、ふっと笑った。

皮肉なものだ。歴史を変えたあの奇策士が死に、歴史の改竄に失敗した自分が生きているとは。

あるいはこれも 運命か。

「……どうした？」

気が付けばぼうつとしていたらしい。ジョットの声に、否定姫ははつと現実に戻された。

「何でも無いわ」

「そうか。……しかし妙だな」

「何が？」

否定姫は首を傾げた。

「どうもこの町に入ってから、付けられているというか、見られている気がするんだ」

「……この間の奴らかしら」

否定姫はジョットの言葉にますます首を傾げた。

「おそらくは。まさかここで襲うことも無かるうが……可能性が皆無でもない」

ジョットの瞳が、みるみるうちに真剣になっていく。

その変化に否定姫はというと。

「そんなに気張んなくてもいいじゃない。身構えようが何だろうが、来るもんは来るんだしさ。むしろ気を抜いてた方が対処しやすいもんよ」

「……真剣さのかけらもない助言だな」

あきれた顔のジョットに対し、否定姫はあくまで明るい。

「私に真剣さを求められてもねー。否定的な私は真剣さえ否定するわ。それこそ私だもの」

否定姫のからからと笑う様に、ジョットは黙るしかなかった。

ジョットは思う。なぜ自分はここにいるのだろうと。

本来ならこのように肉体を持って存在することすらできないはずなのに。

なぜならジョットという個人はすでに故人であり、今はある物に宿る『記憶』でしかないからだ。

だから、だからこそ、自分がこうして存在し、否定姫という女性に会ったのは必然だと感じていた。

決まっていたかのごとく。運命と言うべきなのだろう。

「だから」

旅籠から少し外れた原っぱ。ジョットは自分と向かい合う二人の男を見据えた。

「おまえ達が俺の前に現れたのも、偶然ではないだろうな」

「さすがは初代ボンゴレボス、ボンゴレエ世<sup>フリーモ</sup>」

男の一人が言った。

長い髪を頭の後ろで一つにまとめた男である。中性的な顔立ちで、唇には笑みをたたえていた。

もう一人の男は、赤い髪をしていた。無精髭のせいで、同い年であろう長髪の男より老けて見える。

二人とも同じようなコートを着ていた。中に着た服装も同じ。所属している組織が同じという証だろう。

ただ、彼らの部下らしき男達は皆着物姿だったが。

「しかし」

ジョットは足元に倒れている男達と二人の男を見比べた。

「人のことを言えた義理では無いが、随分時代錯誤な格好だ。いや、この場合時代を先取ったと言っべきか」

「ハハン、その様子だと我々がどうい存在かはすでに解っているようです」

長髪の方は笑みを深めた。無精髭の方は仏頂面のままだが。

「さて、まずは名乗っておきましょう。真六弔花<sup>リアル</sup>の一人、桔梗と申します。こちらはザクロ」

名乗りを上げる男 桔梗。その名と真六弔花という言葉に、ジョットは聞き覚えがあった。

「X世<sup>デーチモ</sup>が戦ったマールの小僧の部下か」

「ええ。覚えていましたか」

「あれを忘れる方が難しいだろう。しかし、一体何が目的だ？」  
ジョットは一歩踏み出した。

「彼女に……否定姫に何の用だ？」

「正確には、彼女の持つ情報ですがね」

桔梗は微笑したまま動かない。ただ、隣のザクロの顔が陰しくな

った。

「探し物をしているんですよ。彼女がその探し物の場所を知っているんです。もつとも、用はそれだけではないのですが」

「……」

「彼女の祖先は少々特殊でしてね、それに関連しているのですが」

「……そうか」

ジョットの額に炎が宿った。

「事情は解らないが、やはりおまえ達に彼女を渡すわけにはいかないな」

「……話し合いの余地はなさそうだな」

ザクロが初めて口を開いた。

「なら話は早え。こいつを殺して、あの女を手に入れる」

「……ザクロ、もう少し言葉を選びなさい」

桔梗はザクロの言葉に少し顔をしかめた。

「しかし気持ちは私も同じですね。これ以上話したとしても不毛なだけでしょう」

「……戦う前に、あと二つほど訊こう」

ジョットは構えを取りながら言った。

「なぜおまえ達がここにいる？」

「諸事情……と行っておきましょう。第一、我々がここに来たのはほとんど偶然ですから」

桔梗はどこかはぐらかしながら答えた。正直、要領を得ない。

「二つ目　鑓七花と、校倉必。この二人がいなくなったことに、おまえ達は関係しているのか？」

「当たらずとも遠からずです」

桔梗の手に、四角い箱が握られた。

一面に丸いくぼみがある、手に乗るほどの大きさの箱だ。

「我々が直接に関係していませんが……我々と協定を結んだ者の能力によるものです。いえ忍法、ですか」

「忍法……？」

「それにこの世界からいなくなつたのは、彼ら二人だけではありませんよ」

ぼうつ、と桔梗が指にはめていた指環から炎が吹き出した。

紫色の炎　雲属性の死ぬ気の炎だ。

「凍空こなゆき、汽口慚愧、彼我木輪廻……四季崎記紀が作りし完成形変体刀十二本を所有していた者は、皆等しく別の世界、別の時代に送られているはずです。もともと」

カチツ、と、箱のくぼみに炎を吹き出す指環の石がはめられた。

「彼らだけではありませんが」

箱から何かが飛び出してきた。

巨大なトカゲ　否、かつて絶滅したはずの恐竜の集団に、しかしジョットはあくまで冷静だった。

「四季崎記紀という者は何者かは知らないし、完成形変体刀も知らないが」

手袋をはめたジョットの手に、炎が宿った。

美しい橙色の炎　大空属性の死ぬ気の炎だ。

「しかしかと言っておまえ達を倒すという意味は変わらない」

「でしようね、では」

雲属性の炎を宿した恐竜が動き出す。

「貴方には退場してもらいましょう」

幾つもの牙が、爪が、ジョットを襲う　！

「たかだかこの程度で俺を倒そうとは」  
しかし。

それらは全て、一匹の例外も無く凍り付いた。

炎を宿していたにも関わらず、いや炎を宿していたからこそ！

ジョットには、死ぬ気の炎で動く恐竜を、彫刻のごとく凍らせることができた。

これこそ零地点突破・初代エディション　！

「笑い種だな。俺を倒したいならば本気でこい、小僧共」

ジョットは余裕を崩さず、むしろ高圧的な言い方で二人に言い放

った。

それは、ボンゴレ最強と呼ばれる男の余裕であり、自信から来るものだった。



## 第八録 消失（後書き）

真六弔花登場。桔梗とザクロでした。

真庭忍軍といい、どうやら私は死んでしまった人を生き返らせるのが好きなようです……

次回はツナ&amp;mp・七花達のターンです。

しかし否定姫の口調、書いてて楽しいな……

## 第九録 地獄華

獄寺と山本は看護師から病室の場所を聞き、その部屋に足を踏み入れた。

「十代目！」

「ツナ！」

叫ぶ声に顔を上げたのは七花と、彼の肩に乘るリボーンだった。

「来たな、獄寺、山本」

「リボーンさん、十代目は……！」

獄寺はその部屋の中心に置かれたベッドに気が付いた。  
そこに眠るのは。

「じ、十代目！」

目を閉じているツナだった。

顔に血の気は無い。しかし寝息は静かで、表情も穏やかだ。

「傷はかなり深かったが、急所は外していたらしい。命に別状はねーぞ」

リボーン言葉に、獄寺はしばらくツナの顔を見た後、安堵のため息をついた。

「よかった……十代目が無事で……」

獄寺は安心したのか、その場に座り込んだ。

「……でも、一体何があったんだ？」

山本もほっとしたのか表情を緩め、しかしすぐ真剣な表情に戻った。

「すぐ話す。その前にここから出るぞ。ツナはさっき、麻酔で眠ったところだからな」

リボンからことのでんまつを全て聞き終えた獄寺と山本は、青い顔で床を見ていた。

「クロームが、真庭狂犬に乗り移られていた……！？」

獄寺は愕然と呟いた。

「つつか、狂犬って……何でこの時代に……」

「七花は」

リボンはすぐ横にある彼の顔（肩に乗ったままなのだ）に視線を向けた。

「狂犬は倒したと言った。だが、生きてた。生きて、この世界にいた」

「……狂犬だけじゃありません」

獄寺はつい一時間ほど前のことを思い出して顔を歪めた。

「実は、先程俺と山本が帰宅している時に会ったんです」

「誰に？」

「……真庭喰鯨と、真庭鳳凰に」

「なっ……！」

驚きの声を上げたのは七花だった。

「そんなはずない。あの二人が生きているはず無い」

「何でそう言いきれる？」

「……二人共、俺が吊った」

喰鯨は手伝いでだが、という七花の言葉に、獄寺と山本の顔色は更に悪くなった。

「つまり……あいつらは死んで……でも、生きてた？」

「生き返った、という表現の方がしっくり来るな」

山本の言葉を、リボンが言い換える。

……場の空気が更に重くなった気がした。

「……つつか、明らかにおかしいだろ」

獄寺は大仰に顔をしかめた。

「そいつといい、真庭忍軍といい。一体何が起きてるって言うんだ

よ」

明らかに自分達の知らない場所で何かが起こっている。

それは解る。解るが、それが何なのか理解できない。

七花の場合はまだ、可能性が無いわけではなかった。獄寺達もタイムトラベルを経験したので、ありえない話ではないと思っていた。しかし真庭忍軍は違う。

十二頭領と名乗った彼らは　すでに故人なのだ。もうどこにも存在するわけがない。

なのに、なぜ彼らは生きている？

「七花、本当に真庭忍軍は全員死んでいるのか？」

リボーン言葉に、七花は顔を下に向ける。

「生き残りがいない可能性が皆無じゃないんだろうけど……でも、十二頭領は全員死んでる」

「本当に？」

「ああ。鳳凰と狂犬は俺が斬ったし、喰鯨は敦賀迷彩って奴に倒された。他の連中も、みんなやられてるよ」

七花の話を、獄寺はふと一つ引っかけた。

「おまえ、今斬ったって」

「え？」

「つまり、殺したってことか？」

「……ああ」

静かに、ためらいなく頷く七花。獄寺と山本は黙り込んだ。

「この時代じゃ、殺しは例外無く御法度なのは解ってる。でも、俺のいた時代じゃ普通　とまでは行かないけど、まあ当たり前だったんだよ」

「……だからって」

山本がためらいがちに口を開いた。

「何も殺さなくても……」

「悪いけどさ、山本」

しかし反論を、七花は許さなかった。

「俺は刀だ。鑢七花という一本の日本刀だよ。刀は持ち主を選ぶ。だが斬る相手は選ばない。第一、虚刀流は殺人剣だ」

七花の声が、獄寺と山本の反抗の声を抑え付けていた。七花に圧倒されていたのである。

「殺すための無刀の剣術。……別に殺さずすませた戦いもあったけど、俺は殺すための虚刀流の技を研鑽してきた。……人を斬る以外に、能が無いんだよ」

そう言った七花の顔は、ただただ無表情だった。

人らしさのかけらも無い、平淡な顔。

もしくはそれが、鑢七花という男の 否、日本刀の本質かもしれない。

しばらくその場で誰も、リボーンですら何も言わず、また何も言えなかった。

ツナは目を覚ました。

頭がぼやけて、視界も曇って見える。

次第に明瞭になってきた視界に、ツナは一人の人物を捉えた。

「獄寺……君？」

「大丈夫ですか？ 十代目」

自称右腕の友人は、にこっと笑った。

「何でここに……ていうか、リボーンと七花さんは……」

「リボーンさんから聞いたんす。二人はちょっと外に出て」

「そうなんだ」

ツナはぐぐつと上体を起こした。

「無理しないでください！」

ツナを助けるように、獄寺は手を伸ばした。

ツナはその手を

バシッ

振り払った。

「……え？」

「あ、あれ……？」

ツナも獄寺も、この行動に驚いたように顔を見合わせた。

「ど、どうしたんスか？」

「あ、ごめん！」

ツナは謝りながら、獄寺を振り払った自分の手を見下ろした。

（何だ……何で俺、獄寺君を振り払ったんだ？）

次第にはつきりしてくる頭。ツナは再度、獄寺を見た。

「！」

「十代目？」

「獄寺君……いや、君……」

わざわざ『君』と言い直し、ツナは彼をキッと睨み付けた。

「君は誰だ？」

「……はい？」

彼は首を傾げた。

「何言ってるんですか？ 俺は獄寺隼人。貴方の右腕ですよ」

「違う。君は獄寺君じゃない。一体君は誰だ？」

「十代目」

「誰なんだ！？」

ツナが力強く言うと同時に、病室の扉が開いた。

「！ な！？」

扉を開け、驚きの声を上げたのは獄寺だった。

それに続いて、山本やリボン、そして七花が、ツナの傍に立つ獄寺にそっくりな彼を見て目を見開く。

「ご、獄寺が二人！？」

「狂犬が使ってた有幻覚かつ」

「いや、ちげーな」

順に山本、七花、リボーンだ。獄寺はショックで動けないでいる。  
「……ちっ」

と。獄寺の姿をした誰かは、大きく舌打ちした。

「早々にばれるしご本人登場するしよー、俺ってば運向いてねえな」  
「誰だ、おめーは？」

リボーンは低い声で、彼に問いかけた。

彼は獄寺の唇を歪ませ、獄寺の声で言う。

「いや、簡単に言やあ刺客だよ。こいつの命狙ってたんだけどよ、まさかばれるとはね。例のボンゴレの血統って奴かね。ま、こうなっちゃあ仕方ねーか。きやはきやは！」

「その笑い方……まさか！」

七花が何かに気付いたように顔を歪めさせた。

「おまえまで生き返ってたのか」

「おいおい虚刀流、狂犬や喰鯨、鳳凰まで生き返ってんだぜ。俺も生き返ってるって普通思うだろ。泣いちゃうぜ、俺」

そう言った彼の顔が、ごきゆりと歪んだ。

それを皮切りに、全身が歪み、変形し、変化する。その間に、骨や筋肉がごきごきと嫌な音を立てた。

正視に耐えないその様子に、全員動けずにいた。特に獄寺は、自身がおぞましく変わっていく様を、蒼白な顔で見つめている。

やがて彼は、獄寺とは全く違う人間に姿を変えた。

身長は伸び、髪は銀から黒に。顔立ちも、体軀も、髪型さえも別の誰かのものになっていく。

服装のみは変わらず　彼はツナの知らない誰かになった。

天を突くように逆立った黒髪の彼は、裂けるぐらいの笑みを口元に浮かべた。

「久しぶりだなあ、虚刀流。後は初めまして、か。きやはきやは、さっそく名乗らせてもらうぜ。俺は真庭忍軍十二頭領が一人、真庭蝙蝠だ」

彼　男　真庭蝙蝠は堂々と、甲高い声でそう名乗った。

「真庭蝙蝠……ってことは、あれが忍法骨肉細工ってやつか」

リボーンが静かにそう言えば、七花は厳しい顔で前に進み出た。

「おまえまで生きてたのか。いや、生き返ってた、か。まさか十二頭領全員？」

「おうよ。おまえに会ったことない十二頭領、白鷺や蠅螂、蝶々や蜜蜂や海亀や鴛鴦もな」

「……白鷺は死体でなら会ったことあるぜ。それより、それなら、川獺や人鳥べんざんもか？」

「おう。もつとも、生き返ったのは俺らだけじゃねーけどよ」

蝙蝠はまたきやはきやはと笑った。

「何度生き返ったところで俺には関係無えよ。全員倒すだけだ」

「はっ、大きく出たな虚刀流。まあ奇策士の子猫ちゃんに色々教え込まれているだろうから、もう世間知らずじゃあねえか」

奇策士、という単語が蝙蝠の口から出たとたん、七花の顔が険しくなった。

ツナにはそれが七花にとってどんな意味を持つかは知らないが、どうも触れられたくないらしい。

「……どっちにしろ、おまえはここで斬る。綱吉を狙ってたんならなおさらだ」

「おっと。それは困るな。多勢に無勢だし、ここは逃げさせてもらうぜ」

蝙蝠がすつと身を引いた時だった。

「いや、逃げんのはまだ早いぜ」

いきなり窓の方から、声がした。

「俺に虚刀流と交渉させてくれよ」

誰にも気付かれず窓から侵入していた『彼女』は、にいつと笑った。

長い黒髪を背中に流した少女である。繊細な顔立ちで、つんとつ



り上がった大きな目が愛らしい。

袖を切り落とした着物と、全身に巻いた鎖は間違い無い。真庭忍軍の服装だ。

「よう、虚刀流。初めまして、こんにちは、いや改めまして、か」

「？ 誰だ、おまえ」

彼女の言葉と裏腹に、七花は少女を知らないと言うように首を傾げた。

しかし少女はそれに気分を害した様子も無く、蝙蝠と同じく堂々と名乗りを上げた。

「真庭忍軍裏組指揮官、真庭青龍」

「真庭……せいりゅう……？」

七花の顔がしかめられる。

「何者だ？ おまえは」

リボンが七花の肩上で少女に尋ねた。小さな手には、すでに銃が握られている。

「だから、言ってるだろ？ 俺は真庭青龍。真庭忍軍裏組の指揮官だよ」

「裏組なんて、俺は知らねえぞ」

七花が言つと、少女 真庭青龍は、にいつと笑った。

「知らねえのも無理は無え。俺らは闇を生きる真庭忍軍の更に深い闇に生きるしのびだ。いや、どっちにしろおまえが俺らを知るわけが無い」

「どういうことだ？」

「……飛騨鷹比等が起こした大乱」

青龍の言葉に、七花はまたも、その表情を驚きに染める。

ヒダタカヒト、という人物も、大乱の意味も、ツナ達は知るよしも無い。しかし、七花はそれに大きく反応した。

大き過ぎるぐらいに、反応していた。

「おまえの親父、鑓 むっえ 六枝も活躍した、かの大乱。俺達は、その時全員、命を落としている」

「なっ……」

「あの時真庭忍軍もかなり暴れまくったんだけどよー、裏組はちょっとあつて、全滅しちまったわけだよ。んで、何の因果か俺はこの世界に転生したのさ」

真庭青龍はその見た目に似合わぬ粗暴な口調で、つらつらと話を進めた。

「……おまえの身の上話はどうでもいい。一体何を交渉したいんだ？」

リボーンは銃の標準を青龍に定めた。青龍はへらへら笑いながら、両手を上げる。

「戦う気は無えよ。少なくとも今は。それより、俺の身の上話に興味無えなら、こいつや鳳凰達が生き返った理由はどうか？」

青龍の言葉に、リボーンは押し黙る。

リボーンだけではない。そのことについては皆気になっていたことなので、全員無言で肯定した。

「実はよ、これは俺の能力、異能、いや忍法が関わっているんだ」

「忍法？」

「そう」

そして青龍は両手を下ろし、右手を掲げる。

その手には、いつの間にか一輪の花が握られていた。

青い花だ。青い彼岸花だ。

季節外れうんぬんの話ではない。そんな花、本来存在するはずない。

けれど、青龍の手にあるのは造花でも何でもない。見ただけでも解る、紛れもない生花だ。

「……え、あ、あれ？」

その花を見た七花の顔色が変わった。

「あれ……あ、ああ！！あの時の！」

「あはは。忘れてたみたいだな、虚刀流。そう、おまえがこっちの世界に飛ばされた時におまえが触れた花が、これだ」

青龍は笑い声を上げながら、花を揺らした。

「これは俺の忍法が産み出した花だ。真庭忍法『地獄華』。死者を生き返らせ、生者を異界へ飛ばす忍法だ」

七花から聞き、体感した真庭忍法は、どれもこれも規格外の埒外だった。

しかしこれは 人外だ。

「死者を生き返らせるだと？ そんなこと、不可能だ」

リボーンの言葉も、青龍は応えた様子は無い。

「不可能？ なんもん真庭忍軍じゃなく一般人に言えよ。第一、生き返った奴らのことを、てめえはどうやって説明付ける？」

「……」

「今日の前にあることが全てだ。夢でも嘘でもねえ。現実で真実だ」  
反論は ない。できるはずもない。

彼女の言う通り、今日の前にあることが 全てだ。

「ま、んなことはどうでもいい。どうだっていい。それより虚刀流、唐突だが」

青龍は花を持った手とは逆の手を、七花に向けて差し出した。

「俺達と一緒に来い」

しいいん、と辺りが静まり返った。

誰もが驚き顔で青龍を見つめる。表情を変えないのは言った本人である青龍と、蝙蝠ぐらいだ。

「……俺がおまえらの仲間にならないのは解りきつてると思うけど」  
ようやく七花が返答をした。

「いや、仲間とかじゃなくてちよいと協力してくれりゃいいんだよ。それに、別におまえに何にも利益が無いわけじゃない」

青龍は再び、青い彼岸花を掲げた。

「言つたろ？ 俺の忍法『地獄華』は死者を生き返らせる忍法だ。つまり、つまりだ」

「……？」

「おまえの大切な人を生き返らせることも可能ってことだ。例えば  
奇策士」

次の瞬間、七花の表情が大きく変わった。  
目を見開き、顔を驚愕に染めて　大きな動揺を、隠せないでい  
る。

「彼女を生き返らせることも、また可能だ」

「そんな、こと……」

「ありえないって？　だがありえるんだな、これが」  
「……」

「諸事情でな、おまえが必要なんだ、虚刀流。その対価としておま  
えの最愛の人を生き返らせてやるうつってんだ」

（七花さんの、最愛の人……？）

ツナは青龍から七花へと、視線を向けた。

奇策士　七花の最愛の人　その人を、彼女は生き返らせてや  
ろうという。

しかし解らない。

どうしてそんなことをする必要があるのか。

どうして七花を求める必要があるのか。

「どうする？　虚刀流。奇策士に、もう一度会いたくはないか？」

青龍の言葉は、七花にはどう届いただろう。

やがて彼は、口を開く。

その答えは

## 第十録 選択

「俺は本気で来いと言った。しかし貴様らは どうやら本気を出せないようだな」

ボンゴレ一世<sup>フリーモ</sup> ジョットは言った。

ボロボロで立つことも苦しそうな、桔梗とザクロを前にして。決着は早々に着いた。

死ぬ気の炎による攻撃をジョットは零地点突破により吸収し、無効化したのだ。

逆に二人はジョットの炎を避けることができず、現状に至っている。

「見たところマーレリングを持ってはいるようだが……その真価を、今は発揮できないということか？」

「……ハハン、まあそういうことですね」

桔梗は苦しげに笑った。それだけでも体力を消耗しているようである。

「ザクロ、ここはいったん退きましょう。リング無しでもボンゴレ歴代最強、その名は伊達ではないようです」

「伊達でもなければ無論酔狂でもない。ここはとどめを刺すべきだろうがあいにく非情になれなくてな、見逃してやる」

ジョットの言いようにザクロは突っかかるうとしたのか身を乗り出すが、桔梗に制止をかけられ、止まる。

「やめなさい、ザクロ。……悔しいですが、我々はこので死ぬわけにはいきません」

「チツ……しゃあねえ」

ザクロは顔を歪めて舌打ちした。

そして二人して、その場を去っていく。

ジョットはその後ろ姿が消えるまで見送った後、背後に声をかけた。

「いつまで隠れてるつもりだ？」

「……なあんだ、ばれてたの」

木の陰から姿を現した金髪碧眼の女　もとい否定姫は、悪戯っぽい笑みを浮かべた。

「ばれてる決まってる。奴らも気付いていたようだから、そちらに危害がいかないようにするのが大変だったぞ」

「あら、それはごめんなさいね」

否定姫はからから笑い、そしてすぐその笑みを消した。

「んで、貴方あいつらが何者か知ってるみたいけど？」

「……詳しくは言えない。第一知ってると言うほどでもない。それより否定姫」

「……何かしら？」

「完成形変体刀　及び、その所有者という者達のこと、教えてくれないだろうか」

この後、ジョットは知る。完成形変体刀とはいかなるものなのか。そして、ジョットはまだ知らない。完成形変体刀には己に深く関係があるものがあることに。

このことを彼が知るのは、物語が更に進展したのちである。

「断る」

ただ一言、七花はそう言った。

答えるまでに間はあったものの、それは意外なほどはつきりとした返答だった。

「……へえ？」

それに気分を害した様子は無く、むしろ面白そうに、青龍は「なぜ？」と首を傾げた。

「奇策士に会いたくないのか？ 聞いた話じゃ、おまえは彼女に惚れたからこそ、共に旅をしていたそうだが」

「それは事実だ。本当のことを言うと、もう一度会いたいって思うよ。凄く」

「なら、なぜだ？」

青龍の更なる問いに、七花は軽く目を伏せた。

「……俺は、もう一度とがめに会いたい。だけど……それは俺の望みであつてとがめの望みじゃない」

とがめ、というのが七花の最愛の人らしかった。

ツナは七花を見つめた。驚きを隠せないまま、じつと。

「きつととがめは……生き返りたくないって思ってるだろう。死ぬ直前に、死ねることが幸せだみたいなこと言ってたんだぜ。俺の気も知らないでさ……自分勝手だよな」

七花は諦めたような、それでいて哀しそうな微笑を浮かべた。

「でもとがめの心を考えたら、それかもしれないって思っちゃうんだよな。とがめは生き返ることを望んでない。なのに、俺がとがめの意思に反するわけにはいかないんだ」

そこに七花のどんな気持ちも込められているのか、超直感を持つツナにも解らなかった。

ただただ七花の表情は哀しげで、それでいて何かを悟ったかのようだった。

しばらく誰も何も言わなかったが 青龍が「ふうん」と興味深げに唸った。

「ふむふむ……そんな風に考えるか。面白いな。しかし……交渉自体は決裂か。おい蝙蝠」

青龍は蝙蝠に目配せした。

それに気付いた蝙蝠が首を傾げる。

「いいのか、こいつ殺さなくてよ」

いきなり指差されたツナはベッドの上で後ずさった。しかし、それは杞憂である。

「おまえも解ってんだろうが。くない構えた瞬間に俺達の脳天、アルコバレーノにぶち抜かれるぜ」

「それもそうだ」

蝙蝠はきやはきやは笑って、小さな球状の何かを投げた。

ボンッ

とたん辺りに煙が広がる。ツナは真つ白な視界の中で、二つの影が窓の外へ飛び降りるのを見た。

煙幕の中で自分を殺すより、逃げた方がいいと判断したらしい。事実その判断は正しく、一秒も満たない内に七花とリボーンが駆け寄ってきた。

二人が比較的近くにからであるが、簡単な構造であるこの部屋の間取を憶えていたからというのもあった。

「大丈夫か、綱吉！」

七花は大きな身体をかがめてツナの顔を覗き込んだ。

「は、はい。何もされてなかったし……」

「ツナを殺るのは無理とふんだか。……いい判断だ」

だから敵に回すのが厄介と言える　リボーンは億劫そうに呟く。  
「しかし、骨肉細工に関してもそうだが……忍法『地獄華』か。とんでもねーな」

少しずつ晴れていく部屋を見渡すリボーンの顔は、真剣そのものだ。

しかしそれほどさっきまでの空気は殺伐としていたし、真庭青龍の忍法はとんでもなかった。

死者がよみがえるなど　本当にありえない。

「嵐どころじゃねー。このままじゃ天地がひっくり返るぞ」

世界一の殺し屋であるリボーンの言葉だからこそ　空気は先程



よりも重く、緊張感をあふれさせていた。

ツナ達は蝙蝠と青龍はもう遠くにいるものとばかり思っていたが、そんなことはなかった。

病院の屋上。ふてぶてしくも彼らは、任務失敗の地に堂々と存在していた。

「初見じゃ解らなかったが……おもしれえじゃねえか、虚刀流。だからこそ残念だ」

青龍はくくつと笑った。言葉の通り、楽しそうである。

「どーすんだよ。虚刀流が必要なんだろう？」

俺は関わりたくないけどー、と蝙蝠は肩をすくめた。

「そう言うな。そのことについては先送りしようぜ。さしあたってはボンゴレ十代目のことだな」

青龍はふむ、と唸った。

「けど暗殺は一回失敗してる。奴らは二回目を警戒しているだろうから、一層難しくなってるだろうぜ」

「確かにな。ふん……打っておいた布石を、存外早く使うことになりそうだな」

青龍はにいい、と笑った。

愛らしいその顔に似合わぬ粗暴な笑みである。

「しのびらしく、卑怯卑劣に　な」

日が落ち、夜になった。

病室にいるのはツナ、リボーン、獄寺、山本、七花の五人である。一時間前まで奈々がいたのだが、また明日来ると言って帰っている。

奈々にはツナの怪我を、交通事故だと偽っている。刺し傷と言えば余計な心配をかけさせかねない。

あくまで彼女は、ボンゴレに關係無いのだから。

「とりあえず護衛として、今夜は俺と七花が病室に残ろう」

リボーンの提案に、獄寺と山本は頷く。唯一反応を示さなかったのは、七花であつた。

「？ 七花さん、どうしたんですか？」

ツナは七花の無反応さに気付き、首を傾げた。

「ん？ …… ああ、いや何でもない」

七花ははつとしたように目を瞬かせた。

「さっきの青龍の言葉が、まだ応えてんのか？」

「えっ……」

リボーンの直球過ぎる言葉に、七花は目を丸くした。

「そんなこと……。 …… あるかな、うん」

七花は素直に認めた。

「正直、真庭青龍の話は俺にとってすげー惹かれる話だったし……でも、とがめが生き返ったって何かが変わるわけじゃないし」

七花は眉間にしわを寄せて笑った。

「俺のせいだとがめが死んだ事実が、消えるわけでもないんだ」

「七花さん……」

ツナはかける言葉を失った。

もしも自分が一番大切な人を失ったら、そしてその人が生き返る可能性があつたら、はたしてそんなことを言えるだろうか。

そんな自虐的な、いつそ達観してるとも言える考えを持てるだろうか。

自分だつたら、すがつてでも生き返ってほしいの願うのではなからうか

「……悪い。ちょっと外の空気吸ってくる」

七花はリボーンを肩から下ろし、病室を出ていった。

「……どうやら思い出したくもねーこと思い出しちまったようだな」

ベッドの上に下ろされたリボーンはふ、と息をついた。

「まあ解らなくもねーな。誰にだって、できれば生き返ってほしい奴の一人や二人いるもんだ」

「……」

ツナはうつむいた。

自分だって　いる。生き返ってほしい人が。

未来での戦いで、自分達のために命をなげうったあの少女に、生き返ってほしいと思う。

「……しかし解せねえな」

リボーンの呟くに、ツナは現実に戻された。

「どうして死者を生き返らせられる？　アルコバレーノを生き返らせるのとわけが違えぞ。それに、ツナを狙うのも解らねー」

「確かに、本人の話を信じれば異世界に人間を移動させることができるみたですし、向こうで十二頭領達を生き返らせればいいですからね」

獄寺もリボーンの言葉に同意した。

「裏組という七花も知らねー存在といい、まだまだ何かありそうだぞ」

リボーンはぴょんとベッドから飛び降りた。

「どこ行くだよ、リボーン」

ツナが尋ねると、リボーンは首だけを振り返らせた。

「七花のところだ。少し様子を見てくる」

そしてリボーンも病室を出ていく。残ったのはツナと獄寺、そして山本だけだ。

「リボーンさん、随分あの野郎のこと気にかけてますね」

「うん……多分、七花さんのこと気に入ったんだと思う」

「確かに、最近小僧の奴七花さんの肩にずっと乗ってるしな」  
「少なくとも、リボーン的眼鏡になっっているのは確かだ。」

「……何か七花さんって不思議だよな」

ツナは腹の傷をさすりながら言った。

「何だろう、うまく言えないけど……他の人と違うんだ。普通だけと違う。不思議な感覚だけど……」

七花は、簡単に言えば普通の青年である。

山本を倒したあの実力や、傷だらけのあの姿を除けば、何もかもが常人だ。

どこまでも普通。平々凡々で普通の青年。

しかし、どこが違うのだ。ずれているとも言っていない。

そのずれをツナが理解するのは、まだ先のことである。

それがツナと七花の、僅かにあった溝を更に深めることになるのを、彼はまだ知らない。

七花は病院の裏庭にいた。

特に何をするでもなく、何を見るでもなく　ただ立ち尽くしている。ただたたずんでいる。

考えるのは、あの時だ。

最愛の人の、最期の姿、最後の言葉。

『私はそなたに、惚れてもいいか？』

惚れるも何も、最初に惚れたのは自分だ。

最初に想ったのは、自分の方だ。

なのに自分は　彼女を守れなかった。

「……」

愛ではなかった。

恋でもなかった。

けれど彼女が　誰より好きだった。

一番に、想っていた。

できることならもう一度会いたい。会って抱き締めたい。

彼女を守りたい。

「……未練がましいな」

七花は薄く笑った。

もしこの場に否定姫がいたなら、彼女は自分を完膚無きまでに否定し尽くすだろう。

もう一度とがめに会いたいと願う自分を。会ってはいけないと思う自分を。

七花は似合いもしないため息をついて、いい加減戻ろうと踵を返した。

気が付けば随分時間を喰ってしまった気がする。

そろそろ戻らなければ

「わからず不解」

七花は足を止めた。

いや足どころか、己の持つ全ての機能を停止させた。

今の言葉　今の台詞

ありえない。真庭忍軍だけでなく、彼までいるなど。

いや、そもそも彼は真庭忍軍にとって敵のはずだ。生き返らせる理由が無い。

だから　振り返ってその姿を確認した時、かろうじて動いていた七花の脳ですら動きを完全に止めてしまった。

「なぜ私が生きていて……こんなわけの解らない場所に放り出されているのか。その格好からして虚刀流、おまえは何か知っているのか？」

すらりとした体格の男だった。上下共に洋装、足に履いてるのはこの時代には珍しくもない靴。しかし何より目を引くのは、顔の上半分を覆う仮面だ。

縦に『不忍』と書かれた仮面。それは、彼が元忍者であることを表していた。

知っている。自分はこの男のことを。

だから、だからこそ信じられない。

「何でおまえが、おまえがここにいるんだ。右衛門左衛門！」

「言っただろう。それは私にも『不解』だ」

男は 左右田右衛門左衛門は無感動にそう言った。

彼の出現により、ツナ達は四季崎記紀の作りし完成形変体刀の  
ことを知ることになる。

そして七花が、更なる驚愕に出会うこととなるまで、あと一時間。

## 第十録 選択（後書き）

左右田右衛門左衛門登場です。

ツナ達は彼のこと見たらビビるだろうなあ。主にツナが。

普通に考えて彼の仮面はちょっと怖いし。ほんとあの仮面前見えてるのだろうか。

次回は説明とか会話とかで動きは全く無いと思われます。

## 第十一録 完成形変体刀

七花は右衛門左衛門を前にして、動けなかった。

自分が倒した相手と、自分が斬り倒した相手と、そもそも一度も存在したことが無いはずのこの世界で、再会することになるうとは、ただでさえ動きの鈍い七花の脳は、もはや沸騰寸前だ。

このままだと知恵熱で倒れるのではないかというところまで行き

「何だ、七花の知り合いか？」

突然の来訪者により、かえって冷静になれた。

「リ、リボーン……何で」

「ちよつとおまえの様子が気になってな。で、この仮面男は誰だ？」

「赤ん坊が喋ってる……？」

驚く七花に対し、どこまでも冷静なりボーン。

右衛門左衛門は赤ん坊が喋るといふ目の前の現実に驚愕したようだった。奇しくもそれは初めてリボーンに会った時の七花の反応に似ている。

しかしそれは、今はどうでもいい。

「真庭忍軍じゃなさそうだな……七花、説明してもらえるか？」

七花は現状を未だ把握しきれてないし、右衛門左衛門にしても表面上は無表情でも内心は少し混乱している。

しかしリボーンはそれがどうしたと言わんばかりに、いっそ冷たいぐらいいつも通りだった。



その人物が入ってきた時の反応はそれぞれだった。

ツナは目を見開き、獄寺は威嚇しながらツナを後ろにかばい。  
ただ山本だけがにこやかに一言。

「変わった格好の人だな」

それには全員が 共に入ってきた七花さえ啞然とする。

「ありえず不有得。私のような人間を見て、まず言うことがそれか……？」

それが七花とリボンと共に病室に入ってきた洋装仮面の男  
左右田右衛門左衛門の第一声だった。

名乗りを上げ、七花の知り合いということを知り、ツナ達とは  
りあえず安心した。

問題は、である。

「貴方も七花さんと同じ世界の人で……しかも死んでるんですか！  
？ えつと……」

ツナは迷ったあげく、右衛門左衛門の顔（と言っても仮面で覆わ  
れているが）を困り顔で見つめた。

「左右田さん？ それとも右衛門左衛門さんと呼ぶべきですか？」

「かまわず不構。どちらでも構わない」

先程からたびたび入る謎の否定文は何だろうとツナは思ったが、  
それを問うより早く、右衛門左衛門が口を開いた。

「しかし……まさか真庭忍軍が復活しているとはな……真庭鳳凰含  
め、十二頭領達は全員死んだというのに……」

「うん。俺も未だに信じられねえや」

彼の隣に立った七花も同意した。

すでにここがどういう世界で、今現在何が起きているか右衛門左  
衛門に説明している。

彼は七花よりも数十倍頭の回転が早いので、全部説明し終えるの

に一時間もかからなかった。

「真庭青龍か……ん」

「どうした？」

七花の肩に乗ったりリボーンは、右衛門左衛門が何かに気付いたことを察知した。

「もしかして、私は真庭青龍に会ったことがあるかもしれない。奴の話信じるなら、前世の真庭青龍ということになるか」

「ええ！？……あつ、つ」

右衛門左衛門の言葉に驚いたツナは思わず立ち上がりかけ、腹の傷に負担をかけてしまった。

「だ、大丈夫ツスカ！」

獄寺は慌ててツナの顔を覗き込み、その後右衛門左衛門を見た。

「本当だろうな」

「ああ。二十年も前だからな、思い出すのに時間がかかった」

右衛門左衛門はそう言つて黙り込んだ。

何かを考えるように手袋をはめた手を顎にやり、少しして口を動かす。

「不有。あいつ私が真庭青龍に会ったことがあるかなど、今は関係無い。

問題は、そこいる沢田綱吉の命を狙っている点、鑢七花を欲している点だろう」

「確かにな」

リボーンは右衛門左衛門に同意し、七花を見た。

「七花、奴らがおめーを狙っていることに、心当たりはあるか？」

「……恨まれる心当たりならあるけど」

返答はとんでもなかった。

「……もしかすると、私が生き返ったことと関係あるのかもしれない」  
「い」

と。右衛門左衛門が言い出した。

「どういうことだ？ 右衛門左衛門」

「そうとしか考えられない物を、私は持っているのだ」

七花にそう返して、右衛門左衛門は懷から何かを取り出し、ツナのベッドの上に置いた。

その何かとは、二丁の銃だった。

片や回転式連発拳銃、片や自動式連発拳銃。美しく装飾された銃だった。

「？　これがいった」

「ああ！」

い、と言いかけたリボーンを、七花が遮った。

病室の外にまで聞こえたのではないかと思うぐらいで、しかし七花自身はそんなことお構い無しだった。

「こ、これ炎刀じゃないか！　何で持つて」

「わからず不解。何度目になるか解らないが本当に不解だ。この世界にいたと思つたら、気が付いたら懷にあつたのだ」

右衛門左衛門も心底不思議そうだった。ただ、口は確信を持つて推測を語る。

「おそらく、真庭青龍の忍法『地獄華』は死者だけでなく物も生き返らせるのではないだろうか。それが私が生き返ったことに関係しているのかもしれない」

「それってどういう……」

「おい」

獄寺が七花と右衛門左衛門の間に口をはさんだ。二人は今気付いたというように顔を彼に向ける。

「さつきから二人だけで話を盛り上がらせてよお、こっちは全く話が見えてこねーじゃねーか！」

「確かに、この銃がどうしたって言うんだよ」

山本まで少し不服そうに口を開いた。

「説明してくんねーかな」

「あ……そつか。おまえらは変体刀のこと知らないんだっけ」

七花は苦笑をもらした。

そのまま説明しようとしたのか口を開き　ふと右衛門左衛門の

方を見る。

「悪い、右衛門左衛門。代わりに説明してくれ。俺、こついつの苦手で……」

「……そういえばそうだったな」

右衛門左衛門はあきたようにため息をついて、七花の代わりに話を始めた。

「不知<sup>しず</sup>。まず四季崎<sup>しきざき</sup>記紀のことを知らないだろうからそこから話そう」

「しきざき……きき？」

ツナ達は首を傾げた。

「私達がいた世界、歴史と言うべきか。そこには伝説とまで言われる刀鍛冶がいた。それが四季崎記紀だ。彼は戦国の世を、実質的に支配していた」

「ど、どういう意味ですか？」

「そのままの意味だ。彼の刀を手に入れば、天下を得られるとさえ言われていたしな。それに当時力を持っていた大名ほど彼の刀を多く持っていた。そんな幻想のようなものができて不思議ではあるまい」

「確かに幻想だな。しかし、そこまで言われるほど多く刀をばらまいていたのか？」

リボーンの質問に、右衛門左衛門は「いや」と首を振った。

「まあ節操無く己が打った刀をばらまいたのは確かだな。合計で千本」

「千本とは少ないな」

「え？ それって少ないの？」

首を傾げるツナに、リボーンは「少ねーぞ」と返した。

「戦国時代といえば、剣士と刀鍛冶の全盛期だ。活躍どころだ。それなのに千本って数は少しばかりふさわしくねー」

「……つかぬことを訊くが、本当に赤ん坊か？」

右衛門左衛門の質問は黙殺された。

「で、話の続きは？」

「あ、ああ。最終的に、ある大名が戦国の世を収めた。旧將軍と呼ばれるその男の元には、四季崎記紀の刀の過半数……五百七本が集まっていた。しかし彼は、それだけにとどまらなかった」

「とどまらなかった？ 更に四季崎ってヤローの刀を欲したってことかよ」

獄寺が言うと、右衛門左衛門は頷いた。

「そうだ。そのために刀狩令などという悪法を出した。表向きは刀を使用した大仏建立のため、裏向きの目的は剣客撲滅のため、真の目的は四季崎記紀の刀を集めるため」

「狂ってるな」

「実際狂っていただろう。四季崎記紀の刀は毒が強過ぎる。一本の刀でなり上がってきた旧將軍には、くまなくそれが回っていたろう。それに刀の一本一本がどうしようもない際物だったために、四季崎の刀は変体刀と呼ばれているぐらいだ」

「それが、この銃とどう関係があるんスカ？」

山本が尋ねると、右衛門左衛門は話を進めた。

「最終的に旧將軍は九百八十八本の変体刀を集めた。しかし残りの十二本がどうしても集められなかった」

「たった十二本を？」

「たかが十二本、されど十二本だ。それにその十二本は残りの九百八十八本を習作にして造られた変体刀だ。完成形変体刀 などと呼ばれているよ。実際その刀の所有者達に、ことごとく旧將軍の軍は退けられている」

「そ、そんなに凄い刀と、この銃は何の関係が？」

ツナが身を乗り出すと、右衛門左衛門は「そろそろ気が付いてもいいだろう」とため息をついた。

「この銃が、その完成形変体刀の一本だ」

「え……ええ！？ だってこれ銃じゃ」

「変体刀の中じゃ、随分ましな方だと思っぜ？」

七花は肩をすくめた。

「人形とか鎧とかくなくないとか……そんなのまであるんだから」

「柄と鐔のみのもあつたな」

「……」

自由過ぎだった。

そもそもそんな昔の時代に、どうやって拳銃など造れるというのだ。

「そ、それで……なんで貴方がそんなものを？」

「ああ。一応私はこの刀　炎刀『銃』の所有者だったのだが……しかし、炎刀は最後、虚刀流に銃身を曲げられて使い物にならなくなっただが」

「ああ。それは確かだ。処理もしたし……」

七花は右衛門左衛門のの言葉に顎を引いた。

しかしここにある銃　炎刀『銃』はどれも曲がってないし、傷一つ無い。

「……なるほどな。右衛門左衛門、おめーの言いたいことは解った」  
リボーンはふむ、と唸った。

「つまり真庭青龍の忍法『地獄華』は人だけでなく物も生き返らせることができる　それには所有者だった人間が必要なんじゃないかってことだろう？」

「不否。<sup>いなまず</sup>その通りだ。でなければ私が生き返っていることの説明がつかない」

ここで一つの疑問が解消された。

つまり真庭忍軍の狙いは四季崎記紀の変体刀というわけだ。

しかし、それが七花にどう関係しているのか解らないし、ツナが狙われている理由も謎のままだ。

しかし、右衛門左衛門はそれ以上ツナ達と会話をする気は無いようだった。

「不有。<sup>あいつ</sup>これ以上ここにいる理由は無いので私は去らせてもらおう」  
「え！？」　で、でもここは貴方がいた世界じゃないんですよ？　ど

うする気ですか!？」

炎刀を再び懐に入れる右衛門左衛門に、ツナは慌てて制止する。

しかし右衛門左衛門はそれに無頓着だった。

「不及。おとはず状況さえ把握できれば私にはそれで充分だ」

「で、でも……」

「君は私より自分のことを心配するべきだろう。なに、忍ぶことは慣れている」

私はあまり歓迎される存在ではないだろうしな　と自嘲気味に

言う右衛門左衛門。そこでふと、七花に顔を向けた。

「虚刀流」

「ん？」

「姫様は……ご無事か？」

先程まで冷たい雰囲気を漂わせていた右衛門左衛門の声が、僅かに熱を帯びた。

その変化に七花は驚かず、「ああ」と頷く。

「俺がこっちに来るまで一緒に旅をした。今はどうか解らないけど、少なくとも俺と一緒にいてた時は無事だよ」

「……そうか」

右衛門左衛門は小さく「よかった」と呟き、窓の方へと足を向けた。

「……沢田綱吉」

しかし途中で足を止め、ツナを振り向く。

「私が生き返ったということは、他の死んだ変体刀の所有者も生き返って変体刀を持っているということだ。そして十二本の刀の内二本は、真庭鳳凰と真庭蝙蝠が持っているだろう」

「……!」

「気を付けろ。私が言いたいのはそのだけだ」

そして左右田右衛門左衛門は窓から飛び降りて姿を消した。

彼が投下した発言はツナ達に強い衝撃を与えたが、その一方で七花は、全然別のことを考えていた。

変体刀の所有者達も生き返る。  
ならば姉ちゃんも生き返っているのだろうか。

イタリアのある街のある路地裏。そこに、一人の女が立っていた。

長い黒髪に青白い肌。病弱で美しい、しかし生者の気配を感じられない女だ。

昼ならともかく、夜の暗い場所で立つ彼女は、死霊とまではいかなくとも生霊と間違えそうである。

彼女は周りを見渡した。

まるで観察するように、じつと、まじまじと、ぎよるぎよると。

そうすることで何かが解るとでも言うように

「……ふう」

やがて彼女はため息をついた。ため息の似合う女である。

「まあいいわ。いえ、悪いのかしら。せっかく七花に殺してもらったのに生き返っちゃうなんて……しかもここは私の知らない世界、いえ歴史だし」

どうしたものかしら、と女はけだるげに言う。仕種も速さからは無縁のものだった。

「おまけにこれまで持ってた……一体何なのかしら」

着物の下に忍ばされたその存在を感じ、眉をひそめた。

「……あら？」

やがて人の気配を感じて、彼女は振り返る。

離れた場所に、一人の背の高い男が立っていた。

短い黒髪で、顔のところに火傷のような跡がある。瞳は燃えるような、血のように深い紅だ。

「……」



「……」

双方しばらく互いを見つめていた。数十秒ほどして男の方が「おい」と口を開く。

「誰だ、てめえは」

「訊きたいのはこちらなんですが……まあいいでしょう。いえ、悪いのかしら。初めまして、鑓七実と申します」

女　七実 は深々と頭を下げた。

男はそんな彼女をじつと見つめる。

先程七実がやったように、じいっと。

「あの……？」

七実 は首を傾げた。

「どうかされたのですか？」

「……随分な肉体だな」

唐突に男が口を開いた。

「強過ぎるために弱々し過ぎる……てめえみてえのは初めて会った」  
「あら」

七実 は目を瞬かせた。

「解るのですか。不思議な方ですね」

「こつちのセリフだな。ふん……」

男はやがて笑った。ぞつとするほど、凶悪な笑みである。

「気に入ったぜ。おまえ、俺の部下になれ」

「はい？」

七実 はまた首を傾げた。

「どういう意味なのでしょう？」

「そのままの意味だ。その身体でも戦えねえわけじゃないだろう」  
「……ふふふ」

七実 はしばらくして、男と同じように笑った。

こちらも　随分凶悪な笑みだ。

「いいですね。いえ、悪いのかしら。どうせ行くところがありませんし、貴方と一緒に行くのも面白いかもしれません」

七実は一歩踏み出し、男に近付いた。

「解りました。部下になりました。ところで貴方のお名前をお訊きしてもよろしいでしょうか？ 部下になるのですから」

男は「ああ」と思い出したように小さく声を上げた。

「俺の名はザンザスだ」

「ザンザスさん……ですか。変わったお名前ですね」

「俺からすれば、てめえの格好の方が変わってるがな」

死装束のような七実の着物を見、男　ザンザスは言う。

「さて……まずは訊かせてもらおうか。てめえが何者なのかをな」

「私も知りたいです。ここがどこなのか」

そして二人の男女は、凶悪に笑い合った。

イタリアのとある路地裏、深夜の出来事である。

ボンゴレ独立暗殺部隊ヴァリアーのボス、ザンザス。

前日本最強で空前絶後の化物のような天才、鑢七実。

最悪と言えるこの凶悪な組み合わせに沢田綱吉と鑢七花が会ったのは、もう少し先のことである。

## 第十一録 完成形変体刀（後書き）

ザンザスと七実の組み合わせ、予想以上の最凶具合でした……  
ツナと七花の反応を書くのが楽しみです。  
では！

## 第十二録 炎と匣

「ツナさん！」

ハルが涙声でツナに抱き付いた。

ツナの病室である。真庭忍軍の襲撃と右衛門左衛門との邂逅から2日経っていた。

そして今日、京子とハルが見舞いに來たのだが……

「抱き付くなよ、ハル！」

「はひ……ハルはツナさんが死にかけたと聞いて心配してたんです！ ブローケンハートなんですう……！」

「ぶろーくんはーとって何だ？」

ハルの迫力に若干引いていた七花は首を傾げた。ちなみにハルとは先程あいさつをすませている。

「えっと……心が傷付いたって意味です」

京子の返答に、七花は「ふうん」と解っているのか解っていないのか微妙な返事をする。

やはり、未だにカタカナは理解できてない七花だった。

で、その七花と隣の京子かというと。

「ランボさんツナと遊ぶ！」

……ランボを止めていた。イーピンやフウ太と協力して。

「ランボ君駄目だっつ」

「綱吉は今怪我してるんだぞっ」

「ランボ、駄目！」

「ツナ兄の怪我が悪化しちゃうよっ」

順に京子、七花、イーピン、フウ太である。

この五歳児の遊びに対する執念はもはや語るまでもないが、その

うざ過ぎるわがままぶりは、見るまでもない。

「嫌だもんね！ おれっちはツナと遊ぶの！！」

これである。

全員が、特に対象にされているツナが困り果てていると、いつものごとく七花の肩にいたリボーンがぴょんと跳んだ。

「黙れ、アホ牛」

リボーンの目的をツナは瞬時に察知したが、ベッドに寝ている上にハルに抱き付かれていては止められるわけが無い。

ドガアッ

結果、京子と七花に動きを止められていたランボは二人の手を離れて蹴り飛ばされた。

「ぐぴゃっ」

悲鳴を上げるランボを見送った京子と七花は、「あ」と声を上げて固まってしまう。それぐらい容赦無い蹴りだった。

「ちなみに今のは、虚刀流『薔薇』を応用したぞ」

「何で虚刀流！？」

ツナのツツコミが放たれると同時に

「が・ま……うわあああああん！」

ランボは泣き出してしまった。

「大丈夫か、ランボ」

七花は駆け寄り、かがみ込んでランボの頭を撫でた。

元の時代では面倒を見られる側だった七花だが、こっちに来てからはすっかり面倒を見る側になっていた。

それには、子供達が七花になついているというのも一因だろう。

「ううゝ七花あ。ランボさんはあ、強いから泣かないだもんね！」

「もうこれでもかかってぐらい泣いてるじゃねえか……」

七花はあきれのため息をつきつつもランボを抱き上げる。

ランボと接するに置いて必要不可欠なスルースキルを、七花は十

日少しで身に付けていた。

「リ、リボーン！ おまえ何でランボに暴力振るうんだよつ。俺に對して以上じゃん！」

ツナの言葉に、リボーンはどこ吹く風で一言。

「存在がウザいからだ」

言っちゃったー！！

誰もがあえて目をそらしていたことを、さらりと口にするリボーンだった。

「何だ、騒がしいと思ったら来客中だったのか」

聞き覚えのある声と一緒に、金髪の青年と口髭をはやした男が入ってきた。

「デイーノさん！」

ツナはハルをはがしながら顔をほころばせた。  
入ってきたのは、ツナの兄貴分であり、兄弟子の跳ね馬デイーノである。後ろの男は、部下のロマーリオだ。

「よかった。元気そうだな、ツナ」

デイーノはツナの顔を見て、ほっとしたように微笑した。

「おまえが入院したって聞いてさ、仕事終わらせて慌てて来たんだ」「す、すみません……心配かけて」

かしこまるツナに、デイーノは顔の前で手を振った。

「いいって。可愛い弟分のためだからな。……つと、あと、例の奴に会いにな」

そう言っただけでデイーノは、七花の方を向く。デイーノは山本より高い身長を持ち主だが、七花の方が更に高身長のために視線は自然と上を向いた。

「初めまして、だな、鑢七花。俺は跳ね馬ディーノ。キャバツローネっていうマフィアのボスだ」

「ああ………そういや前に、リボーンから聞いたな。こちらこそよろしく。虚刀流七代目当主、鑢七花だ」

差し出された手を、戸惑いがちに握る七花。握手というものはあまり経験したことがないため、一瞬どうしようか迷ったのである。

「ハハッ、話には聞いてたが、マジででかいな。歳も俺より上だっけ」

ディーノは楽しそうに笑いながら七花を見上げた。

「そうなのか。それより、誰から俺のことを？」

「俺だぞ」

首を傾げる七花の肩に、リボーンがぴよんと飛び乗った。

「ディーノ、頼んだもんは持ってきたか？」

「ああ、勿論だぜ。っと、それより………」

ディーノは京子とハルの方を見た。

それを受け、リボーンは口を開く。

「京子、ハル。何か飲み物を買ってきてくれねーか？」

「あ、はい」

京子はランボを七花から受け取り、ハルもイーピンを抱える。フウ太も連れて、二人は病室を出ていった。

「さて………今まで起きたことは、リボーンから聞いたぜ」

ディーノは表情を改め、ツナ達の顔を見渡した。

「真庭忍軍のことも、変体刀のことも。特に気になるのは、奴らが死ぬ気の炎を使ってる点だな」

「死ぬ気の炎？」

七花は首を傾げた。

「死ぬ気の炎って何だ？」

「ああ、まだ説明してなかったな」

リボーンは今気が付いたというように顔を上げた。

「この間クロームの身体を乗っ取った真庭狂犬が指環から炎を出し

てたたる？ あれが死ぬ気の炎だ」

「綱吉が使ってたのは？ 色は違うけど……」

「あれも死ぬ気の炎だ。死ぬ気の炎とは生命力を炎に置き換えたものでな、七つの属性がある。ここまでは解るか？」

「まあ……一応」

「そうか。で、その属性はそれぞれ天候になぞらえられている。嵐、雨、雲、霧、雷、晴、そして大空。属性にはそれぞれ特性があつてツナが使ってたのは大空、真庭狂犬が使ってたのは霧だ」

「……えっとつまり、二人が使ってたのは違う炎つてことか？」

「そうだぞ」

「……うん？」

七花は唸った。別に解らなくなつたわけではなく、一つ疑問に思つたことがあつたからだ。

「死ぬ気の炎のことは解つたけどさ、それと指環が何の関係があるんだ？」

「死ぬ気の炎を使うためには、特別な指環が必要なんだぞ。ツナが今着けてる指環も、その特別な指環の一つだ」

リボーン言葉に、七花はツナの指に目をやった。

「へえ……綺麗な指環だと思つてたけど、そんな力があつたのか」

「え、ええまあ」

ツナは苦笑した。

綺麗な指環、どこではないのだが。

「死ぬ気の炎を使つて戦うのが、この戦い方だな。だからこそ、真庭忍軍が使つてることがおかしいんだ」

「ああそうか……ここにいてからつてこの戦い方を知ってるわけじゃないもんな」

七花はようやくリボーンの言いたいことを察した。

「奴らがどこまで死ぬ気の炎を扱うか解らねーが、七花、おめーも死ぬ気の炎を使わねーとあいつらと戦つていけねーぞ」

リボーンはそう言つて、ディーノの方を見た。



「そこでだ。おめーには死ぬ気の炎を使ってもらっ」

「んな！ 七花さんにもリング渡すの！？」

ツナは飛び上がった。

「第一七花さんは無手なんだぞ。どうやって死ぬ気の炎を使うんだよ！」

「そのために俺も色々用意したんだぜ」

ディーノがポケットから二つの物体を取り出した。

一つは紫色の石がはまった銀色の指環。もう一つは正方形の箱だった。

「なっ、ボ、匣兵器！？」

「ん？ 何だそれ。でっかい寶子か？」

驚くツナに対し、七花は的外れな質問をする。まあむべなるかなというところだが。

「匣の方は後で教えてやる。まずは指環の使い方だ」

ディーノは指環を七花に渡した。

「それを指にはめるんだ。どこでもいい」

「こうか？」

七花は右手の中指に指環をはめた。

「それで……この後どうするんだ？」

「イメージ いや、想像って言った方がいいのか。覚悟を炎に変える想像を試してみろ」

「覚悟を……炎に？」

「実際に見た方がいいな。ツナ」

リボーンが目を向けると、ツナは「う、うん」とボンゴレリングを七花に見えるように掲げた。

そしていつものように、炎を出す。

ポオッ

ボンゴレリングから死ぬ気の炎が吹き出すと、七花は「おおっ」

と声を上げた。

「ああいう風に炎が出る。解ったか？」

「んー……いや、見ただけじゃいまいち解んないけど、でも……」

七花はすう、と目を細め、自分の指にはまった指環を見つめた。  
数秒の後<sup>のち</sup>

ボオオツ

紫色の炎が、ごうごうと燃え盛った。

「お、うまくいった！」

「紫色の炎……雲属性の炎だ！」

笑う七花に、ツナは驚嘆する。まさかこんなに早くリングから炎を出すとは思わなかったのだ。

死ぬ気の炎を出すために必要な、覚悟。

死ぬ気の炎を出す時、彼はどんな覚悟を胸に秘めていたのだろう。

「じゃあ次に、匣兵器について説明するな」

デイーノは匣兵器を少しだけ持ち上げた。

「これは匣兵器つつてな、死ぬ気の炎を使って使う武器なんだ」  
「武器？」

そこで七花は、ふと顔を曇らせた。

「俺、武器とかそういうの、使えないんだけど」

「まあおまえの戦い方を考えればそうだろう」

リボーンは肩をすくめた。

「だからおめーにも使えるような武器を、ボンゴレの武器職人に造  
ってもらった」

「ほら、ここにくぼみがあるだろ」

リボーン言葉に繋げるようにして、デイーノは七花に匣の一面  
を見せた。

「何だ？ その丸いくぼみ」

「ここに死ぬ気の炎を出した状態で指環をはめてみる」

「？ ああ」

七花は言われるまま、ディーノから匣を受け取ってそのくぼみに死ぬ気の炎を宿した指環の石の部分をはめる。

ガチツという合わさった音が響いた。

ドシュッ

匣から何かが飛び出したかと思うと、七花の腕や脚に巻き付いた。  
「え、うわっ何だ!？」

七花は戸惑いの声を上げた。

匣から飛び出したのは、手甲とブーツのようなものだった。

銀色の装甲の、メタリックなデザインで、それそのものに雲属性の炎を宿している。

「これは……」

「おめーの虚刀流を強化できるように造らせた。おまえにとっちゃ手甲やら靴やらは鞘だろうが……死ぬ気の炎を使うためにはこうするしかなくてな」

「そっか……でもこれいいよ。動きやすいし、かつこいいし。うん、戦いやすそうだ。あ、戻す時はどうするんだ？」

「死ぬ気の炎が切れれば匣に戻るぞ。だから、指環の炎を出すのをやめればいい」

「炎を出すのを止めるか……」

七花の指環から炎が消えると、手甲とブーツも匣の中に戻っていた。

「凄えな。未来にはこんな技術があるのか」

「まあな。ちなみに死ぬ気の炎を出してるだけで体力を消耗するかな、そこだけ気を付ける」

「ああ」

七花は頷きつつも、嬉しそうに指環と匣を見比べた。まるでおもちゃを手に入れた子供のようである。

「これ、もらっていいんだよね？」

「勿論だぞ。それと一応教えとくが、おまえの炎は雲属性だ。特性は増殖。一応覚えとけ」

「おう」

七花は頷いた。おそらくは、すぐに忘れるだろうが。

「さて、と。七花、おまえに訊きたいことがある」

デイーノが新たな話題を出した。

「何だ？」

「変体刀のことだ。リボーンの話じゃ、真庭忍軍の奴らが二本持つてらしいじゃねーか。まああくまで可能性だが」

デイーノの言葉に、七花は「ああ」と頷いた。

「でも、それがどうかしたか？」

「この際だから完成形変体刀のこと、詳しく教えてほしくてな。それによっちゃ、今後の対策が変わってくる」

デイーノの言葉に、七花は「んー……」と首をひねる。

「……解った。まあこれに関しちゃ、俺もある程度説明できるからな」

そして話し出す。完成形変体刀のことを。

「完成形変体刀十二本は、それぞれ一つの主題を持って造られてるんだ」

「主題？」

「ああ。それぞれ違う。主題と銘だけを上げると」

何があるうと絶対に折れず曲がらない硬い刀、ぜつとう絶刀『かん鉋』。

全てを斬り裂くほどの比類無き切れ味の刀、ざんとう斬刀『なまくら鈍』。

消耗品として造られた、同一性を持つ最も数多い刀、せんとう千刀『ツルギ?』。

ガラス細工のように脆く、剣の達人にしか扱えない刀、はくとう薄刀『針』。

崩し難く、絶対の防御を誇る守るための刀、ぞくとう賊刀『ぞくとう鎧』。

何物より重く、怪力無双でなければ使えない刀、かなうち双刀『かなうち鎚』。

生物を無理矢理活性化させ、病をも沈静化させる刀、悪刀『鏹』  
人の姿を模した人形でありながら自立したからくりの刀、微刀『  
釵』。

持ち主の毒気を抜き、精神を矯正して王道を歩ませる刀、王刀『  
鋸』。

この世で一番誠実で、敵ではなく己を斬る刃無き刀、誠刀『銚』。  
強力で強烈な毒気を持ち、作り手の魂さえ宿す危険な刀、毒刀『  
鍍』。

精密性と連射性に優れ、遠隔攻撃を可能にする飛び道具の刀、炎  
刀『銃』。

どれもこれも異質、いや異常である。

そんな刀があつてたまるか、まず刀じゃないじゃないかとツナ達  
は思つてしまった。

「……どんな理由があつて、四季崎はそんな刀を造つたんだ」  
リボンがあきれるように言つた。

別に答えを求めるものではない。しかし、七花にはあつたのだ。  
それに対する答えが。

そしてツナ達は、七花の口から四季崎記紀の目的を知ることにな  
る。

歴史の改ざんという、途方も無い目的を。

「はひ？」

飲み物が入つた袋を持ったハルは、知り合いを見付けて首を傾げ  
た。

「遊莉ちゃん？ どうしたんですか、こんなところで」

大きな目に眼鏡をかけた少女はこちらに気が付いてにこつと笑つ  
た。

「ハルちゃん！ そっちこそどうしたの？」

「？ ハルちゃんの知り合い？」

同じく缶が入った袋を持った京子は、ハルと少女を見比べた。

「はい！ 伊瀬遊莉ちゃんと言って、クラスメイトなんです」

ハルは京子の質問に答え、もう一度少女 遊莉に尋ねた。

「遊莉ちゃんも、誰かのお見舞いですか？」

「まあね。それよりさ」

遊莉はにこにここと屈託無く笑った。悪意など全く感じられない、愛らしい笑みだった。

「せっかく会ったんだし、ちょっと話さない？」

## 第十二録 炎と匣（後書き）

七花の匣兵器登場です。

雲属性なのは私の七花に対するイメージです。何となく。

イメージカラー的に嵐かなとも思ったんですが、それは別のキャラに置いておきたいので。そのキャラというのは……のちのお話で。次回は獄寺と山本のターン！ ランボも出たし、いい加減了平出したいです……

### 第十三録 雷のリング

獄寺と山本は病院へ行く道に着いていた。

「てめえ……何で付いてくんだよ！」

「俺もツナの見舞いに行くんだよ」

ぎらぎらと怒気を放つ獄寺に対し、山本はにこにこ彼の隣を歩く。

獄寺は舌打ちをしながらずかずかと道を進んでいた。

これはいつもの光景でありいつものやりとりなので、それ以上話が發展することはなかった。

話が進むのは、いつだって第三者が現れた時である。

「はひ？ 山本さんに獄寺さん」

病院目前というところで、見覚えのある顔に出会った。

「つけ、アホ女か」

「なっ、ハルアホ女じゃないですー！」

「ハルちゃん落ち着いてっ」

獄寺の発言につっかかる黒髪の少女 ハルをなだめる茶髪の少女

京子。足元にはツナの家にいる子供達三人がいる。そこまでは見覚えのある。だが、彼女らと一緒にいた少女を、獄寺と山本は知らなかった。

「？ その娘は？」

山本が尋ねると、少女の代わりにハルが答えた。

「この娘は伊瀬遊莉ちゃんと言って、ハルのクラスメイトなんです。何かお話がしたいって言って外に出たんですけど」

ハルの話を、獄寺は半分以上聞いていなかった。

そんなことより、少女の顔を見つめることに集中する。



この少女……どこかで見たことがある。

どこでだ？ 眼鏡をかけているせいかよく解らない。

もしかして、と思うが。

「……おい」

「はい？」

獄寺の低い声に、少女は首を傾げる。その仕種は警戒など必要無い普通の少女だ、が。

「その眼鏡……ちょっと外してくれねえか？」

全員が獄寺の言葉に沈黙した。いきなり何を言い出すんだと、誰もが驚き顔で彼を見た。

伊瀬遊莉とかいう少女を除いて。

「……鋭いなあ、嵐の守護者」

少女の雰囲気さがらりと変わった。

その変貌にのんきだった山本の表情はすぐさま変わったし、京子やハル達も何かを感じ取ったのか後ずさる。

しかし、その身体が突然ぐらりと崩れた。

糸が切れたように、彼女達は倒れたのである。無論、子供達も含めて。

「！ 笹川！？」

「て、てめえやっぱり！」

獄寺と山本はざっと少女に対して身構えた。

少女は眼鏡を外しながら笑う。

「くっくくく、安心しろよ。眠っただけなんだからよ」

眼鏡の下にあったのは、愛らしい、つり上がった大きい瞳である。表情は一変、不敵とも言えるものになった。

「ま、真庭青龍！」

「よう。こんにちは、久しぶり、いや改めまして、か」

真庭青龍はくくつと笑った。

「真庭忍軍裏組指揮官、真庭青龍さんじょー」

「てめえなんでアホ女のクラスメイトなんてやってんだよ！」

獄寺はダイナマイトを取り出しながら怒鳴った。

「てめえは別世界の人間だろうが！」

「だから、俺は一回死んで、ここで生まれ変わったの。つか気付かれない自信あつたんだがな」。眼鏡と表情だけで結構解んないもんなんだぜ。実際虚刀流には気付かなかった」

「？ この間以外で七花さんに会ったことがあるのか？」

竹刀を構える山本に、青龍は「あるよ」とあっさり答えた。

「アルコバレーノも一緒だった。あつちはどうだかねー。気付いてるだろうが……おそらく次に『伊瀬遊莉』として接触した時にけりを着ける気なんだろう。はっ、もしそうならしのび並に抜け目無い奴だ」

「んなこたぁいい！ そいつらから離れろっ」

獄寺は脅すようにダイナマイトをちらつかせた。

しかし青龍の返答は。

「やなこった」

んべえ、と舌を出す青龍。完全にこちらを馬鹿にしていた。

「こいつらの傍にいる限り俺の安全は保証される。その武器じゃ、俺と一緒にこいつらまで傷付けちまうからな」

「くっ……」

「なら刀はどうだ？」

山本はだつと走り出した。しかし、青龍は余裕を崩さない。

「やだなあ雨の守護者。戦うのは俺じゃねえよ」

「ん？」

山本が眉をひそめると 突然進路に何かが割り込んできた。

あるいは誰か か。

「なっ！？」

山本は思わず身を引き、『彼』の拳から逃れた。

山本は間合いを空け、その人物を見つめる。

「誰だ……あんた」

進路を塞いだのは、散切頭の小柄な男だった。更に袖を切り落とした着物　しのび装束に、全身に巻いた鎖。

真庭忍軍だった。

「真庭忍軍十二頭領が一人　真庭蝶々」

散切頭の男はそう名乗り上げ、素手で構えを取った。

空手　ではない。彼の構えは、山本が知るどの武術とも違った。……まあ徒手空拳のための武道を、山本は元よりあまり知らないのだけれど。

「野郎！」

獄寺はダイナマイトを投げようと導火線に火を着けた。

「忍法　爪合わせ」

が、導火線　どこかダイナマイトの上半分が切り落とされる。更に迫った『刃物』に、獄寺は慌てて後ろに身を投げた。

使い物にならなくなったダイナマイトを捨て、気配も感じさせずに攻撃してきた男を見る。

髪を短く刈り上げた中背の男だった。服装は真庭蝶々と同じ。つまりは、袖の無いしのび装束に全身に巻いた鎖である。

「てめえも真庭忍軍か……！」

「そうだ。真庭忍軍十二頭領が一人　真庭蠅螂」

男は名乗り上げた。

しかし何より獄寺が驚いたのは、彼　真庭蠅螂の爪である。

十本の爪全てが異様に長く、異様に太く、異様に厚く、そして異様に鋭かった。長さはおそらく、一メートルはあるだろう。

ダイナマイトを切り落としたのはあれだとすぐに理解できたが、一体どういうメカニズムだ。

獄寺は目を見開いて蠅螂の爪を見つめた。長い月日をかけて伸ばしても、ダイナマイトを斬り裂くほどの強度と切れ味を持てるわけ

ない。というか、普通途中で割れてしまう。

忍法爪合わせとか言ったか

「どういう仕組みだ、それ」

獄寺は悪態について今度は匣兵器を使おうと指にはめたボンゴレリングとアニマルリングをかけたようとした。

「遅い」

しかしその前に、蠅螂がその指を刈りにかかる。指を失ってはたまらないと獄寺は手を引つ込めるが、同時に攻撃する機会も失った。

「獄寺!？」

防戦一方になった獄寺を、山本は助けに入ろうとした。だが、蝶々がそれを許さない。

「させるかよ!」

突き出された拳を、山本は刀で受け止めた。

その体軀から想像できないほどの威力のパンチに、山本は呻く。

「ぐっ……」

「安心しろよ。あの娘達に危害を加える気は無えんだ」

蝶々は次々に拳と蹴りを繰り出しながら、諭すように言った。無論、戦いながらであろうと蝶々の口調は乱れない。

「俺達の狙いは、あくまでボンゴレ十代目の命とボンゴレリングなんだからな」

「! ツナの命だけじゃなく……ボンゴレリングもだっ」

山本は目を見開いて間合いを取った。が、すぐに詰められ、結局獄寺同様に防戦となる。

「蝶々、喋り過ぎだ」

獄寺になおも攻撃をしかけている蠅螂が、蝶々に言葉を投げかけた。

「こいつらに必要以上に情報を与える理由は無い」

「おっとすまねえ、蠅螂殿」

蝶々がばつの悪そうな顔を見、蠅螂はその動きを速めていく。

それは蝶々も同じで、山本の攻撃を封じるように刀への攻撃を続

けた。

まともに戦えば、獄寺と山本は勝つ自信がある。

しかしこの二人の頭領の戦い方は、こちらの動きを封じ、攻めに転じる隙を与えない戦い方だ。

しのびがまともに戦うわけが無い。しかしこんな戦い方、今まで戦ってきた敵はしなかった。

ゆえに、二人は少しずつ追いつめられてきていた

「さあて、蠅螂と蝶々が戦ってくれてる間に、こいつら連れていくか」

「そうですね」

青龍がそう言うつと、背後に音も無く立つた男は頷いた。

長髪を垂らした大柄な男である。袖の無いしのび装束に全身に巻いた鎖。

真庭忍軍十二頭領が一人、真庭蜜蜂である。

「とはいえ……狂犬の言い種じゃねーが、この身体じゃ運べんのはちび二人だな」

「人質は一人でもいいんじゃないでしょうか。ほら、雷の守護者であるこの子なら、イタリアのボンゴレにも効くでしょうし」

蜜蜂は牛柄の服を着た子供を持ち上げた。子供　ランボが起きる気配は無い。

「いや。人質が多ければ多いほど、無茶な要求をしやすい。通る可能性も高まるだろう。……人質と言えば」

そこで青龍はいたずらっぽい笑みを浮かべた。

「この雨属性の炎があつたら、おまえら死ななかつたかもな。相手を無効化させるのに、これほど効く『麻酔』はあるまい」

そう言った彼女の指には、一つの指環がはまっている。真ん中の石には青い、水のように揺らめく炎が吹き出していた。

雨属性の死ぬ気の炎。鎮静の炎が、笹川京子達の意識を奪ったの

である。

その炎を見て、蜜蜂は「全くですよ」と嘆息した。

「まあ青龍さんのおかげで生き返られたので、今はどうでもいいですよ」

「くくつ、そうかい。さて、と。んじや雷の守護者をこつちに……」  
青龍は伸ばした手を止め、顔をしかめた。

「……つたく、時期が悪いぜ。三人目が来るのは想定してなかった」  
目線は蜜蜂に向けられていない。蜜蜂の後ろを見ている。

蜜蜂の後ろ、数メートル離れた場所に現れた人物に、青龍は小さく舌打ちをした。

「空気読めんのか読めねーのか。どっちにしろ、おまえまで来るとは思わなかったぜ。晴の守護者」

「き、貴様ら一体……」

短い髪に鼻に付けたバンソウコウ。指には、武骨な手に不似合いな指環。

晴の守護者、笹川了平だった。

了平は目の前で繰り広げられる現状に呆然としていたが、倒れている京子を視認し、咆哮する。

「貴様らあ！ 京子に何をしたー！！」

いきなり突っ込んでくる了平。怒りに任せての突進だろう。顔を見れば解る。

「蜜蜂」

「はい」

青龍がため息まじりに呼ぶと、蜜蜂はランボを地面に置いて腰に帯びた得物を抜いた。

刀である。忍者刀ではない。彼の体格に見合った大太刀だ。  
迫りくる了平に対し、蜜蜂は刀を振り上げた。

刀を振り下ろされると、了平は後ろに身を引く。

「極限に誰なのだ、貴様らは！」

「僕らは真庭忍軍の者ですよ。そして僕は真庭忍軍十二頭領が一人

「真庭蜜蜂です」

蜜蜂はそう名乗り上げ、刀を薙ぐ。

了平はそれを避け、拳を連続で突き出した。

その速さは瞠目にあたいするが、しのびである蜜蜂にかわせない速さではない。

しかし、やはりそれは瞠目にあたいする速さである。

「凄いですね。拳一つ一つの迫力も、突き出される速度も。さすがボンゴレの守護者」

「そんなことはどうでもいい！ 京子達を帰せ！！」

「言われなくても返すよ」

青龍は頭をかきながら顔を歪めた。

「ったく。てめえのせいで戦略、作戦、いや布石が台無しだぜ。ただ、まあ」

が次には笑みを浮かべ、手の中にあるそれを了平だけでなく獄寺や山本にも見えるようにかかげた。

「何も得られなかったわけじゃあねえけどな」

「！ あ、あれは！？」

「アホ牛のボンゴレリング！」

青龍が持っているのは、ランボが持っていた雷のボンゴレリングだった。

「人質は得られなかったが、ボンゴレリングはもらっていくぜ」

青龍はにいと笑い、懷から三本のクナイを取り出した。そしてそれを、それぞれ獄寺、山本、了平に投げつける。

三人が反射的に避けると、螭螂、蝶々、蜜蜂はばつと身を引いて青龍の近くに移動した。

「！ てめえら、待て」

「じゃあな」

獄寺の制止を彼らが聞くわけがなく、四人のしのびはだんと地面を蹴ってその場から立ち去った。

追いかけようと獄寺は目をやったが、屋根の上を飛び越えていく

その姿は、すぐさま見えなくなってしまった。

「結局収穫はボンゴレリング一つか」

蝶々が残念そうに言った。

「欲を言えばあのちび二人も連れていきたかったがな、それに時間を使えばその隙に反撃されるだろうからな」

青龍は屋根の上を走りながら肩をすくめた。

「正直なところ、俺達の実力じゃ奴らとまともに戦<sup>や</sup>つて勝てるわけがねえんだよな。あいつらと互角にやりあえんのは蠼螂と海亀、あとは鳳凰ぐらいか。場合によっては狂犬もかね。喰鯨はぎりかなあ……あと忍法的に人鳥ぐらいか？」

「……ぬし自身は入っていないのか」

蠼螂の問いに、青龍はからから笑う。

「入ってるわけねえだろ。俺は戦闘要員じゃねえからな。まあ、新しく手に入れた『忍法』は、攻撃的と言えば攻撃的だが。ま、今はどうでもいい」

青龍は手の中のボンゴレリングを眺めた。

「これでボンゴレリングを二つ手に入れたことになりますね」

蜜蜂の言葉に、青龍は「ああ」と頷く。

「あの男に従う形みたいで気に入らないが、これでまた計画に一步近付いたな」

「今後はどうする？」

「おまえなら解ってるだろ、蠼螂。一旦行動を控える。生き返らせたいいいものの、出現させる場所を間違えた奴もいるしな。そっちの情報も手に入れたいし……鳳凰と相談しなけりゃ決まらんが、まあだいたいそういうことになるだろうよ」

これからはしばらく動かない。青龍はこれからの方針をそう決めていた。



しかし問題がある。

（十二頭領はともかく……あいつらが俺の命令を聞くかどうか不安なところだな。特にあの馬鹿女……）

脳裏に浮かんだのは、同じ裏組に所属する同僚だ。

人格的に破綻した者が多い真庭忍軍の中でも、あいつの破綻ぶりは裏組随一だ。

（帰ったら釘、刺しておくかねえ）

青龍は息を乱すこと無く、表情も変えないまま内心でため息をついた。

彼女の危惧は、数日後現実になるのだが、今はまだ誰もそれに気付かなかった。

今この時、敵味方含めての問題は、真庭忍軍が雷のリングを手に入れたという事実である。

真庭忍軍、蒐集現状。

霧のボンゴレリング、雷のボンゴレリング。

絶刀『鉋』、毒刀『鍍』。

ボンゴレ側にとって、ある意味最悪と言える状況だった。

### 第十三録 雷のリング（後書き）

虫組登場です。でもあんまり目立たなかった……かも。  
次回は変体刀所有者出したいです。

#### 第十四録 千刀（前書き）

諸事情でタイトル変えました。

## 第十四録 千刀

真庭忍軍に雷のボンゴレリングを奪われてから三日後。

リボーン、七花、ビアンキの三人は並盛山の中にいた。

ビアンキは変体刀の所有者を探すようリボーンに言われており、つい昨日、『異変』を見付けたのである。

「ビアンキ、この辺りなのか？」

リボーンが尋ねると、ビアンキは「ええ」と頷いた。

「口で言うより、見た方が早いわ。私も、初めて見た時は信じられなかったもの」

よほど異様な光景を見たらしい。眉間にはしわが寄っている。

「近くに誰かいなかったのか？」

「いいえ。私が見た時はいなかったわ」

七花の質問に、ビアンキは首を横に振る。

「少なくとも、貴方が最初に着ていた服装の人なんていなかったわよ」

「いや、俺の格好は向こうでもあんまいなかったけど……」

七花は返答に困ったように頬をかいだ。

「まあそれはともかく。一体誰だろうな……」

「あ、着いたわよ」

ビアンキが前方を指差した。

どうやら拓けた場所になっているようだ。しかし、何があるのかはここからでは見えない。

三人は更に近付き、その場所に出た。

「これは……！」

リボーンは目を見開いた。

なるほど、これは言われなければ解らない。

そこには、刀があつた。朱色の柄と鞘。特に特徴の無い、ごくごく普通の刀だ。

それ単体ならば。

その刀はたくさんあつた。多くあつた。ありふれるぐらいあつた。

全く同一の刀が、その場に大量に存在していた！

その様はまさに圧巻。

こちらを押し潰さん限りの数の刀。まるで分身したかのように全く同じの刀。

十、数十、百、いやもつと　！

無数と言える刀が、三人を取り囲んでいるようだった　！

「こんな膨大な刀が、何でこんなところに……」

「これは……千刀『？』だな」

驚くりぼーンに対し、七花は冷静な顔付きのまま刀を一本手に取った。普段と逆である。

「千刀『？』……例の、完成形変体刀の一本か」

なるほど数多い刀とは聞いていたが、ここまで……

「名前からすると、千本の刀か」

「まあな。所有者の名前は敦賀迷彩。つと、迷彩自身も探さなきゃな」

七花は辺りを見渡した。

しかし誰もいない。リボーンも視線を動かすが、人影らしき姿は無かった。

と。

「あれ？　虚刀流のぼうやじゃないか」

背後から声がかけられた。

三人共気付かなかった。三人の内二人は、確かな実力を持つ暗殺者だというのに、だ。

リボーンとビアンキは身体を緊張で硬直させるが、七花はその声に驚いたりしなかった。

ただ振り返り、その人物に「よう」と挨拶をする。

「久しぶりだな、迷彩」

「あたしの感覚だとあんまり久しぶりって感じじゃ無いが……一応君の感覚に合わせて、久しぶりと返しておこう」

背の高い女だった。山本とあまり変わらないぐらいの背丈に見える。量の多い黒髪を伸ばすだけ伸ばして、二つに分けて縛っている。若いように見えるが、しかし妙に貫禄があった。

着ているのは巫女装束だが、しかし袴がなぜか赤ではなく、黒だった。しかしそれ以外に、特に変わったところは無い。

そんな出で立ちの年齢不詳の女は、七花を見て首を傾げた。

「ところで何だい、その格好は。あと、そっちの二人は誰かな？」

女　敦賀迷彩は、七花に説明を求めた。

説明し終えた後、迷彩は「なるほど」とあっさり納得した。

普通、死んでいた自分が忍法で生き返り、おまけに別世界に来てしまったなどとそう簡単に信じるわけ無いのだが。七花といい右衛門左衛門といい、あっちの世界の住民はやけに柔軟性があった。

まあだからこそ、彼らは強者になりえたのかもしれないとリボーンは思わなくもなかった。

「ふうん。ならあたしがここにいる理由も、解るってもんだね。その……右衛門左衛門？　さんの推測も、千刀がある時点でかなり確信めいたものになってるし」

「まだ色々謎の多い部分があるが……しかしそれでも、かなり解ってきた部分も多い」

リボーンはそう言って、そこら中に無造作に置かれた刀　千刀

『？』を見渡す。

千本で一本の刀という荒唐無稽の刀。どういう方法を取ったかは知らないが、四季崎記紀は何をどう思っ、て、そんな刀を思い付いたのだろう。

「それにしても完成形変体刀……いや、変体刀千本全てが、歴史の改ざんなんていう大それた目論見のための道具とはね。しかも虚刀流そのものも変体刀最後の一本と言っじゃないか」

迷彩は面白そうに笑った。

歴史の改ざん。七花が語った四季崎記紀の目的は、まさにそれだった。

七花が言うには、四季崎は元々占い師で、未来を変えるために変体刀を造ったのだという。

目的があると思えなかった刀にそんな理由があったということに、三日前のリボーンやツナ、その場にいたディーノやロマーリオまで絶句したほどだ。

おまけに七花自身はそれら全てを習作にした完了形変体刀なるものだというにはもう絶句とかさういうレベルじゃなかった。もっとも、完了形変体刀に関しては、彼自身がではなく虚刀流そのものがそうらしいが。

そしてそれら全ての刀を、四季崎は占い師の能力である予知能力で得た未来の知識で造ったと言うのだからもはや黙る他無かった。

リボーンは姿見ぬ四季崎に、世界を征服しようとしたかつての敵であり、他のパラレルワールドの知識を得るとい、う、それこそ馬鹿馬鹿しいほどに恐ろしい能力を持つかの白蘭を重ねたが、しかし四季崎がそんな野心を持たなかったからこそ変体刀ができたと思うと複雑な気分だった。

変体刀があつたからこそ自分達は七花と出会えたし、逆に言えば現在の状況に陥った原因である。結局のところ、どっちつかずだった。

「さてと……まずは千刀の処理だね」

迷彩の言葉に、リボーンは我に返った。どうやら思ったより深く考え込んでいたらしい。

「それに関しては、ボンゴレの技術者に任せろ。さっき話した、匣の要領でなら何とかなるはずだ」

「問題は、彼女をどうするかよね」

ビアンキは迷彩を見上げて言った。迷彩の方が背が高いため、どうしてもそうなってしまう。

「まさか七花と同じように、ツナの家に居候させるわけにもいかないでしょ」

「だったら他の奴に頼んだらどうだ？ ほら、この間の跳ね馬とか」七花の提案に、リボーンは「そうだな」と頷く。

「ディーノも当面日本にいるしな。後で連絡入れるか」

「あ、そのことなんだけど」

迷彩が突然遠慮がちに手を上げた。

「もう一人いてもいいかい？」

「もう一人？」

「実はさっき、あたしと同じ所有者に会ったんだよ」

さらに、驚きの事実を教えてくれた。

「人の気配を感じたから、離れた場所で待つてよう言ってこっちに来たんだ。まあその気配は君達のだったんだが」

「誰なんだ？」

七花が尋ねると、迷彩は「黒巫女だよ」と答えた。そして、リボーンとビアンキのために説明を加える。

「黒巫女っていうのは三途神社に仕える女達でね。名前は凍空こなゆき」

「こなゆきが？」

七花は目を丸くした。

「黒巫女姿ってことは……そっか、無事に出雲に着いてたんだな」七花は安心したように呟いた。

「そいつが持っているのは、どういう刀なんだ？」



リボンが訊くと、七花は口を開こうとした

誰もが身をすくませた。

「な、何だ……!？」

「あつちはお嬢ちゃんを置いてきた方向だ！」

病室のベッドに未だ寝転がっているツナを見下ろしても、何の反応も無い。

問題は身体より、精神の方なのだ。

京子達を巻き込んだ真庭忍軍に対する怒りからなのか、傷のため  
 とはいえ彼女達を守れない自分が腹立たしいのか。

しかし解ったところでかける言葉が思い付くわけでもなく、ただこうして彼の傍で立ち尽くすしかないのである。

七花は、狂犬の刺青だけを斬ればクロームを傷付けずに済むと言ってるが、そんなことができるのは鎧崩しができる七花自身のみで

ある。

それに今この時も、クロームが無事であることには何の保証もない。

狂犬が身体を乗り換えていたら　そしてボンゴレリングがクロームの手元に無かったら

……これ以上は、もはや最悪の結果しか思い浮かばない。という  
か考えたくない。

獄寺でそうなのだ。ツナの心中など、嵐より荒れてるだろう。

「……リボーンと七花さんは」

と。突然ツナは切り出した。

「ビアンキが変体刀らしきものを見付けたから、今並盛山に行ったんだ」

「そ、そうなんスカ」

だから自分は呼び出されたのかと獄寺は納得する。

「その前に、七花さんが話してくれたんだ。真庭忍軍のこと、ちょっと」

「あのヤローにスカ？」

訊くと、ツナは小さく頷いた。

「……七花さんは真庭忍軍の十二頭領を、三人斬ったって」

「……」

それは、獄寺が前に聞いた話だ。

その時七花は　何と答えていたか。

「俺訊いたよ、何で殺したんですかって。敵とはいえ、殺す必要は無かったんじゃないかって」

それはあの時、山本が言った言葉と同じだ。おそらく、七花の答えも同じではなからうか。

「刀だからだって言ってたよ、七花さん。自分はいながらにして一本の日本刀。刀は持ち主を選ぶ。けど斬る相手は選ばないって」

やはり、思っていた通りの答えだった。

しかしツナは、なぜ急にそんなことを言い出したのだろうか。

「俺、解らないよ」

「十代目？」

「七花さんは悪い人じゃない。だけど、人を何人も殺したんだ。それは許せないし、でも、だけど……」

ツナは顔を歪めた。

「俺、あの人を信用していいのかな。人を殺しても平気なあの人を、許してもいいのかな。行為自体は許せないけど、俺はあの人を憎めないよ……」

それは自分に解答を求めているのか、自問自答をしているのか、獄寺には解らなかった。

おそらく　これは前者であり、後者だ。どちらも求め、どちらも求めていない。

答えは欲しいけれど、答えが怖いのだろう。

答えた時、確実に何かが壊れてしまうからだ。それが何かは獄寺には解らないが、あるいは

『……！』

二人ははつと顔を上げた。

人の気配を感じたのだ。

二人同時に窓辺に目を向け、そして『彼』を見る。

二人と同年か、あるいは年上の、目鼻立ちが整った少年だった。長い髪を背中に流し、切れ長の目には燃えるような紅い瞳が収まっている。引き締まった口元には完璧な笑みが貼り付いていて、掴みどころの無い雰囲気を持っていた。

一体いつからそこにいたのか、二人には皆目見当が付かない。

「貴方は……誰ですか？」

ツナが尋ねると、彼は「名乗る前に」と前置きして、尋ね返した。  
「僕、何に見える？」

「何って……俺らとタメぐらいのヤローだろ」

獄寺の言葉に、少年は「へえ」と唸った。

「ふむ、つまり少年ってわけだね。ふんふん、男の子になるのも久しぶりかな」

「あの……本当に誰ですか？」

若干ひきつりつつあるツナの顔を見て、少年は浮かんでいた笑みを更に深めた。

「初めまして、僕は彼我木輪廻だよ。よろしくね」

#### 第十四録 千刀（後書き）

敦賀迷彩、彼我木輪廻登場です。

彼我木は相手の苦手意識でその姿が決まるのですが、今回はツナと獄寺の苦手意識から姿が決まっています。

一体二人が誰を苦手にしてるか、次回をお楽しみに！

## 第十五録 銓と仙人

その名に、ツナも獄寺も聞き覚えは無い。

なのに、どこかで会ったかのような感覚を覚えるのはなぜだろうか。

「……あ、あれ？」

ツナは首を傾げ、再度少年 彼我木輪廻を見た。

背が高い。おそらく、獄寺より高いだろう。

「てめー……一体何者だ？ なにもん 十代目に何か用か？」

獄寺が睨み上げると、彼我木は笑んだまま「んー」と唸った。

「別に君達自身に用は無いのね。ただ知った名前が聞こえたからさあ」

「知った名前？」

「うん。君達、鑢七花クンのオトモダチでしょ？」

彼我木はそう言いながらツナに歩み寄った。

「て、てめえ近付くんじゃねえ！」

慌てて獄寺が間に入るが、その顔はどこかひきつっていた。

獄寺も感じているんだろうか。彼に会ったことがあるかもしれないと。

「やだなあ、別に僕は敵じゃないよ。そもそも僕は仙人だからね、戦う力なんてほとんど無いし」

「せ、仙人……？」

また突拍子も無い話だ。

いや、しかし、七花のことを知ってるのなら。

「あ、あの」

「ん？」

「七花さんの知り合いってことは、貴方も違う時代の人なんですか？」

「そういうことになるかなー」

彼我木は肩をすくめた。

「全く何で僕はここにいるかな。おまけにとがめチャンに押し付けた誠刀『銚』は持つちゃってるし」

「え……！」

ツナははっとして起き上がった。

「あ、貴方、変体刀の所有者なんですか！？」

「一応ね。でもこんなのに毒されるのはまっぴらだから、ついこの間まで土の中に埋めてたんだよ」

そう言って、彼我木は懐から何かを取り出した。

刀の柄である。小刀かとも思ったが、違う。刃が無い。

「え……それ、刀なんですか？」

「そうだよ。これが完成形変体刀十二本が一本、誠刀『銚』さ」

彼我木は手に持った柄を軽く振った。

しかしツナと獄寺には信じられない。

刃が無い刀など、本当に刀と呼べるのだろうか。

「あ、その顔は疑ってるね」

彼我木はにこやかにツナに顔を近付けた。

ツナは思わずのけ反るが、しかしやはり、その顔には見覚えがある。

「七花クンが来たら解るさ。まあそうすぐには来ないだろうけど。だから、これは君にあげるよ」

「え、えええ！？」

「あ、でもタダで上げるのは無しだよ。そうだなあ」

彼我木はツナと獄寺の反応には無頓着で、んー、と唸り出した。

一体何なんだろうこの人は。一体全体何者なんだろう。

この感じは……この見覚えがある感じは、何だと言うのだ。

「よし、決めた。君達が自分の苦手意識に気付いたらあげるよ」

「に、苦手意識？」

「そ。僕はさつきも言った通り仙人でね」

彼我木はツナから距離を置いた。

「本当の姿とか正体とか、そういうものを持たないんだ。この姿も性格も、君達が僕のことをそういう風に見ているだけに過ぎないのさ」

「おい、何わけ解んねーこと言つてやがる！」

獄寺は彼我木を睨み上げた。が、彼は全く動じない。

「そう怖い顔しないでよ。ようするに僕は、君達人間の苦手意識によつて形成されるのさ。それが仙人というものだよ」

彼我木の話はよく解らないが、つまり

「つまり、俺達の苦手な人の姿をしてるってことですか？」

ツナの言葉に、彼我木は「そうそう」と頷く。

「君達の場合は同時に僕を見たから、二人分の苦手意識がつみ込まれてるよ。さて……解るかな？」

彼我木は完璧な笑みを浮かべたまま長い髪を揺らした。

「獄寺君、解る？」

「そう言われましても……苦手意識、というか、苦手な奴なんて……」

いない、と言いかけたようだが、途中で言葉が消えていく。心当たりがあるらしい。

というか、ツナには獄寺が誰を苦手としているか、すぐに解ったのだが。

解ったから、すぐに彼我木の髪型が誰のものかに気が付いた。

「もしかしてあの髪型、ビアンキのじゃない？」

「……！ あっ……」

ようやく気付いたらしい。その顔が少しだけ青ざめる。

別に顔はビアンキではないのだから、まさか腹痛が来たのではあるまいが。

……そういえば、彼の顔は誰のだろう。



彼我木は少年姿なのだから、つまり同年代の男ということになる。  
あの顔立ち……誰だっけ？

「っ、ああ！」

ツナは気付いた瞬間、飛び上がった。

そっだあの顔。髪型や目の色、浮かべる表情などが違ったために気付かなかったが、ようやく解った。

「ひ、雲雀さん！」

「なっ、雲雀の奴ツスカ！？」

獄寺もまた気付き、驚いたらしい。そこでふと、彼は眉をひそめる。

「でも……あいつより背が高くありませんか？俺と同じくらいだったはずツスよ」

「そういえば……」

雲雀の身長は獄寺とあまり変わらなかったはずだ。だが彼我木は、獄寺より明らかに高いのである。

身長はまた別の誰かの。でも誰の？

「……山本」

と。獄寺がぼつりと呟いた。

ツナは首を傾げ、そしてはっとする。

獄寺の言う通り、彼の身長は山本と同じくらいだ。いや、彼我木の話が本当だとしたら、おそらく全く同一なのだろう。

山本を苦手とするのは、多分獄寺のだろう。自分でないのは確かだ。雲雀は自分の苦手とする人物だろうが。

だとしたら、他のは。

しかしツナは、考えてる内に気付いていた。彼我木の瞳と笑み、そしてその性格が誰なのかを。

それはツナが超直感を持っているからこそ気付けたことであり、獄寺はまだそれに思い至っていない。

いや、どちらにせよ思い至るわけが無いのだ。

それらは全て、ツナの苦手とする者達なのだから。

「その瞳……多分、ザンザスのだ」

「えっ」

「笑みは……骸。性格は」

彼我木の笑みが深まった。紅い瞳を細め、端正な顔には期待が浮かんでいる。

なぜ気付くのが遅かったのだろう。こんなにもはっきりと、その姿は彼らにそっくりだと言うのに。

「性格は……白蘭だ」

「……」

獄寺が黙り込んだ。

ツナが彼らを苦手とすることに、獄寺は何の疑問も持っていないことだろう。

雲雀はともかく他の三人は、かつての敵なのだから。

骸に命を狙われ。

ザンザスとボスの座を争奪し。

白蘭と死闘を繰り広げた。

三人が三人、ツナの大切なものを傷付けた。

苦手どころの話ではない。三人に対し、それぞれ違う、複雑な感情を抱いている。

特に白蘭には

「……ふうん」

彼我木は面白そうに唸った。

「ビアンキ、雲雀さん、山本、ザンザス、骸、白蘭ねえ。それが君達の苦手意識なんだ」

「知らねえみてーに言うな!」

「知らないよ。僕は仙人なんだ。他人の心を読むなんてことできないよ」

彼我木は肩をすくめた。

「何もしないのさ、仙人は。何もしないし何もできない。何かをしでかすのは、いつだって君達人間なんだよ」

「……」

「ついでに言えば、たとえ今僕を形成している君達の苦手な人達がどんなに凄い奴でも、僕はその力を使えるわけじゃない。あくまで姿と性格が同じなだけなのさ」

つまり 彼らのどんな力も技も、姿形が同じだろうと何だろうと彼我木は使えないということか。

ビアンキのポイズンクッキングも。

雲雀の圧倒的な実力も。

山本の時雨蒼燕流も。

ザンザスの憤怒の炎も。

骸の六道のスキルも。

白蘭の並行世界を見る能力も。

何も使えない。何もできない。

なら彼我木輪廻は、何のためにいるのだろう。

「……ふうむ」

彼我木は唸り、誠刀を軽く振った。

「まだ駄目かな」

「え？」

「君は誠刀にふさわしいかと思ったけど、まだ駄目だ。君が誠刀を得るには」

彼我木は、ツナの瞳を覗き込んだ。

彼の目はザンザスのものだ。なのにそこに憤怒の色は無く あ  
るのはただ、凧いだかのような静かな光のみだった。

「自分の苦手意識と向き合う必要があるよ」

爆発音が響いた場所に到着すると、焦げ臭いようなきな臭いような臭いが七花達を出迎えた。

遅れて来た熱風に汗をかきつつ、七花は声を張り上げる。

「こなゆき！ どこだー！！」

辺りは焼け野原以外に、形容する言葉が無かった。

木は根本を残して焼き払われ、低木や草花も黒く焼け焦げてしまっている。視界の半分以上は黒い煙に覆われ、とても一人の少女を見付けられる状態ではなかった。

なかった、のだが。

「……し、七花おにいちゃん？」

幸運にも七花の声は届いたようで、聞き覚えのある声が上がった。七花はそちらに走り寄る。

煙が目に入らないように半眼で辺りを見渡せば、探していた少女を見付けることができた。

迷彩とは違い、上下共に真っ黒な巫女装束。背中には石刀を背負い、前は長かった髪は肩上に切り揃えられているが、間違い無い。凍空こなゆきだ。

「こなゆき、無事か！？」

七花が膝を着いて目線を会わせると、よほど怖い思いをしたのか、こなゆきは涙目で七花に抱き付いた。

「七花おにいちゃん！ ひ、火が、火が……」

「大丈夫、もう大丈夫だからな」

七花はこなゆきの背中を軽く撫で、同じように寄ってきたリボン達を振り返った。

「無事か、そいつは」

「ああ。怪我は無いみたいだ」

七花はこなゆきから少しだけ身体を離れた。

「それにしても……これは一体……」

迷彩が愕然とした表情で辺りを見渡した。

確かに、こうも無惨に、容赦無く山の一部を焼き払うなんて、一体誰が

「ん？ 誰、誰なの、誰なのさ？」

と。煙から言葉と一緒に、一人の女が出てきた。

派手なかんざしを髪に差した、なまめかしい容姿の女だ。場違いとも言える美女の登場に一瞬誰もがほうけたが、彼女の服装に全員はつとした。

そでを切り落としたしのび装束に、全身に巻いた鎖。

この女　真庭忍軍だ。

「七花、あれは誰だ？」

リボーンの質問に、七花は顔をしかめた。

「知らない……少なくとも、俺は会ったことがない」

本当に見覚えが無い。自分が会ったことの無い十二頭領だろうか。  
「ん。あああんだ、虚刀流ね。そうでしょ、そうなんでしょ？」  
女は首を傾げた後、七花を指差した。

「青龍と違って、あたしとは初対面ね。だから名乗ってあげる。真

庭忍軍裏組所属、鳥組担当の真庭朱雀よ！<sup>スザク</sup>　覚えときな！！」

「鳥組……担当？」

七花は目を瞬かせた。

「七花、鳥組つてのは何だ？」

「あ、ああ。真庭忍軍には四つの組にわれてて、鳥組、獣組、虫組、魚組があるんだ。真庭鳳凰は鳥組、真庭狂犬と真庭蝙蝠は獣組、真庭喰鯨は魚組だ」

「となると、この間の真庭蟪蛄、真庭蝶々、真庭蜜蜂は虫組か……」  
リボーンは少し考えた後、「おい」と女　真庭朱雀に尋ねた。

「おまえが真庭青龍と同じ裏組なのともかく、その鳥組担当つてのは何だ？」

「ああ？　そのまんまの意味に決まってんじゃないの。真庭裏組は裏で十二頭領を補佐している。その中でも幹部たる四人が、それぞれ組によって補佐の担当が決まってんのさ」

「それは……真庭青龍もか」

「当たり前でしょー。あいつは虫組担当よ。……ってこれ言ってい

いんだっけ？」

今更ながら口をつぐむ朱雀。それに先程の言動から、青龍と違って随分落ち着きの無い女だった。

「まあいいわ、いいわよね。あんた達消し炭ちゃえばすむものね」

朱雀はこともなげにそう言つて、にいつと笑つた。

その両腕が、驚くことに炎に包まれる。

「……………！？」

「真庭忍法『火喰い鳥』！ 消えな真庭忍軍の敵共お！！」

朱雀の腕から火炎が放たれる。業火は、いともあつさり七花達を飲み込んだ。

「あれ？ そういや虚刀流殺しちや駄目なんだっけ？」

朱雀は少しだけ青ざめた。

「やつぱ……………ただでさえ勝手に出てきたのに、このままじゃ青龍に怒られるどころじゃないわ」

ちよつと慌てる朱雀だが、幸か不幸か、それは杞憂だった。

「俺を殺しちや駄目だったのはどういうことだ？」

炎が引いていく。本来なら焼け焦げた死体がある場所には、生者達が立つていた。

その先頭に立つのは、七花だ。

両腕には手甲、両足には金属製のブーツ。それそのものには、紫の炎が宿っている。

七花はそれらで、朱雀の炎を防いだのである。

「し、死ぬ気の炎と匣兵器……………！？ あんた、いつの間に」

「もらったんだよ。それより……………来いよ、真庭朱雀。相手してやる」

七花は構えた。虚刀流一の構え、『鈴蘭』だ。

「虚刀流七代目当主、鑢七花。推して参る」

「……………はん。真庭忍軍裏組、真庭朱雀。行かせてもらつたよ」  
朱雀の両腕が、再び炎に包まれた。

「殺しはしないけど火傷はしてもらうわよ、虚刀流。両腕両足焼き潰して、連れ帰ってやるわ!」

「やってみる。ただしその頃には、あんたは八つ裂きになっているだろうけどな」

七花はいつぞや奇策士に決められた決め台詞を言い放ち、地面を蹴った。

匣兵器の試し斬りをするように

## 第十五録 銓と仙人（後書き）

獄寺の苦手な人物がビアンキなのは公式ですが、他は沙伊の想像です。

彼我木の七花やとがめに対する呼び方が変わったのは、性格が白蘭だから。性格が変わったら呼び方も変わると推測。

それからまたもおりまに登場。これ刀語ファンの方に批判受けたりしないだろうか……（ガタブル

そろそろ否定姫&amp;ジョットサイド出したいです。でも先にツナ&amp;七花サイドの方を解決しなきゃ……



## 第十六録 理由

「俺が……誠刀にふさわしい……？」

ツナの愕然とした呟きに、彼我木は「多分ね」と答えた。

「あくまで予測であって確信ではない。それにまだ駄目だと、僕は思っね」

「ちょ、ちょっと待ってください！ 何で俺は誠刀にふさわしいって……」

「君、誠刀の特性は七花クンから聞いてないかな？」

言われ、ツナは思い出す。あの時、七花は何と説明していたか。

「……えっと、確か最も誠実な刀だって」

「そう。『銚』とは、その名の通り天秤という意味さ。他者ではなく己を斬る刀。己を試す刀。己を知る刀。だからこそ無刀。……まあこれは、とがめチャンの言葉なんだけどね」

そう言っただけ我木は、うけ付け、と笑う。笑い方を知らないのに、無理矢理笑っているような笑い方だった。

「それがまさに君にぴったりだと、僕は思ったわけ。君は、人を平等に見ている。敵であろうと味方であろうと何だろうと、誰に対しても君は優しく、優し過ぎるぐらい優しく接することができるだろう」

「そんなこと……」

「できない？ でも僕が見る限り、君は敵に情けをかけたり、かつての敵を受け入れたりしてそうだけど」

「……」

反論は、できない。まさにその通りだ。

よくよく考えてみれば、自分の苦手意識にしる獄寺の苦手意識に

しろ、山本以外とはかつて敵対していた。

ビアンキには命を狙われていたし、雲雀には危うく咬み殺されかけた。骸、ザンザス、白蘭は言うまでもない。

しかしビアンキや雲雀は今や頼れる仲間だし、骸やザンザスとは共闘することもあった。

普通なら、一緒にいること自体嫌がるのかもしれない。だけど自分分は、気付けば彼らを受け入れていた。

彼らだけじゃない。他にも敵を受け入れたことや、情けをかけて殺さなかった人間はいる。

それが 彼我木の言う平等かは解らないけれど。

「でもさあ」

と。彼我木の声に、ツナは現実に取り戻された。

「君は唯一、平等に見ていない人間がいると、僕は思っわけ。それが今の僕の性格の持ち主だと思う」

「……白蘭」

ツナは小さく呟いた。

「そう、それ。何があったかは知らないけど、君はその白蘭って奴にかなり苦い思い出があるみたいだね。いや、苦いというより、痛いかな」

「おい、てめえ！」

突然、ずっと黙っていた獄寺が声を荒げた。

「さつきから妙なこと言いやがって、十代目をわずらわせるんじゃないねえ！」

「怖いなあ。僕はあくまで、真実を言ってるだけなのに」

そう言っただけで、彼我木は、微笑する。骸の笑みを、浮かべる。

彼を見ているだけで、何だか気分が悪くなる。彼が苦手意識を集めた容姿だからか。

「とにかく、君が苦手意識を克服しなきゃ誠刀はあげない」

「最初は苦手意識に気付いたらって……」

「そんなこと言っただけ？」

気まぐれだ。そんなところも　白蘭そっくりである。

「でも、苦手意識を克服しろって……いきなり言われても……」

「まあ、そりゃそうだ。じゃ、白蘭って奴だけでも克服すればよしとしよう」

彼我木は軽く言うが、苦手意識がそう簡単に克服できるものだろうか。そもそも

「何で白蘭にこだわるんですか？」

「今の僕の性格だから」

彼我木は自分のことを指差し、うけけけと笑った。

「性格に表れるぐらいだ。一番苦手に思ってるんじゃないの？」

「……」

「僕は君じゃなくて、そっちの彼の方の苦手意識が性格に出ると思っただけだね。まあ性格に形成されるぐらい、根深いんじゃない？」

彼我木はツナの顔を覗き込んだ。

「一体白蘭って奴と、何があつたんだい？」

「……白蘭は」

ツナはぎゅっ、と両の拳を握り締めた。

「俺の大切な人を傷付けた。白蘭のせいで、たくさんの人が苦しんだ。それに」

「それに？」

「あいつが未来をめちやくちやにしたせいで、ユニが死んだ……！」

今でも、ツナの心に大きな傷跡として残っている。

めちやくちやになつた未来を元に戻すため、そして自分達が辛い未来をもつ見ないですむように、己の命の炎を燃やし尽くした少女。白蘭が未来を変えなければ、白蘭が未来を壊さなければ、白蘭さえいなければ、ユニは死なずにすんだのに。

生きて、いられたのに。

だから、自分は

「それだけ？」

しかし彼我木は軽く、軽々しくそう言い放った。

「それだけで、君は白蘭を殺したの？」

「っ……………」

「凶星みたいだねえ」

彼我木は笑う。それは、嘲笑のようだった。

「なるほど確かにそれは、許されない罪だ。死んだってつぐなえきれない罪だ。けどさあ、それって他の人達もそうじゃない？」

「……………」

「雲雀さん？ ザンザス？ 骸？ まあ誰でも。多かれ少なかれ、みんな白蘭って奴と同じことをしてるんじゃない？ 誰かを傷付けて、誰かを苦しめて、誰かを殺してるんじゃない？」

それは 確かにそうだ。

ヴィンディチェ

骸は復讐者に連れていかれるぐらいの罪を犯したし、ザンザスは暗殺部隊のボスである。雲雀だって、並盛の風紀を守るために後ろ暗いことをしてるだろう。

規模の違いこそあれ、彼らがやっていることは白蘭とさして変わらない。

「一人殺そうが百人殺そうが、結局同じ殺していることに変わらないのさ。生きるという、人間の最大の目的を阻害してる。君が白蘭に対してやったことも、また」

「……………」

「人はね、殺したら死ぬんだよ。そんな当たり前のことは君は解ってるだろうけど、けど白蘭に関してだけは、そのことに目をそらしている。君が唯一殺した、白蘭というただ一人の人間に関してだけはね」

「……………」

ツナは、反論できなかった。

彼の言葉を一字逃さず、余すところなく否定したい。

けれど、彼我木のことはどれもこれも間違っていない。むしろ正しい。

自分が、白蘭の存在を消滅させたのは事実なのだから。

自分の炎で、焼き尽くしてしまったのだから。

「君は真正面からそれを受け止めるべきだ。それが何と釣り合うか、考えるべきだ」

「何と、釣り合うか……」

「君は何のために戦う？　したくもない戦いに身を投じて、君は何のために戦うんだい？」

彼我木の質問に、ツナは一瞬言葉をつまらせた。だが、その質問の答えは決まっている。

問われるまでもない。問われる必要も無い。

それは、初めて戦いたい、勝ちたいと思ったあの日から、決まっている。

「みんなを守りたいから」

「……」

「大切な人達を守りたい。仲間と笑い合える、そんな平和な未来を作りたいから。だから俺は、戦うんだ」

迷うまでもない。骸と戦った時も、ザンザスと戦った時も、白蘭と戦った時も、ただそれだけだったのだ。

その気持ちはいつまでも変わらない。変えるつもりはない。

自分の炎は、ただそれだけのために使いたい。

「……やっぱり、君は誠刀『銓』にふさわしいや」

彼我木は笑みを深め、ツナの膝に誠刀をぽいと投げた。

ぞんざいな扱いだが、刃が無いため別に危険な行為ではない。

「君なら誠刀『銓』に毒されずに、その刀を所有することができだろう。どちらにせよ、仙人の僕には必要の無いものだ。好きなだけ持っていきなよ」

ていうか、僕が押し付けてるんだけどね　と彼我木は言い、うけけけと笑う。そんな笑い方をする人物は知らないのです、それは正体を持たない彼我木の、唯一の『彼自身』なのかもしれない。

「ま、一応僕が君達に関わるのはここまでだ。俗世から切り離され

てる僕の、唯一の『縁』を君達にあげたんだから、僕はそろそろ姿を消そう」

彼我木はツナと獄寺から距離を取った。

「じゃ、七花クンによろしくね 沢田綱吉クン、獄寺隼人クン」

そんなことを言って 二人がまばたきをしている間に、彼我木は姿を消した。

まるで最初から誰もいなかったような まるで最初から何も無かったような、そんなふうに。

「……あ、あいつ、本当に仙人だったんスカね？」

「解らない……」

ツナと獄寺は、誠刀『銚』に目を落とした。

刃無き刀。ただ柄と鰐があるだけの刀。

とても刀とは言えないけれど

「……とりあえず、これで誠刀『銚』を手に入れられたよ」

ツナは誠刀を手に取り、柄を握り締めた。

離さないように、しっかりと。

「あたしの通り名教えてやろうか、虚刀流？ 『紅蓮の朱雀』！

その名の通り、辺り一面火の海に変えるわ、変えてやるわよ！！」

朱雀の手から炎が放たれた。

七花は匣兵器を付けた手でそれを払い、だつと走り出す。その勢いを合わせ、足刀を放った。

が、朱雀はそれを身を引いてよける。七花はそれを追うように、否、その蹴りを利用して更に攻撃を重ねた。

「虚刀流 『梅』！」

外れた蹴りの勢いを利用して一回転。その後、流れるように回し蹴り。つまり七花は、二回回転しての回し蹴りを放ったのだ。

これには朱雀も反応しきれない。そのまま、側頭部に足刀を喰ら



朱雀はぎろり、と七花を睨み付け、右手の指に何かをはめた。

「あたしを！ なめんじゃねーわよ！！」

ボオオオツ

中指にはめられたもの 指環から、赤い炎が吹き出した。

朱雀の炎の如く、ごうごうと。

「！ あれってまさか、死ぬ気の炎か！？」

七花は確認を取るようにリボーンを振り返った。

それを受けたりボーンは、声を張り上げる。

「気を付ける、七花！ それは嵐属性の炎だ。嵐属性の炎の特性は『分解』。死ぬ気の炎の中でもっとも攻撃力がある！」

「まじかよ……」

七花は顔をしかめた。

「忍法『火喰い鳥』に嵐属性の炎……この合わせ技は全てを分解し、燃やし、焼滅しょうめつさせる！ 虚刀流。思い上がったあんたを、あたしの業火で焼死させてやる！！」

頭を打った影響か、完全に何かが外れたらしい。炎を全身にまとう朱雀の目は、すでに正気では無かった。

「俺は別に思い上がってねーよ……」

七花はそれに恐れるどころかむしろあきれたようで、しかしぐさま構えを取った。

「虚刀流 『杜若』」

足は平行に前後へと配置し、膝を落とし、腰を上げ、上半身は軽く前傾姿勢。両手もまた、平行に前後へと配置された。

今にも走り出しそうな、陸上選手が取るような構え。

江戸時代ぐらいの歴史に、まさかそんな構えがあるとは

「それじゃあ位置について 用意、どん！」

そんなふざけたことを言って、七花は走り出した。

ただ走り出したのではない。まっすぐ走らず、牽制を入れるかの



ように、朱雀の周りを縦横無尽に駆け巡る。

朱雀が炎の狙いを定めさせないためだろうが　しかし。

「ばっかじゃないの？　狙いが定められないならここら一帯燃やし尽くすだけよ！」

そう。キレた朱雀に、そんな作戦が通じるわけがない。むしろ逆効果だ。

しかし。

「そんなこと」

七花は、気付けば朱雀の至近距離にいた。

「俺も解ってるよ」

「っ、な、っ……！」

「俺は単に、あんたの炎が万が一リボン達の方に行かないように移動してただけだ。それから……あんたの気を散らすためにな」

七花は冷静にそう解説する。朱雀の炎が服や髪を僅かに焦がすが、そんな些事は気にしない。

「っ、やめ……！」

「虚刀流一の奥義　『鏡花水月』！」

放たれたのは、一本の掌底。

下半身は根が生えたが如くがっちり構え、引きちぎれんばかりの腰の捻りを利用しての攻撃。

奥義と言うには単純な技だが　それはかすむほど速い攻撃だった。

それが朱雀の胸の真ん中に、炸裂する。

「がはあっ！」

誰もが予想した通り、朱雀は後ろに吹っ飛ばされた。そのまま無様に、地面に倒れ伏す。

「ふ、ぐうっ……」

どうやら気絶はしていないようだ。しかし　胸骨でも折ってしまったのか、仰向きのまま起き上がるうとはしない。

「冷静ささえ失わなきゃもっと苦戦してたかもな。だけど、どっち

にしるあんたの負けで終わってたろうぜ」

七花はそう言って、匣兵器を匣に戻した。

ぼろぼろの朱雀と違い、彼は怪我らしい怪我を負っていない。終始、彼女を圧倒していた。

「虚刀流のぼうや……随分と腕を上げたじゃないか」

迷彩は笑った。頬に、冷や汗をかいたりしているけれど。

「全く、あたしなんかじゃ相手にならないよ」

「……」

リボーンは迷彩には答えず、七花に声をかけようとした。が、それは途切れる。途切れさせられる。

「どうやら、少々遅かったようだな」

朱雀の傍に、突然下り立った男によって。

若い風貌の男だった。すらりとした長身で、伸ばした黒髪を真っ直ぐに下ろしている。無表情だが、眼光だけがやけに鋭い。

袖の無いしのび装束。全身に鎖を巻いる。

「真庭忍軍十二頭領が一人　真庭鳳凰」

男はそう名乗った。

腰に、黒い刀を携えて。

## 第十七録 二人のトップ

現れた男は真庭鳳凰と名乗った。

その立ち振舞いは朱雀は勿論青龍とも、同じ十二頭領の蝙蝠とも違う。

なるほど、こいつが実質上のボスか。

リボーンはそう見積もり、七花の横に移動した。

「おめーの話は七花から聞いているぞ、真庭鳳凰」

「アルコバレーノのリボーンか。おぬしの話も、よく耳にするよ」

鳳凰はいやに落ち着いた、足元にやられた味方がいるとは思えないほど落ち着いた口調でリボーンの言葉に応じた。

「ほ、鳳凰……あんた、何で……」

朱雀が苦しげな声を上げた。顔は歪んでいるが、負けたせいでは正気を取り戻しているようである。

「おぬしを回収しに来たのだ。本来は切り捨てたいところだが、おぬしの力がこれから必要になるのも事実。ゆえに我が来たのだ」

鳳凰は膝を着き、朱雀を抱き上げた。そのまま、リボーン達に背を向ける。

「待て」

と。リボーンはガチャリとわざと音を立てて鳳凰の背に銃口を向けた。その音に気付いたのだろう、鳳凰も足を止める。

「みすみす敵の大將を逃すほど、俺は甘くねーぞ」

「大將などではないよ、我は」

「だが真庭忍軍をまとめているのは、十中八九おめーだろう。俺の目はごまかせねーぞ」

「まあ、まとめ役を買って出ているのは事実だがな」

鳳凰は顔だけをこちらに向けた。

「真庭忍軍には個性が強過ぎる者達が多いからな、誰も彼も例外無くどこか壊れている。その中で、比較的常識と社会性を兼ね備えた我が暫定的なかしらとなってるに過ぎぬよ」

鳳凰の口調はどこまでも静かだった。朱雀と随分違う。

比較的 か。

（やっかいな敵だ）

リボーンは銃を下ろさないまま、内心で舌打ちした。

正直な話、まともな人間ほど敵に回したくないものなのだ。

リボーンはこの後、どういう言葉を口にするべきが逡巡したのだが、しかし

ビュンビュンビュンビュンビュンッ

突然風を切る音が辺りに響いた。

更に遅れて、細長い何かがりボーンと七花の足元を打ち付ける。

しかも一つではない。

「これは……鞭か！」

リボーンはそれを回避しながら呻いた。

先端に刃がある幾つもの鞭が自分達に襲いかかる。いや、おそらくそれは、まとめて一つの鞭なのだろう。多分、一つの柄に幾つもの鞭が付いてるのだ。

敵の攻撃なのは解る。が、一体どこから。

「真庭、鳳凰……！」

「我は別に、一人で来たとは言っておらんぞ」

鳳凰は涼しい顔で言つてのけた。

忍者は卑怯卑劣が売り。

この程度の策略、序の口だろう。

「くそつ、待て！」

リボーンと七花は鞭を何とかかいくぐり、鳳凰に近付こうとした。

しかし鞭はまるで結界のごとく二人の進路を塞いでおり、とても近付くことはできない。無理に突破しようとすれば、たちまち吹き飛ばされてしまうだろう。

「では、またいずれ」

そうしてる間に、鳳凰はリボン達から顔をそらし、そして消えた。

おそらく跳んだのだろうが、予備動作も去っていく姿も見えず、まばたきをしてる間にいなくなってしまった。

鞭の攻撃も、いつの間にか止んでいる。持ち主を探そうと辺りを見渡すも、すでに去った後なのだろう、影すら見えなかった。

リボンは舌打ちをしつつ、七花を見上げた。

七花は何かを考えているようだった。逃げられたことは別の何かを。

「……どうした？」

「えっ」

七花はリボンの声に一瞬目をまたいた後、首を振った。

「いや、別に。ただ、鳳凰が持ってた刀が……」

「あの黒刀のことか？」

リボンは鳳凰が帯びていた刀を思い出す。

鍔が無い、柄も鞘も真っ黒な刀。さっきは気付かなかったが、今思うと何やら禍々しいものがにじみ出ているように思えた。

禍々しく、そして毒々しいものが。

「まさか……あれが？」

「ああ」

七花は顔をしかめた。まるで思い出したくないことを思い出しているような表情だった。

「あれが完成形変体刀が一本、毒刀『鍔』だ」

「結局手がかり無しか」

否定姫は茶屋にて、ジョットから鎧海賊団から聞き出した話を聞き、ため息をついた。

「昨日の……真六弔花？　の話を信じるしかないのかしら」

「まあ、もともと立てていた予測だがな」

ジョットは否定姫の隣に座りながら茶をすすった。

どちらも日本人には無い容姿。しかもジョットにいたっては洋装のため、この上無く目立つ。

しかし二人はそんなことどこ吹く風で、濁音港の茶屋で団子を食していた。

「こうなつてくるとここに長居は無用よね。かと言ってどこに行くかっていうと、悩んじゃうわよねえ」

「しかし、他の変体刀の元所有者がいた三途神社や将棋村、百刑場とやらに行ってもこのこと同じことになるだろうし、どうしたものかな」

二人は真剣な口調で言うが、表情と団子を頬張る姿はそんな真剣さはみじんも感じられない。

もし二人の腹心がこれを見たら顔を苦くしそうな（片方は仮面を付けてるが）作戦会議だった。

「ふうん。あんなことがあったのに逃げなかったんだ」

さりげなく、不自然なほど自然に声をかけられ、二人は一瞬きよとんとした。

この港町に知り合いなどいない。いるとしたら

「……！？」

ジョットは声の方を向き、目を見開いた。遅れてそちらを見た否定姫は、逆に眉をひそめる。

そこにいたのは、白い髪 of 青年だった。

ぼさぼさの、七花よりぼさぼさの総髪。背はすらりと高く、口元には笑みを浮かべている。着ているのは薄紫色の着物だが、おそらく日本人ではないだろう。似合ってはいるが、違和感がぬぐえない。人のことは言えないが。

否定姫は内心で苦笑しつつ、「誰？」と首を傾げた。

「ジョットの知り合い？」

「いや」

すぐ首を振ったジョットだが、青年を睨み付ける目は鋭い。この目は、明らかに知っている。

しかし。

「やあやあ初めまして、ボンゴレ一世。フリーモそれに否定姫ちゃん」

青年の言葉は、その予想とは真逆のものだった。

「僕は白蘭って言うんだ。よろしくね」

「ああ、思い出したよ」

ジョットはわざとらしくそう言って、立ち上がった。

「X世と戦ったマールデーチモの小僧じゃないか。……いや、正確に言うと俺の知るマールの小僧ではないか」

「ふふつ。さっすが超直感を持つてるだけあるね　気付くのが早い早い」

青年　白蘭は笑みを深めた。

「君の話を訊く限り、やっぱり別のパラレルワールドの僕は綱吉君にやられちゃったみたいだね。この時代に逃げ込んだ僕の判断は正しかったようだ」

「となると、真六甲花も全員健在か。ふん、やっかいなことだ」

「ちょ、ちよつとちよつとちよつと！」

否定姫は二人の会話に慌てて割って入った。

「さっきから何の話をしてるの？　ぼんこれとかばられるわーるとか、わけ解ないわよ！」

「あ……すまん。そうだったな」

ジョットは申しわけ無さそうに眉尻を下げると、説明をしてくれ

た。

「ボンゴレというのは俺が作った組織の名前だ。パラレルワールドとは別の言い方をすると並行世界と言う。その名の通り並んで存在する世界のことだ」

「……どうということ？」

「俺達が今存在するこの世界。ここ以外にも世界が存在することだ。例えばおまえと俺が出会わなかった世界。例えば鑢七花がいなくならなかった世界。要約すると、もしもの数だけ別の経過、結果を得た世界があるということだ」

「そんなこと……！」

「否定したいか？　だが事実だ」

ジョットはあっさりそう言い切り、白蘭に向き直った。

「それで？　俺の知らないどこかのおまえは俺達に何の用だ？　いや、おまえの部下から聞くに、用があるのは否定姫か」

「まあねー。でも、さすがの僕でもここで暴れるのは気が引けるなあ」

白蘭は先程から自分達のことをちらちら見ている通行人を流し見た。

「一般人が傷付くのは別にかまわないし、その気になれば辺り一帯焼き払っちゃってもいいけど、そんなことは君が許さないよね」

「当たり前だ」

「だから場所を移そうよ」

白蘭は軽く両手を広げた。その指に、否定姫は一つの指環がはまっていることに気が付く。

しずく型の石に広げた翼が着いた、綺麗な銀色の指環だ。おそらくあれも、例の死ぬ気の炎を出す指環なのだろう。

「場所を変えて、一体俺達に何の得があるんだ？」

ジョットの言葉に、白蘭は更に笑みを深める。

笑えば笑うほどに彼が、彼こそが一般人のように思えてならない。人の上に立つ者の威厳を感じられない。



（まあ、そつちも人のこと言えないんだけどねえ）

否定姫は先程から何やら複雑な気分になる思いだった。

そんなことを考えていると、白蘭はジョットに向けて言葉を紡いだ。

「一般人に迷惑がかからない」

「……」

「僕は知ってるんだよ。ボンゴレファミリーの成り立ちをさ」

特に声をひそめることもなく、白蘭は話を続ける。一般人が話を聞いていても気にしないらしい。

「元々は自警団だったんでしょ？ 住んでいる街のみんなを守るためのね。しかもまだ十代の半ばの頃だ。いやー、尊敬しちゃうなあ。かつこいー」

「……さっきの言葉は」

ジョットは白蘭の戯言に取り合わず、低い声で言った。

「来なければ、この町の人間を殺すと言う意味の脅しか？」

「……やだなあジョット君。僕はいつでも本気だよ」

「……」

痛い沈黙が流れた。

ジョットも白蘭も否定姫も、何が何だか解ってない通行人達でさえ身じろぎすらできない。

「……はあ」

やがてジョットは、疲れたようなため息をついた。

「解った。おまえに付いていこう。否定姫も連れていくが、いいな」

「もっちゃん むしろその方が、僕らとしても助かるよ」

白蘭はそう言って、ジョットと否定姫に背を向けた。

進み出すと、前方にいた通行人がざざつと道を空ける。動きからして、ほぼ反射的な動きだろう。

「……ジョット」

「すまないな。勝手に決めて」

「いいえ。一人でいるより、貴方といった方がよっぽど安全なもの。」

問題は」

「ああ。奴が何を企んでいるかだ」

ジョットは白蘭の後を付いていく。無論否定姫もだ。

彼が自分を必要としている理由。それは一体何なのか。

（幕府の人間じゃなさそうだし、追手じゃあ無いわよね）

あと考えられるとしたら自分の祖先、四季崎記紀のことだ。しかし、それが白蘭に何の関係がある？

（……まあいいわ）

否定姫は深々と考える自分を『否定』した。

（解らないことをいくら考えても結局解らないもの。なら、白蘭とかいうあの男に付いていくのも面白くなくもないでしょう）

否定姫はいつも通り否定ずくしの思考でそう結論付け、にんまりと笑った。

## 第十七録 二人のトップ（後書き）

久しぶりの更新な気がします；；

ついに白蘭登場！ 一気に真六弔花も登場させようかどうか迷っています。しかし彼の口調難しい。

では、また次回！

## 第十八録 イタリアにて

真庭青龍は怒っていた。

それは隣にいる鳳凰にも感じられるほどであり、思わず顔をしかめる。

目の前にいるのは真庭朱雀だ。頭には包帯を巻いており、立っているのが苦しいのか青い顔をしている。

当たり前だ。虚刀流によって骨に幾つものひびを入れられたのだ。本当なら床に着かなければいけない。

なのになぜ、朱雀はここにいいのか。

単純な話だ。彼女は身勝手な行動をし、そのせいで青龍に呼び出されたのである。

今自分達がいるのは、現在真庭忍軍が拠点に使っている場所のある一室だ。

普段は会議などに使われている部屋である。今は鳳凰、青龍、朱雀の三人しかないが。

「……おまえは」

青龍の低い声に、朱雀の身体がびくりと震えた。こちらにも震えが伝わってきそうである。

「俺達をまた全滅させるつもりか？ また……真庭忍軍を潰す気が？」

「……」

「一回死んでもおまえの馬鹿さ加減は治んねえな。俺達裏組が大乱の際に全滅したのは、おまえの馬鹿な行動が原因なんだぞ」

青龍は声を荒げたりしない。ただ静かに、朱雀を責め続ける。

生まれ変わっても相変わらずだ、と鳳凰は思った。

彼女はどんな状況でも冷静なしのびだった。

慌てたりせず、感情をあらわにすることもない。感情を抑えなければならぬしのびの鏡のような存在だった。

鳳凰は知っている。二十年以上前から、自分が『真庭鳳凰』になる前からそれをよく知ってる。

「あそこに千刀と双刀があるって情報聞き付けてあんな行動したんだろうが、一体どうやって運んでくるつもりだったんだ？」

「それは……」

「最も数多い刀と最も重い刀。双刀は忍法足輕を使えないおまえじや運べるわけないし、千刀は運べて五、六本が限度だろう。どうするつもりだったんだ？」

「……」

「おまけに虚刀流にそんな風にやられて……何がしたかったんだ？」

「……」

朱雀は床を見つめていた。身体は先程よりも震えている。

朱雀は完全に怯えていた。怒られていることに対するものではない。これは 青龍自体に対する怯えだ。

真庭青龍。通称『氷の青龍』。

彼女は二十年前の大乱以前から、真庭忍軍で最も恐れられていたしのびだった。

表に出ることはない。裏の世界で知られることはない。忍法も攻撃的なものではない。なのになぜか。

それは、彼女の人格ゆえのものだった。

冷淡なのだ。冷淡過ぎるぐらい冷淡で、敵であろうと味方だろうと平等に冷たく見ていた。

普段その冷たさが表に出ることは無いが。

「……まあいい。おまえの処分は先送りしておく。だが先に言うて置くがな、俺はおまえの失敗を見逃したわけじゃない。いざという時は、おまえを盾として使う」

青龍はそう言い切り、すたすたと一人部屋を出ていく。

鳳凰は逡巡した後、朱雀に向き直った。

「早く医務室に戻った方がいい。これ以上は身体に障る」

「え、あ、ああ……」

朱雀が頷くのを見て、鳳凰もまた部屋を出ていった。

「青龍」

前を進んでいた青龍に追いついた鳳凰は、彼女にそつと声をかけた。

青龍は立ち止まり、振り返る。

「まさかあそこまで言うこと無いだろうとか、そんなこと言っんじゃないだろうな」

「いや」

鳳凰は首を振った。

「これからのことだ」

「……ああ、そうだな。おまえの意見はどうだ？」

「変わらず静観　と言いたところだが、さすがに無理であろうな。となると、何かしらのことを起こさねばなるまい」

「だな。しかしどうするか……」

青龍は顎に手をやり、うつむいた。

「……いっそ、ボンゴレを誘き出すか？」

鳳凰の言葉に、青龍は目を丸くした。驚いたようである。

「どうやって？」

「狂犬は未だ、クローム髑髏の身体を乗っ取っているだろう？」

使い勝手がいいということで、狂犬は今のところ身体を変える気は無いらしい。あの霧の幻覚は真庭忍軍にとっても有益なため、そのままにしてある。

「それに霧のリングと雷のリングは、こちらの手の内だ」

「……！……なるほど？」

青龍はすうっと微笑した。

「ふん、いいな。奴らにも、ボンゴレ自体にも影響を及ぼすだろうよ。問題はあつちか」

「海亀殿を疑うわけでは無いが……本当なのだろうか？」

「事実だぜ。全くややこしい奴と手を組みやがって……」

青龍はため息をつき、腕を組んだ。

「海亀には悪いが、ちよつと接触してもらうか。まだイタリアにいるはずだし……」

「誰に接触させるつもりだ？ まあ人鳥もいるし、大事無いとは思うが」

鳳凰は魚組の二人を思い出しながら言う。ちなみに同じ魚組である喰鯨は、鳳凰自身から謹慎を喰らっていた。

「仕入れた情報が本当なら、幹部が二人、任務についてるはずだ」  
「誰だ？」

訊くと、青龍は笑みを深めた。

「例のボスに、かなり近しい奴らだ」

スperlビ・スクアーロはため息をついた。

「ったく。あの程度の連中を殺るのに、何で俺達が動かなきゃなんねーんだ」

「そう言うなよ、スクアーロ」

隣でふよふよと浮かんでいる赤ん坊　　マーモンがそうたしなめる。

「ヴァリアーは今、人手不足だからね。僕達が動かなきゃならなくなっちゃうのは無理無いさ。それに、これで金が入るんだから文句を言つとバチが当たるよ」

「けっ……まあいい。帰ったら、あいつの虚刀流とやらを改めて見せてもらうかあ。その前に、本人を見付けなきゃならねーが」

スクアーロの脳裏に、新たに仲間となった女の姿が浮かぶ。

一目見て、敵わないと悟った。そう思ったのは、ザンザス以来初めてである。

敵にするのは全力でお断りだが、仲間としてはあれほど頼もしい奴はいまい。

剣士の本能で、スクアーロはそう悟っていた。

それに女の使う虚刀流の技は、スクアーロにとってかなり魅力的なものだ。もっとも、当主は彼女の弟らしいが。

問題は彼女の体力の無さであり、そのせいで全ての技を見れたわけではない。

しかし、どういうわけか女の方がスクアーロを気に入ったようで、積極的に虚刀流の技を見せてくれる。

刀を使わない無刀の殺人剣。

聞いた当初はふざけてるのかと思ったが、それを使ってレヴィをあしらったのを見た時、大いに納得したのは記憶に新しい。

スクアーロはつい数日前のことをそう回想し、ふと顔を上げる。

そこで、一瞬奇妙な影を見た気がした。

路地裏に続く建物の陰。そこに、誰かいたような？

「どうしたんだい、スクアーロ？」

「……いや」

首を振りかけたスクアーロだったが、どうも気になる。

「マーモン、少しこの辺りを見てくる」

「粘写は必要かい？」

「金取る気まんまんだろお……」

スクアーロはあきれ顔になりながら、早足でその建物に近付いた。人影の見たはずの場所を曲がり、道の先に目をやる

「！　っ、とおっ」

が、いきなり何かが自分に向かってきたため、後ろに下がるはめになった。

その何かとは剣先であり、その持ち主は奇妙な格好の男だった。

「……？　誰だ、おまえ」



スクアーロは首を傾げた。

その男は、袖の無い着物のようなものを着ていた。しかも全身に鎖を巻いている。確かあの着物は、しのびとか呼ばれる者達の服ではなかったろうか。男は若いように見えるが、だからこそ年齢不詳だった。

その上扱っているのは西洋の剣であるレイピアだ。随分とちぐはぐである。

スクアーロの疑問に、男はにい、と笑った。

「わしのことを訊いたか？ この最高格好よくて最高いかした最高強い最高もてもて最高金持ちのわしのことを？」

「……」

スクアーロは急にこの男を斬り伏せてアジトに戻りたい衝動にかけられたが、そうはいかないのでぐつとこらえる。

「……俺らのことを見てたよなあ？ ただ見るだけじゃねえ、殺気を込めてだ。恨まれる覚えは幾らでもあるが、ためーの顔は知らねーぞお」

「まあ知らんじやろうな。わしとおぬしは初対面だ」

男はスクアーロの横に視線を向けた。スクアーロが注意をそらさずに目を横に向けると、マーモンがこちらに移動してくる。

「スクアーロ、彼は誰だい？」

「知らねえ。……敵だろうがな」

「安心せい。わしはおぬしらとは戦う気は無い。今は、な」

「……」

「そう睨むな、スペルビ・スクアーロよ。それに……マーモンだったか？ バイパーとも呼ばれていたかな」

「その名で呼ぶな」

マーモンは顔のパーツで唯一見える口をへの字にした。この赤ん坊は、本名を呼ばれることを極端に嫌っているのである。

「まあわしがおぬしらの名を知っておぬしらはわしの名を知らんというのもいささか不公平じゃからな、最初の質問に答えてやろう。」

えーっと？ わしが何者かじゃったか」

さつきから、本当にちぐはぐである。先程からかわしているのは日本語なのだが、それはどう考えても老人のようで、見た目と全く違う。

二重の意味で何者なんだろうか。

そんなスクアーロの思考を無視して（この男が自分の考えを知るよしも無いが）男は名乗った。

堂々と、その格好とは裏腹に堂々と名乗り上げた。

「真庭忍軍十二頭領が一人 真庭海亀だ」

「真庭忍軍……？」

あいにく、スクアーロには聞き覚えが無かった。それはマーモンも同じのようで、首をひねっている。

全くの無名、しかしこの高らかな名乗り方。

ちぐはぐ過ぎる。何なんだ、この男は。

「一体……てめーは……」

「ふむ、わしがいかに最高格好よくて最高いかした最高強い最高もてもて最高金持ちかを語ってやつてもよいが、時間が無い。まあなんだ。真庭忍軍に関しては日本の沢田綱吉に訊け」

「何……」

なぜここで、日本にいるあの少年の名前が出てくるのだろうか。いや、日本という単語自体は別に不思議ではない。彼らの素性を考えれば、それは普通だ。

しかし沢田綱吉の名が出てくるのは、普通ではない。彼はボンゴレのことを除けば、こちらの世界に関わることは無いのに。

スクアーロが思考を巡らしていると、海亀は「おっと」と、こちらの注目を自分に向けてるように声を上げた。

「これ以上長話するわけにはいかな。わしは多忙なのだ。わしとまた会いたい時は、日本に来るがいい」

ではな、と立ち去ろうとする海亀を、スクアーロとマーモンは追いかけようとした。

ガシヤ  
アアア  
アアア  
アアア  
アアア  
アアア  
アアア  
アアア  
アンツ

落ちてきたのは近くのビルからだ。工事をしているようなので鉄材があるのは当たり前だが、しかしタイミングがよ過ぎる。

スクアーロはビルを睨み上げた。中に入ろうかと思ったが、おそろくもういないだろう。痕跡も残っていないに違い無い。

「う お おお い……」

「何だっ  
てんだ……俺は知らねえぞお、真庭忍軍なんてもんは」

マーモンもまた、ため息をついて自身の顎に手をやった。

「そのことについては私も知りませんが」

先程のこともあってスクアーロとマーモンは身を固めるが、振り返って視界に収めた姿に、息をついた。

「どうやら驚かせてしまったようですね」

作り物のようない、壊れ物のようない美貌の女だつた。この夜闇に置いては、生き霊と間違えられそんな顔色の女。

「どこ行つてたんだい？ 一時間前にいなくなつて、それっきりだったし、無線も壊れて通じなかつたし」

「重ねてすみません。道に迷つてしまいました」

「……」

そういえば方向音痴だと聞いていた。今度から目を離さないようにしようとしてスクアーロは決心した。

気を取り直して質問する。

「それで、そのことについて知らないがと言っていたが、もしかして奴のことは知ってるのか？ 七実」

「ええ。彼個人については知りませんが、真庭忍軍のことなら、多少」

女 七実は頷いた。

ちなみに現在彼女が着ているのは、ザンザスに連れられて来た時の着物ではなく、ヴァリアーの隊服である黒衣だ。

「ですが……どうして彼らがいるのでしょうか」

「どういう奴らなんだい？」

マーモンが尋ねると、七実は真庭忍軍について話し始めた。

同じ話をボスであるザンザスの耳に入れた結果、翌日にヴァリアーは日本へ足を向けることとなつたのである。

ヴァリアー幹部となつた鑓七実が弟と再会する日は、そう遠くない。

## 第十八録 イタリアにて（後書き）

一ヶ月近くほったらかしにしてました……；；やっとの投稿です。七実、いつの間にかヴァリアー幹部に収まってきました。スクアーロのことを気に入っているのは、純粹に剣の道にはげんでるからです。

次回は未登場の変体刀の所有者を出す予定です。誰かはお楽しみに！

否定姫とジョットサイドはまだまだ先かな……  
では！

## 第十九録 王刀

ようやく退院できたツナだったが、しかし気を緩めることはできない。真庭忍軍との戦いは、まだ始まったばかりなのだ。

それに、ボンゴレリングと完成形変体刀が彼らの狙いとは解ったものの、まだ目的は判明していない。

更にリボーンは鳳凰との接触により、真庭忍軍は侮れないと判断したようである。

実際最初から彼らは完成形変体刀を二本蒐集しているようなものだし、ボンゴレリングは七つの内二つも奪われた。ボンゴレサイドにとって、最悪と言っても過言ではない。

勿論、こちらとて奪われるばかりでいるつもりはないが。

「間違い無い。これは誠刀『銓』だ」

七花の言葉に、ツナは安堵のため息をついた。

ツナ宅の居間である。ツナと七花の他に山本と獄寺、それにディーノと迷彩もその場で誠刀を見ていた。

ちなみに迷彩は、こなゆきと共にキャバッローネに世話になっている。迷彩が今着ているのも、女性用の黒いスーツだ。もつとも、下はスカートではなくズボンだが。

「へえ、本当に刃が無いんだね」

迷彩の言葉に、七花は「まあな」と顎を引いた。

「にしても驚きだぜ。あの彼我木もこっちに来てるとはな。しかも綱吉に誠刀渡しちまうし」

「本人は、押し付けるみたいなこと言っていましたけど」

ツナは七花から誠刀を返してもらい、膝の上に置いた。

「これで俺達は千刀『？』、双刀『鎚』も含めて三本変体刀手に入れたことになるのか……」

獄寺は呟き、迷彩に目を向けた。

「そっつい千刀は今、どうなってるんだ？」

「ああ。ぼつくす？　だっけ。その技術を応用して持ち運びが可能になるよう、技術屋さんが動いているようだよ」

「すげーよな、未来の技術って奴は。あの量の刀をこんな箱に入れちまうんだろ？」

七花は自身の匣を軽く揺らした。

「さすがに複数必要らしいけど、しかしあの数を持ち運びできるってのは凄えよ」

「好きな時に千刀巡りが発動可能ってわけだ」

迷彩は明朗な笑い声を上げた。かなりおおらかな性格らしい。

ツナにとつて、迷彩は好印象だった。

「さて……問題は他の変体刀の所有者だな」

ディーノの言葉に、全員表情を引き締めた。

「今のところ、見付かってない所有者は……六人か」

ディーノは呟く。実はその内一人はとんでもない組織の幹部になつてしまつてゐるのだが、それを知る者はこの場にはいない。

「なあ七花。他の所有者の名前と、所有者してる刀のことを教えてくれないか」

「とりあえず先に訂正しとくぜ、跳ね馬。残ってるのは五人だ」

七花は当たり前のように言つた。

驚く一同に、七花は説明する。

「実は変体刀の一本、微刀『釵』は所有者がいなくてさ。だから、残ってる所有者は五人なんだ」

「そっついや自立した刀だったな……」

リボーンが七花の肩の上で言つた。

「じゃ、残りの変体刀の所有者の名前は？」





「どうした？」

「人が倒れてる」

「はあ？」

目を丸くする一同に、ロマーリオは普段の調子で説明する。

「この家の前に女がふらつと現れてな、何だと思ってる内になぜか倒れちまった」

「何だそりゃ!？」

デイーノはいぶかしげな顔で片眉を上げた。

「おい、その女ってのはどんな奴なんだ？」

リボーンの質問に、ロマーリオは「えーっと」と一瞬眉根にしわを寄せる。

「長い黒髪の女です。黒い胴着を着ていて、木刀を持ってる……」  
「えっ……」

七花が驚いたように立ち上がった。

「? どうしました、七花さん」

ツナは首を傾げた。七花はそれに答えず、ロマーリオに尋ねる。

「なあ、そいつ名乗ってなかったか？」

「いや、別に……」

「そっか……」

七花はそう言い、部屋の外へ足を向けた。

「七花さん？」

「多分そいつ、所有者だよ」

七花は顔だけをこちらに向け、肩をすくめた。

「王刀『鋸』の所有者、汽口慚愧だと思う」

「お騒がせして、まことに申しわけありませんでした」

長い黒髪の女性 汽口慚愧が正座をして頭を下げた。

七花が寝泊まりしている沢田家光の部屋。そこにしかれたふとん

に、汽口は先程まで寝かされていた。

長い間放浪していたのか、黒い胴着はぼろぼろで、しかし背を伸ばして座る姿はどこか威圧を覚える。じっとこちらを見つめるその目もまっすぐだ。まっすぐ過ぎる。

「七花殿にご紹介あずかったようですが、改めて名乗らせていただきます。心王一鞘流十二代目当主、汽口慚愧と申します」

「は、はあ……」

ツナは汽口に対し、萎縮してしまう。

何というか、近寄りがたい印象を与える女性だ。ツナの周りにはこんな女性、いなかった。

「相変わらず真面目だな」

七花はおかしそうに笑った。それに対し、汽口もほんの少しだけ唇を緩める。

「七花殿も相変わらずですね。お元気そうで何よりです」

「あ、あの……それで汽口、さん」

ツナはおどおどしながら、汽口の横に置かれた木刀を見やった。

それほど長くはない。そもそも刃が無いので鞘も無い。どこからどう見ても、ただの木刀だった。

「それ……は、王刀『鋸』で間違いありませんか？」

「はい」

きっぱり肯定されてしまった。

「一時は天下国家のために手離しましたが、しかし一時とはいえこれをもって剣の修行にいそしんでいたのです。間違えるわけがありません」

「は、はあ……」

しかも真面目に返された。

どうしよう、この人とまともに話ができる自信が無い。

「？ 綱吉、どうした？」

七花はツナの様子がおかしいことに気付いたらしく、こちらを見下ろしてきた。それに対しツナは乾いた笑いしか出てこない。

「それにしても……とんでもないことになってしまいましたね」

先程のツナ達の説明を思い出したのか、汽口は顔をしかめた。

「それで、あんたもやっぱり青い彼岸花に触れたらここにいたのか？」

七花のその質問は、昨日凍空こなゆきにもした質問だ。そして汽口はそれに首肯する。

「珍しいと思っていましたが……まさか忍法によって作られていたとは思いませんでした。死者を生き返らせ、生者を別の世界に送る……とんでもない忍法があったものですね」

「俺はまだ、死者を生き返らせるってここには懐疑的だけだな」

リボーンがなぜか不愉快そうな声を上げた。

「少なくとも使用の際、何かしらの危険性が伴うだろう。それが何かは解らねーがな」

リボーンの言葉に、その場にいた全員が黙り込む。

もし彼の読みが当たりだとして、真庭青龍はどんなリスクをしょうい込んでいるんだろうか。

そこまでして、どうして生き返らせるんだろうか。

「……考えても解んねえこと考えたってどうしようもねえんじゃないか？」

七花がそう言い出した。

「そんなに気になるんなら直接本人に聞けばいい。今は目の前のことだろう。さしあたっては真庭忍軍のことだ」

七花の正し過ぎる言葉に、全員があ然した。

それは皆が理解していたことだ。理解していたが、先送りにしてたこともある。

まさか七花がそのことを言うとは、誰も思わなかった。

「そ、そうですね。でも、どうするんですか？」

ツナは肯定しつつも首を傾げた。

「まだ敵のアジトも何も解ってないんですよ」

「こっちには変体刀が四本、それにボンゴレリングが五つ残ってる

「んだろ。だったらそれを狙って、奴らはまた襲ってくるはずだ」  
「でも……」

ツナはうつむき、ぎゅっ、と拳を握った。  
「クロームのこともある、し……」

真庭狂犬に身体を乗っ取られたクローム。彼女が今どうなっているか、正直想像がつかない。

もし、もしかしたら

「そのことだがな、ツナ」

と。リボーンが声を上げた。

「真庭忍軍のアジトなら、何とか解りそうだぞ」

「え……」

「真庭青龍 本名は伊瀬遊莉だったな。そっちから、何らかの手  
がかりが得られそうなんだ」

「ほ、本当!？」

ツナは身を乗り出した。

「ああ。ただもう少し時間がかかる。あと二、三日待ってくれ」  
「う、うん!」

ツナは表情を明るくして頷いた。

「さて、残った問題は汽口だな」

リボーンは汽口の方を見た。

「今回はうちでもいいか」

「え」

ツナは一転、顔をひきつらせた。

ツナはすでに汽口を「近寄りたくない人ランキング」に入れているのだが。ちなみに一位はダントツで雲雀である。

しかし。

「いいな、それ。汽口もそれでいいか？」

「はい。お世話になります」

七花の言葉に、汽口も頷く。

……どうやら反対意見は自分だけのようだった。

夜の路地裏。左右田右衛門左衛門は一人でいた。

この世界の情報や真庭忍軍のことを独自に調べて回っているのだが、この世界のことはともかく、真庭忍軍に関しては全く情報が得られていない。

「……真庭青龍、か」

右衛門左衛門は小さく、自分を生き返らせたであろう人物の名前を呟いた。

彼女とは一度だけあったことがある。自分が左右田右衛門左衛門と名乗る前のことだ。

あの時、自分は見逃された。旧友のおかげで。

もし旧友がいなかったら、自分は殺されていたかもしれない。勿論ただでは殺されるつもりは無いが。

「……はあ」

右衛門左衛門はため息をついて、路地裏の奥へと足を向けようとした。

「よお」

が、突然呼び止められ、勢いよく振り返る。その際に、懐の炎刀『銃』を抜いた。

少し離れた場所にいたのは、金髪の青年だった。

鳶色の瞳をした、人目を惹く容姿の男だ。後ろには、数人の黒衣の男がいる。

「誰だ、貴様は」

「キャバッローネファミリーのボス、跳ね馬ディーノだ。つっても、あんたは知らねーだろうがな。左右田右衛門左衛門さんよ」

青年　ディーノの言葉に、右衛門左衛門は仮面の下にある瞳を

鋭くした。

「なぜ私の名を知っている？」

「言つとくけど俺は敵じゃねーぜ」

「不信。<sup>しんじず</sup>いきなり現れたやからの言葉を信じるほど、私は人を信用していない」

「おいおいマジだつて。沢田綱吉、知ってるだろ？俺はあいつの兄弟子だよ」

「兄弟子……？」

「今回はちよつとした頼みごとさ。あんた、俺と一時手を組まねーか？」

ディーノの言葉に、右衛門左衛門は首を傾げる。炎刀はまだ、ディーノに向けられたままだ。

「俺達は近いうち、真庭忍軍のアジトを襲撃するつもりだ。俺達つてのは、ツナ達や鑢七花も含まれている」

「虚刀流も……」

「その際に、あんたの力も必要になってくる。頼む」

ディーノはじつとこちらを見つめてきた。

その目は真剣そのもので、好ましいくらいだ。

右衛門左衛門は考える。できることなら真庭青龍にもう一度会つべきだろうと思つたし、それに真庭忍軍には

真庭忍軍、には。

「……解つた」

右衛門左衛門は頷いた。

「貴様に協力しよう、跳ね馬ディーノ」

「！ああ、よろしく頼むぜ」

ディーノは明るい笑みを見せた。

こうしてディーノと右衛門左衛門は手を組むことになる。

のだが。

「困るなあ」

突然、上空から声と共に二つの影が落ちてきた。

二つの影は軽やかに着地し、右衛門左衛門とディーノの前に姿を現す。

「ボンゴレと虚刀流が来るのはいいんだよ。だが、あんたらが来るのは台本には無い」

影の一つがそう言った。片割れは、黙ったままだが。

そでの無いしのび装束、全身に巻いた鎖。

二人して、そんな奇妙な服を着ていた。

「真庭忍軍裏組     真庭白虎」

「真庭忍軍裏組     真庭玄武」

二つの影は、静かにそう名乗った。

## 第十九録 王刀（後書き）

汽口慚愧初登場、左右田右衛門左衛門再登場の回でした。右衛門左衛門ちよつとしか出てないけど……

さて、最後に出てきた裏組二人でとりあえずおりまにを全員出したことになります。容姿描写は次回に持ち越しですが。

ジョット&否定姫ターンはまだ先になりそうです…… ; ; ;  
では！！



## 第二十録 真庭玄武

「青龍、白虎と玄武はどこ行つたの？」

真庭忍軍のアジトにて、青龍は狂犬にそう呼び止められた。

「ここにはいねえよ。跳ね馬と左右田右衛門左衛門を殺しに向かわせてる」

「てつきり大きな動きはしなかったんだけどねえ」

狂犬は肩をすくめた。

その姿は その身体は、クローム髑髏のままだ。

狂犬がその身体を気に入っているのもあるし、人質の意味合いもある。

しかし何より、霧の守護者を封じるとするのが大きいだろう。

狂犬がクロームの身体を乗っ取っている間は、本当の霧の守護者である六道骸は彼女に憑依できない。

勿論結界を張ってクロームを隔離するというのも考えられるがそれだと外部からの干渉でどうとでもできる。

狂犬がクロームの身体を乗っ取っていれば、虚刀流を避け続ければクロームを半永久的に利用できるのだから。

そんなこと重々承知の狂犬の言葉に、青龍は「ボンゴレ側にはな」と返した。

「不安要素は摘み取っておくべきだろ。もっともこれは俺個人の指示だし、もしもの時は引くよう言つてある。それに暗殺が失敗しても、襲撃したという事実があればいい」

「……どうということ？」

「兄弟子を襲えば、ボンゴレ十代目は俺達を倒そうと更に息巻くだろう。そして早くここに来る」

「……なるほどね」

狂犬は納得したように頷いた。

「なるほどなるほど。そうね、早ければ早いほどいいからねえ。ボンゴレ十代目　否、大空のボンゴレリングがここに来るのは」

「首尾は順調。後はあいつらが無事に帰ってくるのと、鳳凰に気付かれないことを祈るばかりだ」

「あら」

狂犬は眼帯に隠れていない左目を瞬いた。

「何？　鳳凰に話してないわけ、青龍ちゃん」

「話したら全力で止めんだろうよ。たとえ俺の判断が正しかろうとな」

今度は青龍が肩をすくめる番だった。

「あいつはああ見えて、仲間想いのぬるい奴だぜ。ぬるいつつか生ぬるいか。そこは昔っから変わりやしねえ」

まるで。

真庭鳳凰のことを　『神の鳳凰』とさえ呼ばれる男のことを昔から知っているような口振りだった。

実際知ってるのだ。彼女は鳳凰が鳳凰と呼ばれる前から、鳳凰が鳳凰と名乗る前から知っている。

いや、もっと正確に言うなら、鳳凰が鳳凰と呼ばれる前まで、鳳凰が鳳凰と名乗る前まで知っていると言うべきか。

「鳳凰と言えば狂犬。あんたに訊きたいことがあるんだかよ」

「何？」

「あいつに何があった？」

主語も何もかも抜けまくった質問だった。狂犬は首を傾げる。

「あいつって……鳳凰のことよね。でも、何があったって、何が？」

「俺の知るあいつと今のあいつは違い過ぎる」

青龍は苦々しげにそう言った。

感情を路傍に落としてしまったような彼女にしては、珍しく。

「昔のあいつはあんな性格じゃなかった。あんな無感動な奴じゃな

かった。いやそもそもあんな顔じゃ無かった」

「……」

「狂犬、あいつは今、誰の顔を張り付けてやがるんだ？ 誰の人格で、あいつの心は塗り固められてるんだ？」

「……気付いてんじゃないのかい？」

狂犬は静かに、青龍をなだめるように見返した。

十人分の感情を詰め込んだかのような彼女にしては、珍しく。

「気付いたからこそ、左右田右衛門左衛門とかいうふざけた名前の奴にも刺客を差し向けたんだろ？」

狂犬の問いに、青龍は答えない。ただ黙ったまま、狂犬を睨み付けている。

「……もう一つ聞きたい」

ややあつて、青龍は低い声で狂犬に問うた。

まるで知りたくないというように。

本当に 彼女にしては、珍しい。

「俺が死んだ後……あいつは何をした？」

突然の来襲に、しかし右衛門左衛門とディーノは慌てなかった。驚かなかったわけではないが、こういう状況には二人共慣れている。

片やマフィアのボス、片や元忍者 である。

「裏組と名乗ったか。あいつらのこと、何か知ってるか？」

ディーノの質問に、右衛門左衛門は首を横に振った。

「不知。<sup>しり</sup>私が会ったことがあるのは青龍だけだからな。彼女と会ったのも一度きりだ」

「そうか……ならあいつらとは、あんたも俺も初めましてってことになるんだな」

ディーノは懷から黒い鞭を取り出した。右衛門左衛門は炎刀を二

人　真庭白虎と真庭玄武に向ける。

「いい闘気だねえ。楽しめそうだ」

白虎はにい、と笑った。

小柄な体躯の男だった。見た目は十にも満たない少年のようだ。

それに反して、雰囲気はいやに老成している。短髪と思いきや、よく見れば首の後ろに尾のように束ねられた長い髪があった。

対し、隣の玄武は大柄な男だ。身長は百八十そこそこだろうだが、腕や脚、肩幅などは常人の倍はありそうなごつさだ。細身のディーノや右衛門左衛門など比べものにならない。

「しかし、まあ」

と。白虎は頭をかいた。

「若造二人相手に、俺じゃ少しばかり体力不足かな」

「？　若造って……おまえ俺達よりずっと年下だろ？」

ディーノが言くと、白虎は不快げに顔をしかめ、怒鳴った。

「誰が年下だって？　俺はこう見えて七十だ！」

「……え」

ディーノ、右衛門左衛門、そしてディーノの部下達の口から同じ一文字がもれた。

「あ、待てよ」

白虎は我に返ったように訂正する。

「二十年前の大乱で一回死んでるから……実質五十か」

どちらにせよ、ディーノと右衛門左衛門より年上だった。

「まあそういうわけだから、玄武、おまえの忍法で奴らの体力削れ」  
「……」

玄武は無言のまま前に出た。

「おいおい、一人でこの人数を相手にする気かよ」

ディーノの言葉に、玄武は答えない。

「忍法　『鋼拳』」  
「コウケン　『鋼拳』」

させたと言っても、はた目にはただ両の拳を振り上げてディノと右衛門左衛門との間合いを詰めただけにしか見えなかった。少なくとも二人にはそう見えたし、しかし一応それを避ける。

破壊音を上げて、コンクリートの地面がべこりとへこんだ。

玄武の拳が当たった二カ所が、蜘蛛の巣のようなヒビを入れて破壊されたのだ。

「…！」

ただの拳と思っていた攻撃が固い地面を破壊したのだ。確かに玄武の体格は筋肉質だ。しかしこんな破壊力を持っているようにも思えなかった。

もし避けなければたちまち肉塊にされたらう。二人はぞつとす

「来るな！」

キャバッローネファミリーの面々は一瞬ほうけたが、すぐさまボスの元に駆け寄ろうとした。しかし、ディーノはそれを止める。

静かに命令した後、ディーノはひきつった笑みを浮かべた。

「おい、右衛門左衛門さんよ。あんなのが忍法なのか？ 元忍者のあんたから見て、あれはどう思う？」

「わからず不解。一撃だけでは何とも言えないな。だが跳ね馬、忍法に理屈を求めるのはいささか無理がある」

「忍法はしのびにとって生命線だ。理解どころか視認もさせずに敵

を倒すか、視認させても理解はさせない。たいがいはそういう工夫がなされている」

「つまり……攻撃の理屈を考えてる暇があつたら応戦しろってことかよ」

デイーノはため息をついて鞭を構え直した。

「あんたの言う通りだな。確かにそうだ。それじゃ早々に決着をつけるとするか！」

デイーノは鞭を振るい、こちらに走り寄ろうとした玄武の腕を封じた。

「腕を封じたぜ。右衛門左衛門さん！」

「不言。<sup>いわず</sup>言われなくとも解っている」

右衛門左衛門は炎刀『銃』を玄武に向け、引金を引いた。

銃声が夜空に響き渡る。しかし銃弾は、玄武に当たらなかった。

玄武は鞭で動きが封じられているにも関わらず、何と跳躍したのだ。

当然デイーノの足も地面から離れかけ、それでも何とか踏みとどまる。三メートルほど移動したし、銃弾が目の前を通り過ぎはしたが。

「うお！？ あつぶねっ」

デイーノは横切った銃弾に冷や汗をかきつつ鞭を解いた。このままだと、危険なのは自分だ。

「何て力だよ……拘束をもものもしねえ……これが忍者って奴なのかよ」

「いや、普通の忍者は力任せな戦いはしないんだが……」

元忍者の右衛門左衛門の言葉に、デイーノは「そうなのか？」と首を傾げた。

「まあいいか」

「いいのか」

「とりあえず、正攻法じゃ駄目ってことだな」

バックステップで右衛門左衛門のところまで戻ったデイーノは鞭

を構え直した。

「とはいえ、意表を突く攻撃もどこまで続くか……後ろにもう一人ひかえているからな」

右衛門左衛門は白虎を指してそう言った。

「しかも向こうは死ぬ気の炎を使う可能性がある……正直きついな」  
「死ぬ気の炎？」

右衛門左衛門が首を傾げた。当然のことながら、彼は死ぬ気の炎のことを知らないらしい。

「悪いが説明してる暇は無い。まずはこいつを倒してからだ」

「……ああ」

ディーノと右衛門左衛門はそれぞれの武器を構えた。

「……うざったい」

と。ここで初めて 忍法の名を言ったことを除けば初めて、玄武は口を開いた。

「最初の一撃でぶっ潰れるよ……何で避けた……何で攻撃すんだ……何で会話すんだ」

「何……」

「うぜえうぜえうぜえうぜえうぜえうぜえうぜえうぜえうぜえうぜえうぜえうぜえ」

あくまで静かに、ただただ静かに、玄武は悪態をつく。

「うぜえ奴は……嫌いだ」

そう言つて玄武は、拳を近くのビルにぶつけた。

「忍法 『鋼拳』」

とたん。

ドガアアアアアアアアアアアアアアアア

そのビルが倒壊した。

玄武の拳が当たった部分を中心に、まるで飴細工が碎けるかのよう脆く崩れる。

「な、に……」

「馬鹿な……」

デイーノと右衛門左衛門は立ち尽くしてしまった。  
人の力で、武器も持たず、何も使わず、死ぬ気の炎も使用しない  
で

建物を、跡形も無く破壊してしまった！

辺りに土煙が舞った。視界が白に覆われ、何も見えなくなる。

「っ、くそ！ めちゃくちゃだ……」

デイーノは呻いた。

リボン達の話によると、裏組の一人、真庭朱雀は炎を操ったという。裏組の指揮官だという真庭青龍は死者を生き返らせ、生者をこちらに呼び寄せた。

真庭玄武といい、もしかすると裏組は普通のしのびではないのか  
……？

だとしたら後ろにひかえる真庭白虎の忍法とは……

「っ、跳ね馬！」

右衛門左衛門の声に、深く考え込んでいたデイーノは我に返った。

「まずおまえから潰す」

玄武が猛スピードでデイーノとの間合いを詰めていた。

デイーノと玄武の距離はほとんど無い。そしてこの距離は、完全に玄武の領域だった。

これでは 鞭が震えない。

「やばっ……」

デイーノは慌てて後ろに跳ぼうとした。

が、動けない。

後ろには部下達がいる。後ろに下がるわけにはいかない。かとい  
つて横に避けたら部下達に当たる！

「動けないだろ？」

玄武の声に、デイーノははっとする。

「まさか……」



「狙ったに決まってるだろうが」

忍者は卑怯卑劣が売り。

この程度の策略、考えるまでも無く思い付く。

「潰<sup>つぶ</sup>えろ、跳ね馬」

玄武の拳が、ディーノに迫る　　！

「虚刀流　『蒲公英』」

突然だった。

黒く長い髪が舞ったと思ったら、玄武が後ろに下がったのだ。

自分を倒す絶好の機会のはずなのに、なぜ

「あら、避けられてしまいましたか」

彼女は、抜き手を放った状態から自然体に体勢を戻した。

だらりと両手を下げ、先程の動きが嘘だったように静かな様だった。

「まあいいわ。いえ、悪いのかしら。迷子になった上にこんな場面に出くわすなんてね。でも見知った顔　いえ見知った仮面があったからよしとしましょう。いえ悪<sup>あ</sup>し、かしら」

そして彼女は振り返る。右衛門左衛門を。

「一度お会いしたことがありますよね。確か……左右田右衛門左衛門さん、でしたね」

「鑓、七実……」

右衛門左衛門の呟きに、ディーノは目を丸くする。

彼女が、鑓七花の姉……！？

まるで壊れ物のような美貌を持つ女性だった。壊れ物のような造り物のような女性。生者の気配のしない女性。

そして着用しているのは、見覚えのある黒衣。

「え、ええええ！？」

ディーノは女性の着ている服に何より驚いた。

そんなディーノには意に介さず、女性　鑓七実は玄武と向かい

合い、新たな肩書きを口にした。  
「ヴァリアー幹部、鑢七実。行きます」

## 第二十録 真庭玄武（後書き）

書き終わって読み返してみたら、デイナーと右衛門左衛門がほとんど動いてないという……くそう文才欲しい。

七実姉ちゃんまたもや迷子。そうさせたのは沙伊なのですがね……では！！

## 第二十一録 経緯

ジョットと否定姫が白蘭によって連れてこられたのは、濁音港から少し離れた雑木林の中だった。

周りには誰もいないように見える。しかしこんな場所、幾らでも隠れる場所などあるだろう。

否定姫はそう結論付け、早々に敵を探すのをやめた。

もとより、旅に出る前は屋敷にずっといた引きこもりだ。見付けたところで何もできない。そちらに関してはジョットに一任することになっている。

「まずは説明してもらおうか」

と。ジョットが白蘭に向けて口を開いた。

「貴様がここに來た経緯を」

「そうだねえ、んー」

白蘭は少しだけ首を傾げた後、話し始めた。

「実はさ、これはある実験の一環だったんだよ」

「……タイムトラベル、か」

「そ　百年二百年も前の世界に行けるかっていう実験ね。ああここで説明しちゃうとね」

白蘭は両腕を広げた。

「僕はこの尾張時代が存在した並行世界から來たんだ」

「改変、いや改ざんされた歴史の住人、というわけか」

「まあね。否定姫ちゃんのご先祖様　四季崎記紀の行なった改ざんは、世界の歴史にも影響を与えてさ、他の世界とはまた違った歴史になってるよ」

「なるほど、だからこの時代に来れたのか。未来はともかく、過去

はさすがに一方通行だからな」

ジョットは納得したように呟くが、否定姫は全然納得していない。  
「ジョットー、説明説明」

「ん？ ああ。つまりだな、未来は幾つもの可能性があるためにその分枝分かれしているが、過去は積み重ねてきたものだ。現在どれだけがこうと過去は変わらないだろう？ つまり過去にさかのぼろうとしたら、選択肢が一つしか無いということだ」

「ああ、なるほどね」

否定姫は納得して一つ頷いた。

「ふうん。じゃ、彼はこれから枝分かれしていく未来の一つから現代にやってきたってわけね」

「奴からすれば現代から過去、だろうがな。しかし」  
ジョットは眉をひそめた。

「おまえは一組織を束ねる者だろう。なぜそんな実験をおまえが行っている？ それにおまえの部下は、その組織の幹部だろう」

「んー、そのことかあ」

白蘭は頭をかいた。

「別に大したことじゃないんだ。ただの興味」

「興味？」

「ちよつとしたことで未来は変わる。歴史もそれが言えるだろ？

誰々が死ななかつたらこうなつてたろうって。でもさ、どの世界でも大まかな流れは変わらないんだよね」

白蘭の言葉の意味に、否定姫は心当たりがあつた。

それは八代目家鳴家将軍、家鳴匡綱に自分が言つた言葉。

つまりは

「……歴史の、修正作用」

「そう、まさにそれだよ」

白蘭は否定姫に向けてにつこり笑つた。

「まあそれがあるからなのか、大きく歴史が変わっちゃうことって無いんだよねえ。まあ、この時代、この世界もそうだけど。でも」

白蘭の、否定姫を見る目が鋭くなった。その目に、否定姫は思わず後ずさる。

「ここまで、同じ流れなのに違っているのは無かった。どうしてそうなったのか、興味がわいてね。それに、それを知ることが僕の野望にも一役買ってくれるかなってさ」

「野望？ 野望って、何よ」

否定姫の質問に、白蘭は笑顔のまま大真面目に言った。

「世界征服」

鑢七実が現れたことを受け、右衛門左衛門はさっさと後ろに下がることにした。巻き込まれないよう、ディーノの首根っこを掴んで引つ張りながらである。

手を組んで早々、怪我でもしてもらっては困る。

「え、ちよ、おいおい引つ張んなよ！ つかいきなり何！？」  
たたかわず

「不戦。我々はもう引つ込んでおいた方がいい。鑢七実が出てきた時点で、我々の役目は終えたようなものだ」

「いや、でも！ この人、鑢の姉だろ！」

ディーノは七実の方を見、抗議した。

「この人一人で戦わせる気か！？ そりゃ鑢の姉貴だし、例の変体刀の所有者だからそこそこ強いんだろうけど」

「そこそこ？ それは彼女に使う言葉ではないな。それは私に使われるべきだ 彼女は、むしろ最強と言うべきだよ」

「あら」

と。そこで七実は小首を傾げた。

「日本最強は、確か七花のはずですが……私はあくまで、『前』日本最強ですよ」

「勝者が強者と勘違いされているだけの話だろう。そんなわけ無いのにな」

右衛門左衛門は肩をすくめた。七実はその言葉に「それもそうですね」と同意する。

「まあ今はそんな議論をしてる暇など無いでしょう。とりあえず、あの方達を倒せばいいのですね。いえ、悪いのかしら」

七実が悪そうな笑みを浮かべ、玄武に向き直った。

「ああ、そうだ。私は名乗りましたが貴方のお名前をお聞きしてませんでしたね。呼ぶのに困りますし、さしつかえ無ければ、お名前を教えていただきませんか？」

「……真庭忍軍真庭裏組、真庭玄武」

「裏組……？」

七実は首を傾げた。

「聞いたことが無いですね。しかしまあ今は関係ありませんか」

七実はため息を よく似合うため息について、一歩踏み出した。玄武も構え、今にも先程の忍法をくり出しそうなほどに殺気をにじませている。

すぐさま戦闘開始      と、思いきや。

「帰んぞー、玄武」

ずっと離れて突っ立っていた白虎が気の抜けた声を上げた。

「そいつ鳳凰達の話してた、化物と言わしめるほどの例の天才だ。

天才つつつか、天災？      どっちにしろ、このまま戦ったら死ぬぞー」

「酷い言いようですね」

さして気にもしていない様子の七実。その後、白虎に尋ねる。

「えっと……お名前は……」

「真庭白虎。所属はこいつと同じ。年齢は五十な」

「お名前以外は見たら解ります。それで、白虎さん。貴方はどうやって逃げるおつもりですか？ 逃がす気は、これっぽっちも無いのですけれど」

「まあ、普通は無理だな。普通、は」

白虎はくつくつと笑った。屈託のかけらもない、いやらしい笑い方だった。

「披露してやるよ、俺の忍法を。まあ見せる気は毛頭無いけどな！」

そう言つて、白虎は動いた。

その時は、ただ走り出したようにしか見えなかった。

右衛門左衛門にはそう見えだし、ディーノも、そうだったに違いない。七実はどうだか知らないが

しかし、白虎が何かをしたのは、次の瞬間解った。

「忍法　雷動」

白虎の、そう呟く声が聞こえた。

聞こえた、だけ。

「な……！？」

しかし右衛門左衛門は、仮面に隠れた目を見開くことになる。

白虎は、何もしなかった。

何もしなかった　はずだ。

なのに、その姿は消えていた。

白虎だけではない。七実と対峙していた玄武も、白虎と同じくいなくなっていた。

逃げた？　いやしかし逃走する姿は見えなかった。

なら姿を消す忍法？　例えば相手の視覚に干渉するとか

いや違う。密集とまではいかなくともこれだけ近くにいたのだ。気配を消してもすぐ解る。

しかし気配すらも、もうすでにここには無かった。つまり、二人はここにはいないのだ。

右衛門左衛門やディーノ、七実すらも気付かせないスピードで、逃走したというのか……？

そんなの　ありえない。

「逃げられて　しまいましたね」

さほど残念そうでもなく、七実は呟いた。



そしてため息をつく。本当に　よく似合うため息を。

「どうしてかしら。私のこの目にすらひっかからないなんて。瞬間移動なんてものを使ったとも思えないし　爆発的に速度を速める技？　ううん、それにしただけ」

「あ、あのー」

と。ディーノがそろりと挙手した。右衛門左衛門を見ると、彼は酷く困惑した顔で七実を見つめていた。

七実の方はディーノのことに今気付いたような顔で首を傾げた。

「はい？」

「ヴァリアー幹部って……　どういうことだ？」

「ああ、そのことですか」

七実は、一つ頷き、言った。

多分　右衛門左衛門にはそれほどのことには思わなかったが衝撃的なことを。

「私、ヴァリアーに入隊したんです」

『……ええええええええええええええええええ！？』

ディーノだけでなくキャバッローネファミリー全員の叫び声に、右衛門左衛門と七実は思わず両耳を押さえた。

「世界征服う？」

否定姫はその言葉に、驚きではなくあきれを示した。

「ばっかじゃないの。子供じゃあるまいし」

「ん？」

「否定する。私は否定するわ。世界征服なんて馬鹿の極みね。どう

してちよつとした権力で満足しないのかしら。最高の権力を手に入れたって、その後に来るのは退屈でしょう。もし私が世界をもらっても、私はいらないと答えるわ」

否定姫は彼女らしく、白蘭の言葉を否定した。  
いつものように。

相手を叩き潰すかのごとく　否定しつくした。

「……ぷっ」

しかし。

「あはははは！　面白い意見だね」

白蘭は、全くこたえた様子は無かった。

「まあ確かにそれはそうだね。でも、普通に生きてたって退屈じゃない？　だったら世界の支配者になった方がずっと楽しいよ。いや」

白蘭はすう、と笑みを深めた。

「世界の覇者になった方が、ずっと楽しいよ」

「覇者……？」

「まあそれはともかく。君達はこのに来た時思わなかったかい？

ここは敵陣のまっただ中で、周りにはもう囲まれてるって」

そう言つて白蘭は、指を鳴らす。

「それは実際、正しい」

とたん。

「っ……！？」

「……」

否定姫は身を固め、ジョットは身構えた。

現れたのは、あきらかに十を優に超える数の人間だった。

百とまではいかないが、少なく見積もっても五十はいるだろう。

そんな人数が、どうしてこんなところに隠れていられたのか謎なところだが　しかし敵であることには違い無かった。

なぜなら全員刀を構え、その刃に死ぬ気の炎を灯していたからだ。  
おそらくは、白蘭の配下

だが、それならこの間の二人はどこにいるのだろう。

ジョットには敵わなかったものの相当の実力者であるはずの、あの桔梗とザクロとかいう奴はどこにいるのだろう。

「否定姫ちゃん」

と。白蘭はにこにここと、こちらに友好的な笑みを向けていた。

それがいやに　鼻につく。

あの不愉快な女ほどじゃないけど、いらつく。

「君がおとなしく僕に付いてきてくれるなら、僕達は何もしないよ。君だって、怖い目には会いたくないでしょ？」

「否定するわよ」

否定姫はふん、と鼻を鳴らし、ばんつ、と鉄扇を開いた。

鉄扇を開いたのは、何だか久しぶりな気がする。

「私に怖いものなんて無いわ。私は恐怖心さえ否定する　そしてあんたの誘いも否定するわ」

「……そう」

白蘭は笑みを絶やさないうまま、瞳を冷たくして、命令を下した。

「やれ。ただし　<sup>フリーモ</sup>I世のみだ」

それは間違えようの無い、戦闘開始の合図だった。

## 第二十一録 経緯（後書き）

やっとジョットと否定姫書けた……！

更新少し間が空きましたね。これからもこんな更新スピードになるんだろうな……；；

次回、とうとうツナ、七実と会おう！ ……のか？  
では！

## 第二十二録 邂逅

ツナは固まっていた。

玄関先で、ある人物を前にして。

汽口慚愧をこの家で面倒を見ることになった翌日、沢田家に一人の男が訪ねてきた。

それが訪問ではなく帰宅だということを、ほどなく七花は知ることになる。

「よお、ツナ。久しぶり！」

「と、父さん！？」

「え……」

七花はツナの後ろに立ちながら、彼と男を見比べた。

似てない。細身で華奢なツナに対し、その男はまさに『男』という感じだった。

六尺はありそうな長身に筋肉質のたくましい体格。髭の生えた顔は精悍で、ツナとは真逆の位置にいそうな壮年の男だった。

「この人が……綱吉の親父？」

似てない。同じ部分が無い。そうか綱吉は奈々さん似なのかと、どうでもいい気付きさえしてしまうほどだ。

「まじで……？」

「うん？」

呆然とする七花に今更気付いたように（そんなことは絶対に無いが）視線を上にした。

「ああ、おまえが噂の『無刀の剣士』か。へえ……無駄の無い鍛え方してんな。部下にしたいぐらいだ」

「部下……？」

「と、父さん！ 何でここにいんだよ！？ イタリアにいたんじゃないの！？」

ツナは慌てたような声を上げた。

それに対し、男は肩をすくめる。

「おいツナ。その前に名乗らせてくれよ。こいつは俺のことを知らないんだから」

「そ、そうだけど……」

声の弱くなったツナをやりわりと押しのけ、男は靴を脱いで玄関に上がった。

こうして向かい合うと、自分と一尺も変わらない。本当に背が高い男だった。

「俺は沢田家光。よろしくな、虚刀流」

沢田家の居間にはツナ、リボン、七花、汽口、そして家光が集まっていた。

奈々は外出中だ。家光が帰ってきたことを受け、鼻歌を歌いながら買い出しに向かった。

「……じゃあ家光殿は綱吉殿のお父上で」

家光に関しての説明が終わり、最初に口を開いたのは汽口だった。

「ぼんごとという組織の次席なのですね」

「普段は外部の組織だが、まあそんなとこだ」

家光はからつと笑った。それに対し、リボンは低い声で尋ねた。  
かなり確信めいた問いを。

「おめーが来たのは、ボンゴレリングでのことだな」

「……ご明察だ」

家光は降参、というようにごつごつした両手を上げた。

「ボンゴレリングが二つ奪われたこの状況…… おまけに霧の守護者が奴らにさらわれてる。ボンゴレ上層部ではツナ、おまえに非難が集中してる」

「それは……別に構わないけど……」

ツナはうつむいた。そのあまりに沈んだ様子に、七花は慌ててツナをなぐさめる。

「綱吉は悪くねえよ。悪いのはまにわにの奴らだ」

「まにわに……？ ああ、真庭忍軍のことか」

家光は納得したように頷いた後、「解ってるよ」と苦笑した。

「ツナの責任じゃないのは解ってる。だが、そう思わない奴らがいるのも事実でな」

「ボンゴレリングはボンゴレボスの証だ。それが奪われたとあつちや、憤るのも無理無いからな」

リボーンは肩をすくめた。

「そのことについて、九代目は何て言ってた？」

「九代目自身はツナを責めちゃいない。だが幹部連中のことがあつてな、援護はできない状態だ」

だから、と、家光は自分を指した。

「普段外部の人間である俺達門外顧問チームが、多少ながら力を貸す。それから、あと九代目からの伝言だ」

家光の言葉に、ツナの顔に緊張が走った。力の入ったその様子に、七花は少しあきれる。

言われる前からそんなに身構えても、どうにもならないだろうに。

「『真庭忍軍はボンゴレ十代目ファミリーで殲滅せよ』　だそうだ。まあこれは九代目だけの命令じゃないかな」

「上層部の命令でもある　か」

リボーンはに、と笑った。

「そんなこと言われなくても俺達は真庭忍軍の奴らと戦うつもりだぞ。なあツナ」

「……！　……うん」

少しの間を置いて、ツナは頷いた。

「ボンゴレが何考えてるか解んないし、俺の評価が下がったって別に構わない。ボンゴレリングだって、どうでもいい。だけど、クロ

「ムは助けなくちゃいけない」

ツナの真剣な眼差しに、七花は驚く。

まさか彼がこんな顔ができるとは、今まで知らなかった。

「クロームは俺の友達だ。それに真庭忍軍の奴らは京子ちゃん達を傷付けようとした。絶対に許せない」

ツナはぐ、と拳を握った。

「絶対に奴らは倒す。戦って、勝つんだ」

「……ああ」

七花は笑って、ツナを見つめた。

「手伝うぜ、綱吉」

「私も、お力添えさせていただきます」

汽口も頷き、少しだけ唇を緩めた。

「七花さん……汽口さん……」

ツナは嬉しそうに笑顔を浮かべる。息子のそんな様子を見た後、家光は七花に向き直った。

「さて、次に鑓七花。おまえに言っておきたいことがある」

「ん？」

「まず、おまえのことを上層部は知らない。言わない方がいいだろうと思うてな。真庭忍軍のことも、新興マフィアということにしている」

「何でそんなことを？」

「異世界……しかも違う歴史の存在となれば、利用しようとするやからも出てくるだろう。喋る口は少ない方がいい」

家光の言葉の真意を、七花はあまり理解できなかった。

そういう『面倒なこと』は考えたくないのだ。どのような時代においても、彼の考えなさぶりは相変わらずである。

「それともう一つ。変体刀の所有者だが」

「？ が、どうしたんだ？」

「その内の二人、宇練銀閣と校倉必を門外顧問チームが保護した」  
「っえ！」



七花は思わず立ち上がった。

「銀閣と校倉が！ 見付かったのか！？」

「ああ。変体刀も持っていた。斬刀『鈍』と賊刀『鎧』 だったか？」

「ああ。そつか。二人見付かったか」

七花はほっ、とため息をついた。

先日の汽口の状態もあり、他の変体刀の所有者が無事か不安だったのだ。

「これで見付かってない変体刀所有者は、二人か」

リボーンのセリフに、七花は頷く。

「ああ。姉ちゃんと、錆だ」

何だか強い奴だけ残った気がする、と七花が思っていると、家光が口を開いた。

実に、言いくそくに。

「あー、鑢七花。君のお姉さんのことだが、実はもう見付かってる」「え？」

「実は数日前……いつの間にかボンゴレの抱える暗殺部隊の幹部に収まってたんだよねあ、これが」

軽く言われた言葉に、七花は一瞬首を傾げる。だが次の瞬間上がったツナの叫び声に、汽口と一緒にびくう、と身体を震わせることになったのだった。

山本は帰路に付いていた。部活で遅くなったため、一人での帰宅だ。

一回家に帰ったら、ツナの家に寄ろうかと思っている。獄寺はいらるだろうか。いやあそこにはビアンキがいるし

などと考えていたため、声をかけられるまでその人物に気が付かなかった。

「その少年」

「ん？」

山本は振り返り、彼を見た。

自分から少し離れた場所にいたのは、自分より小柄な体躯の男だった。

長い髪はまとめ上げられ、着物は着崩している。一瞬女かと思っただが、華奢とはいえ筋肉の付いた身体付きは男のものだ。

何だか周りの風景に馴染んでいないような、そんな印象を受ける美少年だった。

「えっと……何すか？」

「おぬしに聞きたいことがある。ここは……どこでござるか？」

何だか見た目と同じぐらい時代錯誤な口調だった。

「どこって……並盛町だよ」

「並盛……？ 聞いたこと無いな」

男は形のいい眉をひそめた。

山本は少し首をひねったが、すぐに思い至る。もしか、この人は

「あの……あんた名前は？」

「ん？」

男は目を瞬いた後、山本の予想通りの名を名乗った。

「拙者は錆白兵と申す」

「錆白兵……」

やはり、七花が言っていた名だ。確か日本最強の剣士。

となると

山本は視線を男 錆白兵の腰の物に向けた。

刀だ。柄も鞘も鍔も繊細な美しさを持っている。あれは、変体刀だろうか。

「……なあ」

「うん？」

「ちよつと話したいことがあるんだけど、いいか？」

山本の誘いに、錆は再び眉をひそめた。

「……つまりここは拙者がいた世界、時代ではなく、その真庭青龍とやらの忍法で生き返ったということでござるか」

公園のベンチに座った錆は、ふむ、と頷いた。

「それならばこの状況に説明が付くでござるな。死んだ拙者が生きており、見たことの無い建物が建ち並ぶこの状況に」

思った以上に、彼は頭の回転が早いらしい。全部理解するのに一時間とかかってない。いやそれ以前に、彼の頭の柔らかさは驚くものがあつた。

そういえば七花も右衛門左衛門も、それに迷彩や汽口も　やたらに現状を受け入れるのが早かつた。

一体彼らの頭はどういう構造をしてるんだろう。それほどまでに柔軟性があるのか、完成形変体刀所有者及び完了形変体刀は。

「……ていうか、俺はもつと驚くかと思っただけだな」

山本の言葉に、錆は少しだけ唇を緩めた。

「驚いたり、混乱したりしていた方がよかつたでござるか？」

「いや、俺としちゃこっちの方が話しやすいけどさ……」

こんなに違うものか。

自分達が未来に連れてこられた時は、表面上はともかく内心はみなまともな精神状態とは言えなかつたはずなのに。

「……全く困惑していないと言えば、嘘になるが」

と。錆はそつと息をついた。

「しかし不測の事態には慣れているし、この程度で心を揺るがすほど、拙者はやわではござらん」

「慣れ、か……」

山本は錆の言葉を繰り返した。

そういえばこの男、七花と戦うまで無敗を誇っていたと聞いた。

あの七花が、勝ったが勝った気がしないと言っただけである。ならば実力だけでなく精神面もかなりのもののはずだ。

見た目に反して。

一体、いかほどの実力なのか。スクアールや幻騎士と同じぐらいか、それとももっと

「……なあ」

「うん？ 何だ？」

「いや、ちよつとした頼みごとなんだけど……」

山本は少し迷いながらも、バットと一緒に背負っていた愛刀を手  
に取った。

「俺と勝負してくれねえか？」

## 第二十二録 邂逅（後書き）

今回は早めに更新できました。でも内容は短い。

うーん、進み的にツナ、七花、七実の絡みは書けなかったなあ。

早く書きたいなあ……

次回は山本vs鏑。真庭忍軍を動かすか否かは書き始めてから決めます。早く話を動かしたいし。

では次回！

## 第二十三録 二人の最強

七花は道の真ん中であくびをもらった。

先程まではツナの家で沢田家光の話を聞いていたが、話が進むにつれ作戦だか何だかの小難しい話に突入したため、席を辞したのである。

自分はあくまで刀。作戦は考えるのではなく従う側である。第一個人としての戦闘はともかく、大局的な戦いの作戦を立てるには、自分の頭は不向きだ。

こんな時、とがめがいてくれたらと思う。

奇策士を自称する彼女だったら、この状況をどう見るだろう。

あるいは、自分は死んだままで真庭忍軍や変体刀の所有者達が生き返ってるこの状況を、どう見るだろう。

確かめたいが、彼女はいないのだ。確かめようが無い。

「……意外だったなあ」

暗い方向に行きそうだったため、七花は早々に頭を切り替えた。ツナの父親があんな人だとは思わなかった。あんな豪快で、男らしい人だとは思わなかった。

同じたくましいでも、親父とは違うな。

すでに他界した父を思い出し、七花は苦笑する。

そういえば、姉はヴァリアーとか言う暗殺部隊に身を置いているという。

家光の話ではそのかしらに気に入られたとか。一体姉は何をしたのだろう。

あの姉のことだ、あっちでも無茶苦茶をやっていることだろう。「無理してないといいけど」

おそらく姉の働きたがりは、死んでも変わってないに違いない。  
だとすれば、止める人間がない今、無理をして身体を壊す可能性もある。

無事だいいが　など考えていた七花は、気付かなかった。  
すぐ前の道に、ある人物がいることに。

「やあ」

低めの声に、七花は顔を上げる。そして数歩先に、どこかで見た  
ような少年を見つけた。

黒い髪に黒い瞳、羽織った上着さえ黒い。黒ずくしの姿の、彼は  
確か

「雲雀恭弥……だったよな」

七花の質問に、少年　雲雀は頷いた。

「久し振りだね」

「うん、まあな。俺は散歩してたんだけど、おまえは？」

「見回りだよ」

「見回り？」

「そう。並盛の風紀を守るためのね」

雲雀はにこりとせず、愛想無く言った。

歳の変わらない綱吉達とは大違いだ、と七花は思いつつ、「ふう  
ん」と気の無い返事をした。

「風紀ねえ……」

「……ところで」

雲雀が急に話題をふってきた。首を傾げる七花は、雲雀の妙な質  
問に眉をひそめることになる。

「貴方って、強いのか？」

「は……？ いや、まあ、強いけど……それがどうかしたか？」

「そう……強いんだ……」

七花の言葉を一部繰り返し、雲雀は唇を緩めた。

それは獲物を見付けた獣のような。  
あるいは研がれ過ぎた刃のような。  
あるいは研鑽された刀のような。

そんな、笑み。

「っ……!？」

「じゃあ僕と 戦つてよ」

言下と共に、銀色が七花の視界に移った。

反射的に後ろに身を投げ、その攻撃を避ける。距離を開けて一の構えを取った後、雲雀の姿を再確認した。

てつきり小刀か何かが彼の武器かとさっきは思ったが、どうやら違つたらしい。

彼が持つていたのは、銀色に煌めく棒状の武器だった。

鋼の棒に黒い取っ手の付いた、見たことの無い武器だ。両手に持つているところを見るに、どうやら対の武器らしい。形状から、刀のように斬るのではなく棍棒のように叩いて攻撃するもののようだ。鉄製である以上、それなりの重量があるはずなのに、それを構える雲雀は、そんなことを感じさせない。

何よりこの殺気 今まで戦つてきた敵と勝るとも劣らないものだった。

「いきなり何すんだよ!？」

七花は怒鳴るも、雲雀が気にした様子は無い。

再び、こちらに向かつて走り出してきた。

「どれくらい強いのか確かめてあげる。弱いなら」

くり出される攻撃は手加減も何もされていない、紛れもない殺すための一撃だった。

「僕が、咬み殺してあげる」

誰もいない並盛神社。そこで、二人の剣士が向かい合っていた。



片方は山本武、もう片方は錆白兵だ。

お互い、自身の刀を抜いている。

山本は時雨蒼燕流に伝わる姿を変える刀、時雨金時。

錆は四季崎記紀の造りし完成形変体刀が一本、薄刀『針』。

「真剣勝負　とはいえ、互いを殺さないという縛りありでござるか」

「ああ。俺は殺しの剣は振らない主義なんだ」

「……そうか」

少し間を空け、そう返す錆。その微妙な反応に首を傾げつつも、

山本は時雨金時を構えた。

「俺から行くぜ」

「ああ」

錆の持つ薄刀の切っ先が上がる。それと同時に、山本は動き出していた。

時雨蒼燕流、攻式・八の型

篠突く雨。

山本は一撃でしとめるつもりでいた。

そうでなくとも、この一撃は決めるつもりでいた。

しかし、彼は錆白兵という男の実力を見誤っていたと言える。

無理も無いかもしれない。かつて奇策士は言ったが、錆の美貌は男さえ飲まれてしまう。

そうでなくても、油断はするだろう。華奢でたおやかな姿の彼が、それほどまでに強いなど。

見た目通りの実力でない人物を、山本は知っていたのに。

「……え？」

山本は目を見開いた。

確かに捉えたはずの錆がない。刃に相手を斬った感触さえ感じなかった。

ただ、そう。彼の声だけは聞こえた。

「爆縮地」

それが技名であることは解った。しかしそれが移動法であることは、山本には解らなかった。

解るはずが無い。

七花でさえ見切れなかった超高速の移動法などと、その一瞬で見抜ける者などそういないだろう。

結果、決着は。

「拙者にときめいてもらうでござる」

一瞬で決まった。

「っ、い、いつの間に……」

山本の首筋には、薄刀の刃が突き付けられていた。

錆は、文字通り目を瞬く間も無く山本の背後に回っていた。

あまりに早い決着。七花の時よりも、ずっと早い。

いや、七花もその気になれば、一瞬で決着をつけることができたろう。

そうしなかったのは彼なりの手心、手加減だ。

しかし錆はそうしない。

手加減など考えもしない。

剣士らし過ぎる彼は、容赦などしない。

殺さずの規則が無ければ、今頃山本の頭は地面に転がっていただろう。

「おぬしは少々……覚悟が足らぬな」

「か、覚悟……？」

それは 十年後の未来で、その時代のスクア―ロにも言われたことだ。

あの時は一時期野球を捨てることによって覚悟を得た。

だが、今は。

「そのような腑抜けた剣では、拙者に勝てないでござる」

「っ……」

山本はぐ、と奥歯を噛み締めた。  
とても、言い返せない。

今の自分には覚悟など、剣士としての覚悟など、ほとんど無いのだから。

「……強えな、あんた」

しばらくして、山本はそんな言葉を返した。  
そうとしか、返せなかった。

「七花さんといいさ、何でそんなに強えんだ？」

「……虚刀流と拙者を一緒にするのは、少し間違いでござる」  
錆は刀を引いた。

山本が振り返ると、鞘に刀を納めながら、彼は視線をどこかに漂わせていた。どこを見ているのか、解らない。

「あれは鋭く研ぎ澄まされた刀でござるが……拙者は錆びた刀でござるよ」

「錆びた、刀……？」

「錆びて折れた、斬れぬ刀でござる」

それは山本に言っているのか自身に言っているのか、よく解らない口調だった。

山本は首を傾げつつも、「でも」と口を開く。

「あんた強えじゃん。めちやくちゃさ。七花さんも、あんたのこと強えって言ってたぜ。勝った気がしなかったって」

「買いかぶりでござる。拙者は虚刀流に勝てないのでござるよ。」

錆は『鑢』に勝てないのでござる

「……？」

ますます意味が解らなかった。それと同時に、じわじわと、勝てなかった悔しさがわき上がってくる。

七花といい彼といい 一体どういう鍛え方をすれば、こんなに強くなるのだろう。

もしかして他の変体刀の所有者もこんなに強いのだろうか。  
炎刀の所有者である右衛門左衛門も。

千刀の所有者である迷彩も。

双刀の所有者であるこなゆきも。

王刀の所有者である慚愧も。

絶刀の所有者である蝙蝠も。

毒刀の所有者である鳳凰も。

そして、まだ見ぬその他の所有者達も。

皆、どれほど強いのだろう。

自分の未熟さを嫌というほど感じ、山本はうつむく。

また、時雨蒼燕流を汚してしまった。

親父から受け継いだ、完全無欠最強無敵の剣を

「山本殿？」

錆に声をかけられ、山本は我に返った。

「え、あ、何すか？」

「だから、虚刀流のところへ連れていつてもらえないかと訊いてい  
るのでござるが。彼からも、話を訊きたい」

「そ、そうっすね。じゃあツナの家に行きましょうか」

山本は無理矢理笑顔を作り、歩き出した。

「山本殿」

「はい？」

「おぬしは常に、剣士としての自覚を持った方がいいでござる」  
「は？」

錆の唐突な言葉に、山本は思わず足を止めた。

「どういう？」

「自分が剣士であること、何のために剣士であるかを常に考えてい  
れば、おぬしはもっと強くなれるでござるよ」

錆はそう言っ、山本に進むよう促した。

山本は再び歩き出しながら考える。

自分が剣士であることなど、ちゃんと理解している。  
している、つもりだった。

けれどそれでは 足らなかったのだろうか。

山本はツナの家に着くまで錆の言葉の意味を考えていたが 結局結論には至らなかった。

七花は逃げ回っていた。

雲雀の攻撃から、戸惑いながら。

「だから！ 何で俺はおまえと戦わなくちゃいけないんだよ」

「貴方が強いからだよ」

全く意味が解らなかった。

しかしこの少年、歳の割に何て強さだ。七花は内心で舌を巻く。

先程から彼の攻撃を避け、さばいているからこそ解る。彼はまだ本気を出していない。

リボーンの言う通り、自分と同じぐらいの強さかどうかは判断しかねるが しかし。

「……この時代に、こんだけ強え奴がいるとはな」

てつきり、歴史が進むと共にそういう者達が必要とされなくなり、自然消滅すると思っていたのだが。

……しかたがない。このままではちがあかない。

「虚刀流 『蒲公英』！」

七花は右からの攻撃を弾き、貫手を放った。

雲雀は空いたトンファー（さつき聞いた武器の名前）でそれを防ぐ。

金属製というのもあって防がれた七花の方が痛い思いをしたが、それはこらえ、すぐさま第二撃に移った。

「虚刀流 『百合』！」

少し身体を退いてからの胴回し回転蹴り。それは狙い通り、雲雀の脇腹に当たる。

だが彼は、蹴りとは逆方向に跳ぶことで威力を軽減させた。当然当たりは浅い。

とはいえ、全く効果が無かったわけでもないようだった。

雲雀はふらりとよろめき、一瞬構えを解いてしまった。勿論七花はそれを見逃さない。

右の手刀で雲雀のトンファーの一つを弾き飛ばし、左の貫手で雲雀の喉を狙う。

だが、雲雀の方もただ黙ってやられたりはしなかった。

もう一つのトンファーで、ほぼ同時に七花のみぞうちを狙う。しかも、中に何かが内蔵してあったのか、無数の棘が飛び出してきた。びたり　と。

二人の動きは、同時に止まった。

七花は雲雀の喉を突く直前に。

雲雀は七花の腹を殴る直前に。

そのままやれば互いを殺しかねないところで　戦いを中断した。

動いた方が負ける。あたかもそういう決まりがあるかのように二

人は微動だにしなかったが

「……ふふ」

雲雀の笑い声で、その拮抗は崩れた。

「……何で笑ってんだよ」

「嬉しいんだよ。貴方みたいな強者に会えてね」

雲雀は心の底から嬉しそうに小さな笑い声を上げた。子供らしい無邪気さからは程遠かったけれど。

「鑢七花……だっけ」

「ああ」

「さっき言ってた虚刀流って何？」

その質問に、七花は彼に虚刀流のことを教えていないことに気が付いた。

「虚刀流ってのは、俺が当主をしてる剣法の流派だ」

「剣法？　拳法じゃなくて？」

雲雀はどうやら興味をそそられたようだ。トンファーを引き、七花を見上げる。こうして見ると、ツナほどでないにしろ小柄な少年

である。

どこからあんな力を など思いつつ、七花は頷きを返した。  
「虚刀流は自身を一本の刀として戦う殺人剣術なんだ。そして俺はその七代目当主」

「自身を刀 ね。剣術を雛形にした徒手空拳の技とも違うようだし、変な戦い方だね。実際刀は使わないのかい？」

自然に出た雲雀の問いに、七花は答えようとした。だが、結局答えず仕舞いになった。

「ここにいたのか」

突然リボーンが乱入してきたためである。

「リボーン、どうしたんだ？」

「おめーをさがしてたんだぞ ちゃおっす、雲雀」

「やあ、赤ん坊」

リボーンが軽く手を上げると、雲雀もそれに短く答えた。

「俺を探してたって、どういうことだよ」

「変体刀の所有者が集まって話し合いをしようってことになったんだよ。ついさっき、おめーの姉貴が並盛に来たって家光んとこに連絡が来たからな。つまり、ヴァリアーが来たってことなんだが」

「姉ちゃんが？」

七花は目を瞬かせた。

「そついやそんなこと言ってたな……」

「後は薄刀『針』の所有者、錆白兵だが」

リボーンが言いかけた時だった。

「あれ……？ 小僧に雲雀に七花さん？」

声をかけられた。振り返ると、なぜか微妙に暗い顔の山本がこちらに歩み寄ってきているところだった。

そこまではいい。問題は、彼の後ろにいる青年だ。

総髪の、一瞬女かとも思ってしまうほどの美貌を持つその男を、七花は知っている。

知っているどころか 死闘を繰り広げたことさえある。

つまり、彼は

「鑄、白兵……！？」

「虚刀流　でござるか」

同時に、二人は互いの名を呼んだ。

こうして、完成形変体刀とその所有者が舞台上に出そろったことになる。

だが役者はまだそろっていないことを、彼らは知るよしも無かった。



## 第二十三録 二人の最強（後書き）

我ながら山本vs錆は無理矢理だったなあと思いました（感想！？

雲雀vs七花はちゃんと描写できたと思うんですけど……いや、微妙か。

次回は所有者全員出す予定です。その次の話でvs真庭忍軍編突入したいです。その後ジョットと否定姫サイドの話になると思います。

## 第二十四録 作戦会議

ツナは必要以上に緊張していた。

ディーノが泊まっているホテルの、最も広い客室。ツナはそこにある椅子に座していた。

一人ではない。右側のすぐ横にリボーンがいるし、傍に七花も突っ立っている。緊張しているのは、視界に収まった変体刀所有者達のせいだ。

炎刀『銃』の所有者、左右田右衛門左衛門。

千刀『？』の所有者、敦賀迷彩。

王刀『鋸』の所有者、汽口慚愧。

薄刀『針』の所有者、鏑白兵。

斬刀『鈍』の所有者、宇練銀閣。

賊刀『鎧』の所有者、校倉必。

悪刀『鏢』の所有者、鏑七実。

以上、七名。

ちなみに双刀『鎚』の所有者、凍空こなゆきはこの部屋にはいない。一種の作戦会議であるため、彼女は自ら席を辞したのである。

「うちつち子供ですから……そういう空気、苦手なんです」

それが彼女の言い分だった。

ツナ、リボーン、七花を合わせた十名は、数分間無言だった。

ツナは知らぬことだが、この内五名は七花に殺された人間である。殺した側の七花も、殺された側の彼らも、色々と複雑な思いがある

はずだ。ツナの緊張は、そこから来ている。

不思議と、右衛門左衛門と迷彩はそのわだかまりは無いようだが。

「……はあ」

と。七実はため息をついた。その、あまりにも似合うため息に、ツナは大げさなほど身体を震わせる。

そんな反応など気にも止めず、七実は「七花」と、弟の名を呼んだ。

「久し振りね。前に戦った時より強くなったみたい。いえ、とがれてきたのかしら。ぬるさはなくなったわ。一応、斬れる刀になったようね」

「……姉ちゃんは変わらねえな。当たり前と言えば、当たり前だけどさ」

七花は苦笑めいた表情を浮かべた。

「でもまさか姉ちゃんに、所有者ができるとは思わなかったけど」

「所有者、ね。立ち位置的にはそうなるのかしら。けれど七花、貴方、とがめさんを 所有者を失って大丈夫なの？」

奇策士が亡くなっていることは、ここにいる全員にすでに教えている。

こなゆきにもすでに話しており、それを知った彼女は涙ぐんでいた。

ただ、意外なことに校倉は何も言わなかった。

七花の話では、奇策士を取り合って決闘をした仲だったはずだが

ツナは少しだけ首を傾げた。

「今のところは大丈夫。所有者じゃないけど、一緒に旅してる奴もいるしな」

「そう。ならいいけど」

七花の返答に、七実はあるさり引いた。

彼女の服はヴァリアーの隊服（下はズボンではなくタイトスカート）であり、死人のような印象を持つ彼女が着ると、まるで死神のようにツナには見えた。

暗殺部隊に身を置いていいるのだから、その印象は正しいのだろうけど。

「……とがめと言えば」

七花は視線を七実から、自分より大きな体躯を持つ校倉に向けた。最初に会った時は七花より大きい男などツナには想像もできなかったが、本当にいるものだと思いに感心してしまった。

本当に　大きい。ついでに言うと、先程見せてもらった賊刀も大きかった。

巨体の校倉に巨大な賊刀は、まさに相性抜群だ。現代においても日本であれを着こなす人間はいないだろう。

「あんた、何も言わないな。俺、てつきり何か言ってくるかと思つてたんだが」

「何をだ」

校倉は野太い声でそう返した。それに対し、七花はためらうように言う。

「その……とがめの、こと」

「……ああ、そうか」

校倉は頭をかいた。どこか、切なそうな顔で。

「……おまえ、俺の妹のことを、俺の部下から聞いたよな」

「ああ」

「なら話は早い。ようは俺は、おまえにとにかく言える立場じゃねえんだよ」

校倉は乾いた笑みを浮かべた。

「俺は妹を守れなかった。それどころか、何もできなかった。なのにそんな俺が、おまえに文句つけられるかよ。まあ、言いたいことは山ほどあるけどよ」

「……」

「それに俺はおまえに負けてんだ。そんな俺が、おまえの代わりに傍にいて助けられたって確証はねえ」

口ではそう行ってるが、本心はどうなんだろう。

ツナは校倉の顔を見つめた。

言うほどに、彼は奇策士の死を受け入れられているんだろうか。

いや、それ以前に。

それを皆に説明した七花自身が、それを受け入れているんだろうか。

(……何考えてるんだろ)

ツナは自問自答する。

自分には関係無いのに。自分と奇策士は会ったことが無く、そしてこれからも会うことは無いというのに。

「……あの」

ツナは緊張を押し殺して、この空気を払拭するために声を上げた。視線がいつせいにこちらに向いたせいで、思わず椅子に座ったまま後ずさりしてしまったが。

「こうして集まったのは、これからのことを所有者同士で話し合うためでしょう？ とがめさんって人のことを話すために集まったんじゃないはずです」

「……つつかよお」

と。宇練銀閣が眠そうな それなのに威圧を感じる目をツナに向けた。

「坊主が誠刀『銚』の所有者から誠刀を受け取ったって話、本当かい？」

「え、あ、は、はい！」

ツナは一瞬返答に詰まった。まさか信じてもらえてなかったとは思わなかったのだ。

宇練銀閣。居合抜きの達人で、その速さは目で捉えることができないとか。少し見てみたいが、真つ二つにされたくないのも何も言うていない。

もしかしたら、彼はあまり他人を信用しない人間なのかもしれない。生前も、幕府の通達も聞かずに砂漠に建つ城で閉じこもっていたようだし。

というか、その時食料や水はどうしてたんだろう。

どうでもいいことを考えつつ、ツナは上着のポケットから誠刀を取り出した。

「これが誠刀『銚』、です」

「……？ 柄と鍔だけじゃねえか」

宇練は首を傾げた。他の面々も顔を見合わせている。ただ右衛門左衛門と七実だけは微動だにしなかった。

「びつくりするかもしれないけどさ、これが誠刀だったのは確かだぜ」

七花が騒ぎ出す彼らをなだめるように口を開いた。

「俺は確かに、所有者である彼我木輪廻からこれがそつだと聞いたからな」

「しかし七花殿」

汽口がためらいがちに声を上げた。

「それは……刀では無いのでは？」

「それ言ったら、王刀はどうなんだよ」

七花が苦笑すると、汽口は「確かに、そつですね」とあっさり引いた。

「……刀集めをしていた虚刀流の言葉だから一応信じるが、しかし宇練の視線が、少しだけ鋭くなった。

「これから俺達に、どうしろって言っただ？」

「決まってるだろ」

答えたのは、リボーンだった。

「真庭忍軍を倒すのを手伝ってもらったためだ」

「……」

「勿論無償とは言わねえ。それに全員じゃねーしな」

「つまり……戦力外の人間がいるってことかい？」

迷彩の言葉に、リボーンは頷く。

「そつだ。まず、ここにはいない凍空こなゆき」

「？ 何でだ？」

七花が不思議そうな顔をした。

彼の考えは、ツナにも察しが付く。

こなゆきという少女はとんでもない怪力の持ち主で、だからこそ最も重い刀である双刀を扱えるとか。彼女がいれば、戦いを優位に進められるだろう。

だが、ツナはそんな合理的な考え方はできないし、リボーンにも別の理由があつた。

「あいつはまだ餓鬼だ。戦いにおいてはど素人と見た。ど素人だからこそこできる技はあるが、それはあくまで偶然と運でなり立つものだ。暗殺集団相手に通用するとは思えねえ。それに、真庭狂犬のこともある」

「ああ……そつか」

七花は思い出したような顔をした。

「そつだよな。狂犬の忍法をこなゆきに使われるわけには……となると……」

ツナは最近気付いたが、七花は決して頭の悪い人間ではない。どちらかといえば思慮深い方だ。考えるのが苦手なのは、おそらく考えることに慣れてないからだろう。だからこうやって考え込む姿は何ら違和感無い。

ただ、その姿が少しだけ奇策士に似てきたことに気付いたのは、この面々の中で右衛門左衛門と七実だけだった。

「それから……汽口慚愧。悪いがおまえも、戦いに不参加でいてもらう」

「え……」

汽口は驚いたように目を丸くした。

「なぜですか？」

「理由はおまえ自身が一番解ってるはずだぞ」

リボーンは汽口をじっと見つめた。

「おめーが当主をつとめている心王一鞘流は活人剣なんだろう？」

「そうです」

「そのおまえが、人を殺すことを専門とする真庭忍軍の相手をでき  
ると思うか？」

「……」

汽口は黙り込んでしまった。

人を殺すのではなく人を生かす剣を振るう汽口にとって、人を生  
かすのではなく人を殺す業を扱う真庭忍軍は対局に位置する。

戦うどころか、関わることもすら無かったであろう両者だ。当然と  
言えば当然だが、これから会うべきでない。

剣をあくまで競技として振る汽口には、今回の戦いは無理なのか  
もしれなかった。

その点では、他の所有者は不安無いが。

「話を進めるぞ」

リボーンは無理矢理話を変えてきた。

「真庭忍軍は死ぬ気の炎つてのを使っている。どうやって使えるよ  
うになったかは不明だが、死ぬ気の炎無しで戦うのは無謀だ。そこ  
で、これを配る」

リボーンは懷から、リングを数個取り出した。

「それぞれ属性別に選別してある。今から配るぞ」

「……そういえば」

七花がふと、いぶかしげな顔をした。

「死ぬ気の炎つてそれぞれ違うんだろ？ 俺の時といい、何で解つ  
たんだ？」

「どういうことだ、虚刀流」

右衛門左衛門が顔を上げた。

そんな彼に、ツナと七花は死ぬ気の炎のことを説明する。それを  
聞いた右衛門左衛門は、リボーンに顔を向けた。

「確かにそれは、妙だな。鑢七実じゃあるまいし、解るわけがない」

「だよな。何で解ったんだよ」

七花と右衛門左衛門の疑問の声に、リボーンは一言。



「謎だ」

……迷宮入りしてしまった。

真庭忍軍のアジトの一室。かしらである真庭鳳凰にあてがわれた部屋に、一人の男が訪ねていた。

「……ということで、いそぐようにと」

「なるほど。解った。情報操作はもうすんでいる。じきボンゴレはここに来るだろう」

鳳凰がそう言うと、男は薄く笑った。

「期待してますよ、鳳凰さん。白蘭様も貴方を信賴しているのですから」

「信賴？ 利用価値があるの間違いではないのか？」

今度は鳳凰が微笑する番だった。

「心配せずとも裏切りはせぬよ。今の我らは一蓮托生だ。互いの利害が一致している間は、利用されようではないか」

「……ハハン、そうですか」

男は鳳凰に背を向けた。

「なら余計なことは口出ししません。うまくいくことを願ってますよ」

「そちらも、うまくいくといいがな」

鳳凰の言葉に男は反応せず、そのまま部屋を出ていった。

しばらく鳳凰はそのまま腕組みをして椅子に座っていたが、ふと顔を上げた。

「白鷺、おぬしいつまで天井裏に隠れているつもりだ？」

「……れあ？ たてれば？」

言葉になっていない言葉と共に、真庭白鷺が天井から降りてきた。いざと言う時のための抜け穴に隠れていたようだ。一緒に落ちて

きた天井の一部を眺めつつ、鳳凰は「ばれるに決まっておる」とため息をついた。

「おそらく先程の男にもばれておろうな」

「なにのたっあ信自、んーう」

白鷺は残念そうに唸った。

「……で。おぬしは青龍の使いだろう。どうかしたのか？」

「ん？ んう、ああ。報情のらか鳥人と亀海たきてっ帰。さてった来がーアリアヴ」

「そうか。となると、鑓七実もこちらに……」

鳳凰は眉間にしわが寄るのを感じた。

「彼女を封じるための策はすでに練っているが、はたしてうまくいくかどうか……あの技術の威力を知ってなお、少し不安だ」

「よえ凄が力示指のんさ鳳鳳るせさ現再れあ、かういて……」

白鷺は尊敬ともあきれともつかない視線を向けてきた。鳳凰はそれを無視し、しばらく考える。が、すぐ顔を上げた。

「……まあいい。海亀殿と人鳥にはゆっくり休むよう言ってくれ」  
「解了」

白鷺は落ちた天井の一部を拾い上げ、抜け穴へ飛び上がった。穴に入り込み、天井を戻すと白鷺はすぐに去ったようだ。

「……別に扉から出てもよかったのではないか」

思わず呟いた鳳凰だが、すぐに思考を元に戻す。

もうすぐボンゴレが来る。おそらく、所有者達と一緒に。

だがそれがこちらの策略だと見抜ける人間は、あちらにはいないだろう。まさか、自分達が来ることで作戦が完了するなどと思わな

いはずだ。

それでいい。ばれてしまえばそれまでだ。作戦がばれれば、何もかも無意味になってしまう。

でなければ、青龍は何のために

「……馬鹿馬鹿しい」

鳳凰は自身の思考に自嘲の笑みを浮かべた。

「こんな考えは無駄だ。無意味だ。しのびは生きて、死ぬだけだというのに」

けれど、その言葉が自身に言い聞かせているような口調だったことには、気付くことは無かった。

## 第二十四録 作戦会議（後書き）

更新遅くなつて申しわけありませんでした！

夏の暑さゆえか、やる気が出ずに……；；多分次回も遅くなると  
思います。

七花と右衛門左衛門の質問にリボーンが「謎だ」と答えるのは前  
々から書きたかった奴です。ネタ元はお解りの通りリボーンの雪合  
戦話です。

白鷺の逆さ喋りは想像以上にむづかったです。でも書いてて楽し  
かったです。

では次回！

## 第二十五録 前夜

「鳳凰さんと青龍つてさあ、どういう関係なわけ？」

蝙蝠からの唐突な質問に、狂犬は顔を上げた。

鳳凰からボンゴレが動くまで待機と言われ、同じ獣組である蝙蝠と川獺と一室でだらだらと会話をしていると、そんな質問が飛び出たのである。

「いきなり何なのさ？」

「いやさ、なあんか鳳凰さんと青龍つて仲いいなあって思っちゃったからよお。そもそも俺ら、青龍がいた頃よく知らねーし」

「そうそう。俺らまだ餓鬼だったからな」

川獺が同意した。

そういえば飛驒鷹比等の起こした大乱の際、彼らはまだ幼かった。鳳凰や蠅螂でさえまだ十を過ぎたばかりだったし、当時から大人だったと言えるのは海亀ぐらいだろう。

「……もしかしてあんた達、青龍のこと信用してない？」

『うん』

即答だった。いつそ気持ちいいぐらい早かった。

「……当たり前か」

二人からすれば、知らないも同然の人間だ。しのびでなくとも、信用しろというのが無理な話だろう。

「しかし……二人の関係ねえ」

「恋人とか？」

「んなわけ無いでしょ。当時、鳳凰ちゃん十二よ。青龍ちゃんはお

の時二十八だったし」

「今は三十二と十四だけだな」

蝙蝠はきやはきやはと笑った。

「んじゃ、恋人じゃなかったら何だよ」

「姉弟」

狂犬がそう言うのと、蝙蝠と川獺の表情が固まった。

「え……！？」

「義理だけどねえ。青龍の家族つて、あの娘が生まれてすぐ死んじやつてさ、両親と交流あった鳳凰んとこに身を寄せてたの。鳳凰が生まれてからは、あの二人は姉弟として暮らしてた。あの大乱までね」

「奇策士の子猫ちゃんの父親が起こした大乱か」

奇策士、と口にした時、蝙蝠の顔が苦々しげになった。

真庭忍軍は今亡き奇策士に対していい印象を持っていないが、彼は特にそれが強い。奇策士と行動を共にすることが多かったからだろうか。

「大乱の時、裏組は朱雀の暴走により全滅。まあ、裏組の存在を知った飛騨軍の策略でもあったんだけどね。勿論青龍もその時一度死んだ。その時の鳳凰　当時はまだ鳳凰と名乗ってなかったけどの様子は、見てらんなかったわ」

「昔の鳳凰さんつてのは、俺達にや想像できねえけどな」

川獺は頭をかいた。狂犬は、それに少しだけ笑う。

「誰だつて子供の頃つてもんがあるつてことよ。……さて、そろそろかしらね」

すでに向こうが動き出したという報告は受けている。そろそろこちらでも迎撃準備に動いてもいい頃合いだろう。

しかし　と狂犬は顔を曇らせた。

果たしてあの白い男が考えた作戦はうまくいくのだろうか。

冒頭の時系列から、さかのぼること一日前。

「極限必勝！！」

ツナ達にとつては聞き慣れた暑苦しい大声。確かめるまでも無い。笹川了平の声だ。

場所は変わらずディーノの泊まっているホテル。守護者全員に現状を把握させるため、一室に今度はツナの守護者が集まっていた。ランボは邪魔という理由でリボーンが追い出したが。

クロームはいない。未だ彼女は、真庭狂犬に身体を乗っ取られたままだ。ツナ達はその事実をまだ知らないが。

そして一応、雲雀もいる。もしもの時のために、隣にディーノがひかえていた。

もしもの内容は　言うまでもない。

そして更に、リボーンと共に説明を行うため、七花がツナの隣に突っ立っていた。

そしてこういう場面に強いだろうという判断で右衛門左衛門もいる。つまり、合計九人が集まっていた。

そして説明が始まったわけだが　雲雀はすぐさま現状とこれから行うことを飲み込んだが（疑問を七花と右衛門左衛門に尋ねる余裕さえ見せた）、了平はさっぱりだった。

さすが二転三転する話は二転までが限界と豪語する男、七花以上に理解するのに時間がかかってしまった。

二転三転どころか四転五転する話なのだから無理も無いが、それにしても理解するのに半日以上かかるなんて、とツナは驚いた。

獄寺はいらつきがピークに達したし、山本の笑顔は苦笑いに変わったし、雲雀にいたっては居眠りし出してしまった。

七花は啞然としていたし、右衛門左衛門もあきれて何も言えないようだった。

そんな中で表情も変えないリボーンはやはり色々な意味で最強だ、と根気強く説明を続けたツナとディーノは思う。

やはり、彼には一生頭が上がりそうにない。

そしてようやく了平が全てを理解した時には、とうに日が落ちた後だった。

そして、最初の了平の言葉に至る。

その時リボーン以外の全員は（色んな意味で）疲れ果てていて、ぐったりした様子で無言になっていた。

「打倒真庭忍軍！ 打倒真庭鳳凰！！ うおおお！ 極限に燃えてきたぞおー！！」

燃え上がっているのは、当然了平のみだった。

「どうしてたったそれだけのことを理解するのにこんなにも時間がかかるんだろう……」

七花はぼそりと呟いた。声に力が無い。

「不<sup>はやからい</sup>早 早ければ今夜にでも動けたはずが、こんな時間になってしまっってはな……」

右衛門左衛門は表面上はいつも通りである。……けれどやはり、声に力が無かった。

「つたく、こんだけのことを理解すんのに時間潰しやがって……この芝生頭が」

「何だとタコヘッド！」

了平はいつものように大声で応じる。が、獄寺の方にはケンカ腰になる気力など残っていなかった。

「まあ今日は全員が今置かれている現状を理解できたから、それによしとするか」

リボーンはふむ、と一つ頷いた。

「しかし……気になるのは真庭忍軍の目的だな。変体刀はともかく、なぜボンゴリングまで欲しがる……」

「トウリニセツテを手に入れたいんじゃないんスか？」

「いや。連中はそんなのに興味は無いはずだ。真庭鳳凰に会って思



ったが、トゥリニセツテを手に入れて世界を征服しようって連中じやねーと感じたぞ」

リボーンの言葉に、ツナ達は考え込む。一方、七花と右衛門左衛門は顔を見合わせた。

二人は、まだトゥリニセツテのことを知らない。まだ話していないのだ。だから、ツナ達の持つボンゴレリングの意味も知らなかった。

その後、ツナ達は二人にトゥリニセツテのことを話すのだが彼らはまだ知らない。

ボンゴレリングも、変体刀も、実際に求めているのは別の人物だということ。

七実迷っていた。

町中ではない。ホテルの中だ。

デイーノの滞在しているホテルには、実はヴァリアーも泊まっている。無論、七実も例外ではないのだが

「あら？　ここ、さつきも通ったような……」

広いとはいえ構造はさして複雑ではないホテルの中で、ものの見事に迷子になっていた。

天才の数少ない弱点である。

「我ながら自分の方向音痴にはため息が出るわね……はあ」

言葉通りため息をつき、七実は辺りを見渡す。

……実のところ、彼女は最初にいた階から動けていない。つまり、階段にすらたどり着けないのである。

ならエレベーターでと思いきや、それすら見付からない始末。亀にすら追いつけないその歩みが、それに拍車をかけていた。

かつて不承島にいたころ、七花が彼女に対して抱いていた不安の一つは、ここでも健在だった。

そして現在その弱点に振り回されるのは。

「うゝお、おい！ 何やってんだあ！」

ヴァリアー作戦隊長、スペルビ・スクアーロだった。

「あら、スクアーロさん」

「おまえ何でこんなホテルでも迷ってんだよ！ ヴァリアーのアジトでも半日迷うし！」

「すみません、いかんせん方向音痴でして」

「道は」

「覚えてます」

「歩いてる時は」

「……忘れてしまいます」

今度はスクアーロがため息をつく番だった。

「すみません、ご迷惑をおかけして」

「今に始まったことじゃねえだろお」

スクアーロは七実に背を向けた。

「おら、行くぞお」

「はい」

七実はその後を付いていきながら、ふと、前々から気になっていたことを訊いてみた。

「あの、一つよろしいですか？」

「んゝん？」

「スクアーロさんは、どうしてザンザスさんの部下になっているんですか？」

スクアーロの表情が、ほんの少し動いた。

もっとも常人には無表情のままに見えるだろうし、読心術を使える人間でも判断しにくいぐらいに微妙な動きだ。『見稽古』を使える自分だからこそ気付けたのだろう。

七実は歩きながらスクアーロの言葉を待った。しばらくして、彼の唇が動く。

「あいつの怒りに憧れた」

「懂れ……？」

「ああ。あんたなら見てて気付いたろお。あいつの中には常に憤怒が宿っている。何に対しても誰に対しても。知り合いだろうと他人だろうと、あいつはありとあらゆるものに怒りを感じている。俺はそんなあいつに敵わないと悟り、だからこそ付いていくと決めた」

「剣と忠義をささげたというわけですか……」  
なるほど、つまり彼にとってザンザスとは、仕えるべき主君というわけだ。

打算的な感情も利己的な感情でもない。

金に動いたわけでも。

名誉に動いたわけでもない。

理由やそこに込められた感情は違うが 弟が奇策士に仕えた理由によく似ている。

奇策士とがめ。弟が愛した女性。

弟 七花は、彼女の中にある復讐心に惚れ込み、彼女の刀になったのだ。

鑢七花とスペルビ・スクアーロ。

無刀の剣士と隻腕の剣士。

性格や印象、容姿にいたるまで全く違うが この二人はとてもよく似ている。

剣士という生き物は、皆そうなのか。  
なら自分は。

例外にして埒外のこの化物は どうなのだろう。

覚悟も何も無く、命を草のようにむしっていく自分は、一体

「……七実？」

スクアーロの不思議そうな声に、七実是我に返った。

「あ……すみません。考えごとをしていたもので」  
「考えごと？」

「……今回の戦い、私は戦えないのではないのでしょうか」

七実は何となく感じていたことを口にした。

七実の身体が弱い。それは、七実の数少ない弱点の一つだ。

本来死んでもおかしくない身体だ。こうして歩いたり話したりできること自体奇跡のようなものである。

それは彼女の天才性ゆえになしとげられた状態だが　しかし、その天才性でも補いきれないものもある。

例えば、死ぬ気の炎。

一度見れば大抵、二度見れば磐石にあらゆる技や能力を使いこなせるようになる七実だが、唯一、死ぬ気の炎だけは使うことができなかった。

第一に体力の無さがある。

死ぬ気の炎は生命力を炎に還元したようなものであり、体力の少ない七実にはリングを使いこなせるはずもなかった。

第二に、覚悟だ。

彼女には覚悟が解らない。

なぜなら彼女は覚悟も無く行動し、覚悟も無く技を習得し、覚悟も無く戦い、覚悟も無く人を殺せるのだから。

一年かけて人間らしさを手に入れた七花とは違う。七実の人間らしさを持つ前に一度死んでしまった。

そんな彼女に、覚悟を炎に変えるイメージなどできるはずもない。七花や他の変体刀所有者にはできて。

自分にはできない。

悔しいわけではないが、思うところが無いわけでもなかった。

「んなもん俺が知るか。それは、あんたが考えなきゃならねーことだろお」

「スクアーロさん……」

「身体を気遣いてーなら使おうと思うな。身体を強制的に活性化させるっつー悪刀『鏢』を使わねーのも、それが理由だろお」

「……」

「もし使いたいなら……考えな。あんたは何で戦っているかを」  
何という無茶な要求だろう。

覚悟が何なのか解らないのに、何を考えればいいのだ。  
自分は弟と違うのに。

弟。

もし私が覚悟を得たら、七花は

七実はそつと目を閉じ、ため息をついた。

本当によく似合う、ため息を。

それぞれが様々な思いを抱き、それぞれが様々な思惑を抱き、時  
間軸は、冒頭に戻る。

しかし、それはまだ、始まりに過ぎないのであった。

## 第二十五録 前夜（後書き）

一ヶ月ほったらしにしてすみませんでした……

執筆スピードもつと上げたいです……書く意欲はあるんですけどね、いや本当に。

次回から戦いが始まります。一人ぐらいは刀語サイドが死ぬ気の炎使っかなーと予想してます（予想かよ！）  
では次回！

## 第二十六録 侵入

真庭忍軍のアジトとおぼしき建物があるのは、表向きはある資産家の持っている土地の上に立った大きな屋敷だった。

「何て言うか、どこからこんな建てる資金得たんだろうな」

屋敷から離れた物陰に隠れながら、七花は素朴な疑問をツナに投げかけた。

服装は、リボーンが用意した現代の洋服ではない。もとの世界ではいていた袴と、十二単を二重に重ねたような豪華な着物である。

こっちの方が気合いが入る ということ、引つ張り出してきたのだ。

「真庭忍軍は、どうやら素性はあかさずに裏の仕事を請け負っていたようだぞ。あと、誰かまでは解らなかったが、どうも協力者もあるようだ」

「協力者ね……」

リボーンの言葉に、七花はふむ、と唸る。

元の世界では文字通り孤軍だったのに

「それにしても、何だか静かですね」

ツナは不思議そうな顔をした。

「もしかして、もうバレてたり……」

「かもな」

七花が即答すると、ツナは青い顔をした。どうやら冗談で言ったようだ。

「で、でも、大丈夫ですよ」

「いや、俺に聞かれても……って、ん？」

七花は耳に付けた通信機からノイズが流れていることに気が付い

た。使い方はちゃんと理解済みだ。

しかし、和装で現代の機器を使っている姿は、なかなかシユールな画である。

「なあ、誰か通信入れてきてんじゃねえか？」

「え？ あ、本当だ……でもうまく聞き取れないや」

ツナは七花より大きい通信機を押さえ、眉をひそめた。

「何で？」

「この辺りに通信を阻害する電波が流れてるのかもしれないな」  
リボーンの言葉に、七花とツナは顔を見合わせる。

「どうしよう、獄寺君や山本達と連絡取れないよ」

「大丈夫だって綱吉」

七花はツナの肩を軽く叩いた。

「あいつらは強いし、そうそうやられたりしねえよ　それより」

七花は懷から、匣を取り出した。

「どうやら……やっぱりばれてたようだぜ」

「えー？」

ツナは驚きの声を上げる。同時に

そでの無いしのび装束を着、全身に鎖を巻いた十数人の男達が現れた。

「くそつ。やっぱり連絡が付かねえ」

獄寺は小さく悪態をついた。

建物内に侵入はできたものの、電波障害でも起こしたのかノイズばかりが通信機に入ってくる。

侵入した後建物の一部を爆破し、混乱に乗じて指示を出して襲撃する手はずなのに、これでは



「もともとそういう機器をさまたげる装備をこの建物に仕込んであるのか、または侵入がばれたか……前者であってほしいな」

共に侵入していた右衛門左衛門が呟いた。

建物に侵入できたのは、彼の功績と言える。しのび時代の経験により、獄寺をここまでみちびいたのだから。

「不止<sup>とまらず</sup>。どのみちこのまま進まないわけにはいかないだろう。行くぞ」

「言われなくても」

獄寺は右衛門左衛門に噛み付きかけ やめた。

それどころかダイナマイトを取り出し、振り返った。右衛門左衛門もまた、炎刀を抜いて後ろに向ける。

二人は後方に敵が現れたことに気が付いたのだ。同時に、ここまでの接近を許してしまったことに少し驚く。

はたして 予想通りの服装をした男が、そこにいた。

そでの無いしのび装束に、全身に巻いた鎖。

真庭忍軍 だ。

しかも一人のところを見ると、おそらくは十二頭領の一人

獄寺と右衛門左衛門は身を引き締めた。

二人がかりなら倒せなくはないだろうが、しかし相手がどんな忍法を使うか解らない以上、油断はできない

「ぜつらもてせら乗名 だ鷺白庭真、人ーが領頭二十軍忍庭真はれお」

『……』

しかし。

その緊張はすぐに抜けることになる。

「……あー、えっと」

獄寺はダイナマイトを構えたまま、右衛門左衛門を見やった。

「あんた、あいつの言ったこと解ったか？」

「……不解<sup>わからず</sup>」

右衛門左衛門は銃口を男に向けたまま首を横に振った。

「しかし……そうか、あいつは真庭白鷺だな」

「解ったのかよ!？」

「言葉自体はほとんど解らなかった。しかし、ああいう喋り方をするしのびが真庭忍軍にしていると聞いていたからな」

右衛門左衛門は顎で男　真庭白鷺を指した。

「確かあれは」

「まさか宇宙語か!？」

「……は？」

言葉を遮り、目を輝かせた獄寺に、右衛門左衛門は首を傾げた。

獄寺は、科学で証明できない、いわゆる不思議現象に強い興味を持っている。

頭のいい人間がそういうたぐいのものに傾倒するのはよくある話だが　獄寺がそれだと知らない右衛門左衛門からしてみれば、彼の反応は奇異にしか見えなかった。

たとえ知っていても、奇異にしか見えなだらうけど。

「ついこ、だん何、な」

白鷺まで引いてしまった。

真庭鳳凰以外は人格破綻者ぞろいの真庭忍軍の人間から見ても、かなり異様な様子らしい。

無論、獄寺はそんなことはみじんも気付いていないが。

「かいなあま、ま。ぜいなせか行は先らかここ」

「火星語か、それとも金星語か……」

「よけ聞」

白鷺の顔が歪められた。獄寺の反応を見れば、むべなるかなというところだが。

「奴な変　いいあま。かるれらいで余裕、もて見をれこ？」

白鷺はす、と後ろに下がった。逃げるつもりなのかと獄寺と右衛門左衛門が身を乗り出した時だった。

ドガ  
ア  
ア  
ア  
ア  
ア  
ア  
ア  
ア  
ア  
ア  
ア  
ア  
ツ

白鷺が先程までいた場所に一番近い壁が、破壊された。

廊下に向かつて飛んでくる破片から自身のかばい、後ろに飛びのく獄寺と右衛門左衛門。その時、奇妙な音を聞いた。

キュンキュン、という、機械のような音を。

「いの音……！」

「……？ 何の音だ？」

獄寺は驚愕のあまり言葉を失うが、右衛門左衛門は首を傾げるだけにとどまる。

「当たり前だ。右衛門左衛門はその音を知らないが、獄寺は知っている。」

それは、もう聞くことは無いだろうと思っていた音！

やがて、舞っていた砂塵が消えていく。そこから現れたのは、瓦礫の山と。

一体の巨人だつた。

それこそ鑪七花より、そして驚くことに校倉必より大きな影。

賊刀『鎧』より巨大な巨人は、獄寺と右衛門左衛門を圧迫するかのよう

その巨大な巨体と風貌は間違いないが無い。

「モスカ!？」

獄寺は叫ぶようにその巨人の名を呼んだ。

「獄寺隼人……おまえはあれを知っているのか？」

右衛門左衛門の質問に、獄寺は頷く。驚きのあまり、自然ゆっくりな動きになった。

「モスカッ、ロボット　おまえらに解りやすく言うなら、か  
らくり人形だ。凶悪な兵器を内蔵した、一応、対人兵器だ」

「不笑<sup>わらわず</sup>。全く笑えない話だな」

右衛門左衛門は巨人　モス力を見上げた。

一方獄寺は、疑問を感じて顔をしかめた。

おかしい。どうして真庭忍軍はモス力を持っている。しかもこれは、未来で使われていたタイプではないか！

どうして真庭忍軍が使っているんだ！！

「ろたつ言。てっいなせま進」

白鷺はにい、と笑った。

「ろでん遊でれそくらばし」

言下と、共に

ゴウンッ

巨人は動き出した。

山本、了平、錆の三人は、屋敷の外から待機していた面々の中では、一番屋敷の近くにいた。

屋敷から見て死角になる物陰に隠れつつ、爆発が起こるのを待つ。

「……極限にまだむぐっ」

待ちきれなくて叫びかけた了平の口を、山本は慌てて塞いだ。

「先輩静かに。バレるんで」

「……先程からじっとしておらんな。あまり忍耐強くないのでうざるか？」

錆が迷惑そうに了平を見た。

「待つのは苦手なのだ。カップラーメンが完成する三分も待てんのでな」

「かつぶ……？　何でござるか、それは」

あいにく、その例えは錆に通用しなかった。

時代の差である。

「けど……確かに遅いよな。どうしたんだろう、あの二人」

山本は屋敷をうかがい見た。

「右衛門左衛門殿がいる以上、大事無いと思うが、確かに気になるでござるな」

「靖さんは右衛門左衛門さんのこと、前々から知ってるんすか？」

「ああ。同じ幕府の人間として、何度か会ったことがあるのでござるよ」

「へえ……」

二人は幕府の人間だったのか。だったら七花さんなども山本が思っている時だった。

ドガ  
ア  
ア  
ア  
ア  
ア  
ア  
ア  
ア  
ア  
ア  
ア  
ア  
ツ

突然二階部分の壁が、内側から爆発した。

「おお、タコヘッド達がやったのか！」

了平が歓声を上げるが、靖はふと、いぶかしげな顔をした。

「いや、待て。二人は、最上階にて爆発を起こす手はずだ。たはずでござる。まだ最上階には程遠い」

三人は背後に殺気を感じて飛び退いた。三人がいたちょうどその場所に、大きな火柱が地面から吹き出す。

「ふうん、やるじゃない」

「ま、そうでなきゃ面白くないわ。ああ、あんた達三人とは初めてだっけ」

火柱が収まった後、三人がいた物陰より更に奥から、一人の少女が現れた。

そでの無いしのび装束に全身に巻いた鎖。露出した肌にはでたらめに黒い刺青が彫られている。それゆえ解りにくいのが、間違い無い。「クローム！」

山本は思わず叫んだ。彼女が今、全く別の誰かになっていることは解っていても、無事と解っただけで安心できた。

しかし、その安心を吹き飛ばすほどに、クローム 否、真庭狂犬は敵意を剥き出しにしていた。

「初めまして！ 真庭忍軍十二頭領が一人、真庭狂犬ちゃんよん！」  
クロームの姿の狂犬は、クロームの幻術を使い襲いかかる。

## 第二十六録 侵入（後書き）

結局死ぬ気の炎使わなかった……！！……展開的に盛り込めませんでした……

次回こそ書けたらいいんですが……でもその前に残りの変体刀所有者とヴァリアーの面々書きたいです。

最近ジョットと否定姫サイド書いてませんが、忘れてるわけでは  
ありませんよ、けして！

では次回！

## 第二十七録 戦闘

死ぬ気の炎。簡単に言えば、体力を炎に変換した力だ。

刀に宿すことも、そのまま飛ばすことも可能性である。飛び道具に炎を宿すこともできるらしい。

しかし、銃の場合は少し勝手が違うようだ。

銃は、そのものが殺傷能力を持つわけではなく、銃弾を放ってこそ武器となりえる。勿論銃を鈍器として使わねばならない場面もあるだろうが、基本は飛び道具だ。

銃という媒介を通してこそ、弾は威力を発揮する。その媒介を必要とする性質は、死ぬ気の炎を付加するにはむしろ邪魔になるのだ。

「だから、銃弾に死ぬ気の炎を宿すためには、これが必要だ」

リボーンから手渡された弾に、右衛門左衛門は首を傾げた。

「これは？」

「死ぬ気弾つつー、ボンゴレに伝わる弾の改良版だぞ」

リボーンはにつ、と笑った。

「おめーの武器で死ぬ気の炎を使うには、死ぬ気の炎をためる性質を持つ弾が必要でな。だから、戦闘の際にはこれを使え」

「……いいのか？」

右衛門左衛門はリボーンを見下ろし、疑問を口にした。

「私にこれを渡しても。指環のこといい、裏切るやもしれない人間にこんなものを渡すのは、少し不用心ではないのか？」

「おめー、ディーノと同盟組んでんだろ」

「組んでいる。が、それは口約束のようなものだ。絶対ではない」

「……俺は」

リボーンの笑みが深まった。それは……悪い笑みだった。



何だか、かつての主を思い起こされるのだが。「おめーは真庭忍軍と浅からぬ因縁があると見ているが？　だからこそ、俺達と一緒にいる」

「……」

「それにな、右衛門左衛門」

リボーンは笑みを消さないまま、帽子のつばをくい、と下ろした。「そういうことを言う奴は、たいがい裏切らねーもんだぞ」

ぱん。

乾いた、少し間の抜けた音。炎刀『銃』が発した音だ。しかし、いつもよりずっと大きな音である。

死ぬ気の炎を宿していたからか。

「嵐属性の炎……」

獄寺が、右衛門左衛門の指にはまったリングから出ている炎を見て呟いた。

「あんたも嵐の炎かよ」

「……あんたもということとは、おまえのその指環も嵐属性か」

右衛門左衛門は銃を下ろさずそう言った。

死ぬ気の炎をまとった弾は、モスカとか言う巨人の頭に命中した。嵐属性というのは死ぬ気の炎の中でも攻撃に適した炎らしいが、どうだろう、先程の攻撃は効いたのだろうか。

ゴウンゴウンッ

先程も聞いた稼働音に、右衛門左衛門は反射的に後ろに飛び退いた。

その判断は正しかったらしく、さっきまで右衛門左衛門がいた場

所をモスカの腕が横切っていく。

ドガアアアアアアアアアアアアアアアアッ

腕に殴られた壁が、盛大に破壊音を上げた。

ぽっかり空いて下界を覗かせる穴に、右衛門左衛門は戦慄する。もし避けていなければ、自分は壁ごと殴り飛ばされていたに違いがない。

しかも　モスカの方には、ほとんど損傷を与えられなかった。頭部はあまり頑丈ではないのではないかという読みは当たったよううで、一応頭の半分は吹っ飛んでいる。しかし、モスカは問題無く動いていた。

「右衛門左衛門、代われ！」

獄寺の声に、右衛門左衛門は身を退いた。

代わりに前に出た獄寺は、腕に武器を装着していた。形から見て、おそらく飛び道具だろう。

「喰らえ！」

獄寺は腕の武器をモスカに向け、嵐の炎を発射させた。使い慣れているせいか、それとも別の要因か、獄寺の炎は右衛門左衛門より大きい。それを、モスカは腹に受けた。

直撃だ。何かが溶ける、シュー、という音が耳に届く。  
「やったか……？」

右衛門左衛門は近寄ろうとし、しかしすぐ足を止めた。

「獄寺隼人！」

「あ？……ぐおっ」

片眉を上げて振り返った獄寺が、モスカの痛烈な一撃を喰らわされた。

破壊されたはずの腹から死ぬ気の炎をまとった分銅が現れ、彼の横腹を叩き付けたのだ。

当然獄寺は吹っ飛ばされ、近くの壁にぶつかる。獄寺はずるずる

と座り込み、動かなくなってしまった。

右衛門左衛門は更に後方に下がりながら炎刀をモスカに向けて構えた。モスカの腹は確かに溶けてしまっている。だが　どうやら深部には届かなかつたらしい。無事に動いているのがいい証拠だ。

いや、全く効いていないわけでも無いようだ。先程に比べると、動きは鈍っている。だが

「ゼイイが方ため諦うも」

廊下の奥で、白鷺がにやにや笑った。

言っていることはいまいち解らないが……諦めろというむねの言葉だったように思う。

確かに、この状況は非常にまずい。

一人なら逃げていただろう。元忍者として、逃げることは別に恥だと思わない。

ただ……今回は獄寺がいる。獄寺を残していくのは色々とまずいだろう。

右衛門左衛門はため息をついた。

「不諦。あきいめずここで退くことができたなら　楽なんだがな」

右衛門左衛門は両手の炎刀の引金を引いた。

ぱん

ぱんぱんぱん。

モスカの頭に一発。腹に三発。

全て　当たった。

先程傷付けられた、破損部分に。

「……！」

「違うところでは効かなかつたろうがな。先程傷付けた箇所はどうかな？」

右衛門左衛門が与えた頭の破損部分。

獄寺が与えた腹の大破損。

そこを突けば、この巨人を止めることができるのではないのだからか。

「……ふむ。頑丈そうだったが、何とかあったか」

右衛門左衛門は炎刀を下ろした。

「不逃。<sup>にかさず</sup>真庭白鷺、貴様には色々と言いたいことが」

「よなう思とたつ勝」

白鷺は 笑ったままだった。

にやにやと、余裕ありげに。

「なたつまちれ壊はカスモにか確。ぜいなてつ言はといなか動、どけ？」

ゴウンッ……

モスカの起動音に、右衛門左衛門ははっと顔を上げた。

完全に壊れたはずのモスカが、まだ動いている……！？

「ろだ充分、がただけだ回一とあはのるけ動」

白鷺は一步下がった。

モスカから離れるように。

「えまじん飛っ吹」

モスカの腹から、最後の攻撃が放たれた。

最初に動いたのは、鏑だった。

「彼女は、殺してはならないのでござろう」

狂犬との距離を詰め、鏑は刀ではなく、足を振り上げる。

「薄刀は脆い刀でござる 峰打ちはできぬが、拙者自身が体術を使えばよい」

狂犬の横腹に、鏑の回し蹴りが炸裂した。  
が。

「何……!？」

鑄は目を見開いた。

当たり前だ。目の前にいた狂犬が、突然消えてしまったのだから。

「気を付けてください、鑄さん！ クロームは幻術を使っス！」

「幻術……では今のも」

「そういうこと」

狂犬は 少し離れた場所に生えた、木の上にいた。

「鑄白兵ちゃん、あたしと相対する時は見るもの全てを疑った方がいいわよ。今のあたしは、人を惑わすことができるんだからさ！」

狂犬の指にはまったボンゴリングに霧の炎が灯った。

「あたしの幻覚世界で苦しんで死にな！」

言下と共に、山本と鑄の足元から複数の火柱が上がった。

「あ、あづっ!!」

「っ……!!」

二人はたまらず後ろに下がった。その様子を見て、狂犬はからから笑う。

「熱いのは嫌い？ だったら……これはどう!？」

狂犬が三叉槍を振った途端、辺りの木々が凍り付いた。

同時に一気に下がる体感温度に、二人は今度は動きを止めてしま  
う。

「これが幻覚でござるか……？ こんな、こと……」

鑄は呆然とした声で呟いた。

「信じられない？ なら信じられないまま死にな！」

狂犬が三叉槍で鑄を指すと、氷の矢が彼を襲った。

「鑄さん！」

山本は刀を抜いて鑄に近付こうとした。が、どうやらいらぬ心配  
だったようである。

ズバババババツ

全ての氷の矢が　一瞬にして粉々に砕けて落ちた。

「……！」

「見くびらないでもらいたいでござるな」

錆は、いつの間にか薄刀『針』を抜いていた。

刃に、雨属性の死ぬ気の炎を宿して。

「錆びた刀とはいえ、この程度の攻撃、しのげぬわけがないでござる」

その華奢な身体からあふれ出す威圧に、山本はぞっとした。

一体あの細い、自分よりずっと小柄な身体のどこから、あんな威圧感を出せるというのだろう。

どこが錆びた刀だ。

立派な　真剣だ。

「それに　真庭狂犬とやら。相手にすべきは拙者だけではないでござろう」

「っ……！」

錆の言葉で気付いたのだろう。狂犬は振り返った。

狂犬の後方。いつの間にも移動したのだろうか、了平が彼女の背後に回っていた。

匣を開匣をさせていたらしい、足には死ぬ気の炎を噴出させ、飛行して狂犬に迫る。

「極限に目を覚ませ、クローム！」

了平はクロームに向かって手を伸ばした。それに対し、狂犬は嘲笑を浮かべる。

「狂犬だっつつてんだろーが！」

狂犬は了平の方を向く形で、背後から倒れ込んだ。

当然木から落ちるが、狂犬は軽やかに空中で一回二回と回転し、地面に着地する。

了平は空中で急停止し、再び狂犬に迫ろうとした。  
が。

「！？　ぬっ」

了平はなぜか、急上昇した。間髪入れず、彼が先程までいた場所に何かが通り過ぎていく。

突き刺さったそれを見ると、何と棒手裏剣だった。あきらかに、手で投げるより速い。

「ちっ。避けられちまったか。まあ別に？　今のは挨拶代わりだからいいんだけどよ。いやいや負け惜しみとかじゃないからな」

そう言っただけで現れたのは　真庭蝙蝠だった。裂けそうな口元を更につり上げながら、木の上から了平を見つめている。

「極限に誰だ、貴様は！」

了平が叫んだ。そういえば、彼と蝙蝠は初対面だ。

「俺？　俺様は真庭忍軍十二頭領が一人、真庭蝙蝠様だ。以後お見知りおきをとどこか？　笹川了平」

蝙蝠はきやはきやはと、甲高い笑い声を上げた。

「狂犬、こいつは俺に任せな。おまえはそっちの二人、相手してくれ」

「言われなくてもそのつもりよっ」

狂犬はにい、と笑った。蝙蝠もまた、笑みを深める。

「きやはきやは、じゃあ対戦相手も決まったことだし、いざ尋常に勝負つてとこかね　！」

蝙蝠はそう言っただけで、なぜか自分の口に手を突っ込んだ。

驚いて固まる山本、了平、錆を尻目に、蝙蝠の腕は口の中へ消えていく。

肩口まで飲み込んだところで（手は胃まで届いているのではないかと思われた）、今度はその腕を引き抜き始める。

唾液まみれになって現れる腕　しかし、現れたのは腕だけではなかった。

腕の先端である手には、一本の刀が握られていたのだ。

「かはっ」

ようやく全容が現れた刀には　鞘が無かった。

鍔も無ければ　反りも無い。

完全な直刀

「聞いて驚け、見て驚け　これが四季崎記紀が完成形変体刀十二本が一本　絶刀『鉋』だ」  
いや。

どう考えてもおまえの体質が一番びっくりだ。  
鑢七花が真庭蝙蝠と相対した時と同じ感想を、くしくも山本達三人は抱いた。

ツナは立ち尽くしていた。

目の前にいるのは七花だ。匣から飛び出した武器を手足にまとい、こちらに背を向けて立っている。

足元には、そでの無いしのび装束を着込み、太い鎖を全身に巻いた男達が倒れていた。彼らはぴくりともしない

「……何で」

ツナの呟くような声をひろったのか、七花はくるりと振り返った。  
いつもの、のんきそうな顔をして。

「綱吉？　どうかしたか？」

「どうしたって……」

ツナは七花を見、足元のそれらを見、声を張り上げた。

「何も、何も殺すこと無いじゃないですか……！　何で、何で！」  
そう。

真庭忍軍のしのびとおぼしき彼らは、すでにこと切れていた。

七花の手にかかって。

「確かに、この人達は俺達を攻撃してきました！　でも、ここまでする必要は無かったでしょう！？」

「綱吉　」

「何で殺したんですか？　何もそこまでする必要は無かったんじゃないんですか？　殺す必要はあったんですか！？」



「綱吉、おい」

「こんなこと、こんなこと　！」

「おい！」

突然七花が出した大声に、ツナはびっくりと身体を震わせた。

「……あのな、綱吉。多分こいつらは、真庭青龍の忍法で生き返った連中だ。一回死んでるんだよ。ただ元の状態に戻っただけだ」

「でも　だつて　」

「……ならさ」

七花は、珍しく言葉を選んでいるようだった。

愚直な男が、珍しく。

「例えば、そうだな。綱吉は、狂犬に身体を乗っ取られたクローム髑髏を助けたいんだよな」

「……はい」

「そのためには、狂犬を倒さなければならぬよな」

「はい。でも、それがどうか　」

「それは狂犬を殺すことにならないか？」

七花の言葉に、ツナは固まってしまった。

「え、それは……だつて……」

狂犬は刺青が本体で。

その刺青はクロームの身体に刻まれていて。

クロームを助けるためには刺青を攻撃しなければならぬ。

その時狂犬は

狂犬、は？

「なあ、綱吉。俺は今、こいつらを殺した。虚刀流を使って、斬り殺した。でも、それって、狂犬に対してやろうとしていることと同じだろ？」

「同じって……」

「俺が狂犬に対して使おうとしている奥義は、その気になればクロ

「ム體共々斬り殺せる殺人術だ。それを狂犬にだけ使うという、それだけの話なんだ」

「……」

「綱吉。一体どうしてそこまで殺すことをためらうんだ？」

その言葉に ツナは答えられない。

どうしてそれに対して反論しないのか。

どうして言葉がでてこないのか。

どうして殺すことをためらうのか？ 人が死ぬのが嫌だからに決まっている。

そう言えばいい。なのに、どうして何も言えないんだ。

「それとも綱吉」

七花は無表情で 視線だけを鋭くして、ツナに問うた。  
残酷過ぎる、質問を。

「狂犬みたいな、人なのかどうかがいまいな奴は殺してもいいのか？」

「っ……！」

ツナは絶句した。

言葉が出ない。反論どころか、単語一つをつむぎ出すこともできない。

「あ、うあ……」

息が苦しい。心臓の鼓動が異様に速い。  
どうしてこんなに動揺してるんだろう。

反論できるはずだろう。だって、今までそうやって戦ってきたんだから。

戦って……守ってきて……

『だから殺したの？』

突然、彼我木輪廻に言われた言葉を思い出した。  
殺したのかと。だから殺したのかと。

白蘭を、殺したのかと。

「うっ……」

自分は何がしたいんだ。

何のために戦っているんだ。

何で、俺は

「！ 綱吉っ」

「えっ……」

七花が張り上げた声に、ツナは我に返った。

同時に、七花により地面に伏せさせられる。

それに半瞬遅れて、二人の頭上を何が通り過ぎていった。

「な、何……！？」

ツナは上体を上げ、辺りを見渡す。そして、遠くに一つの人影を見付けた。

そでの無いしのび装束。

全身に巻いた太い鎖。

それらで隠しきれないほどに妖艶な雰囲気をもった、女だった。

「真庭忍軍十二頭領が一人 真庭鴛鴦。行くよ」

その手に蛇のごとく動く鞭を持って、真庭鴛鴦は二人に襲いかかる。

## 第二十七録 戦闘（後書き）

遅れてすみませんでしたあ！！

約一ヶ月ほったらかし……申しわけ無いです；；

今回右衛門左衛門と鑄の死ぬ気の炎を出しました。

鑄が雨属性なのはすぐ決まりましたが、右衛門左衛門はけっこう悩みました。構想段階では、七花と死ぬ気の炎属性逆だったし……

そしてようやく鴛鴦さん登場です。出てない頭領はあと人鳥だけです。

……だけですよね？（知るか  
では次回！

## 第二十八録 各人の戦い

「あーあ、先に行っちゃったねえ、あの黒髪の坊や」

迷彩は千刀『？』の一本を持って肩をすくめた。

辺りには真庭忍軍のしのびらしき者達が倒れ伏している。迷彩が倒したものだ。

とはいえ、彼女一人の功績ではない。

「あ？……そっいゃ、あの黒髪の坊主どこ行っただ？」

宇練が今気付いたように（実際そうだろう）辺りを見渡した。

背後を取られないためだろうか、背を建物の壁に預けている。

居合い抜きというのは背後に弱い性質であるため、その対策だろう。

「敵がいなくなったと解ると、さっさと戻っちゃったよ。自由だねえ、あの子」

迷彩が言っと、銀閣は片眉を上げた。

「別に自分ができるとは思わねえけどよお、もうちょい協調性を持てないもんかね」

「言っても無駄だと思うけど。それより、さっきの爆発が気になるな」

視線を向こう側に向け、迷彩は片目だけ半眼にした。ここはどうも離れに当たらしく、本館であろう館からは少し離れている。

「あそこから、聞こえたように思うんだがね」

「獄寺って坊主と右衛門左衛門っておにちゃんが起こした爆発にしては、いささか早かったな」

銀閣が呟くようにぼそと言った。

「迷彩さんよ、俺達も行っただ方がいいんじゃないのか？」

「そうだね　ん？」

迷彩は頷きかけ、ふと気配を感じて顔を上げた。

一瞬新手かとも思ったが、違った。

「何だ、校倉さんにスクアーロって坊やじゃないか」

「誰が坊やだあ！」

迷彩の言葉に真っ先に反応したのはスクアーロだった。

どうも、坊や呼びが気に入らなかったらしい。

「俺はそう呼ばれる歳じゃねえぞお！」

「あたしから見たらまだまだ坊やだよ、君は。勿論、君の主であるザンザスって子もね」

我ながら年齢不詳な台詞だ、と迷彩は内心で苦笑する。しかし事実なのでしょうがない。

「ところで、あんたらもさっきの爆発のところに行くのかい？」

「ああ。おまえらも行くか？」

校倉が親指で向こうを指した。すでに賊刀『鎧』を着用しており、顔は見えない。

「……ところで、さっきから気になってたんだが、雲雀恭弥は」

「あの坊やならさっさと行っちゃったよ」

「……やっぱりな」

スクアーロはため息をついた。

どうやらあの少年がどういう性格か、よく知っているようである。

「しかし……一体何が起きてんのかね」

銀閣の眩きに、全員が思わず爆発があつた方を見た。

爆発の音を、右衛門左衛門は確かに聞いた。

けれど　何ともない。

爆音と共にくるはずの衝撃が、無い。

「……？」

右衛門左衛門は思わず閉じていた目を開けた。そして目の前にあるものに驚きの声を上げる。

「これは……！」

それは、言うなれば浮かぶ『障壁』だった。

円形の、骨をかたどった外枠に、赤い炎の薄い防御壁を持つそれは、右衛門左衛門を囲むように三つ浮いていた。

赤い炎　おそらく、嵐属性の死ぬ気の炎だろう。

ということは。

「つけ。てめーは一応味方だからな　戦力が減るのは痛えだろ」

「獄寺隼人……」

やはり、これは彼の仕業らしい。いつの間にか起きていた獄寺は、かすれ声ながらも悪態をついた。

「ちつ。一体何だつてんだ。おい、真庭白鷺！」

獄寺はきつ、と、白鷺がいた方を睨む。

しかし。

視線の先に、真庭白鷺はいなかった。

「……」

「……」

無言になる二人。目の前にあるのは、もう動かなくなったモスカ一体のみ。

「に、逃げやがった！」

「……はあ」

憤る獄寺に対し、何となく予想がついていた右衛門左衛門はため息をついた。

「奴は忍者だからな、逃げることにためらいは無いだろう」

「卑怯じゃねーか、あのやろー！」

「しのびに卑怯がどうのこうの言われてもな……」

元忍者の右衛門左衛門は、何とも言えない気分になった。

「しかし……不遮<sup>ふくせう</sup>。随分見通しがよくなったな」

壁が無くなり、外が見えるようになってしまった屋敷に、右衛門

左衛門はやれやれとばかりに首を振った。

「今回の襲撃は完全に失敗だな。いったん退いた方がいい」

「てめーに言われなくても解ってるっての！」

獄寺はそう言っ、ふと、表情を変えた。

「おい、あれ……」

「ん？」

右衛門左衛門は獄寺に示された方を見た。そして、目を丸くする。群生していた木々が、幾つも薙ぎ倒されている。

明らかな戦闘跡を見、右衛門左衛門は一つの結論に至った。

「あそこで確か、錆白兵達が待機していたはずじゃないか？」

「何っ！？」

獄寺ははっとしたような顔をした。

「近くにはいねえ……まさか、どこかで戦ってたのか！？」

そして飛び降りようとして、ためらう素振りを見せる。

無理も無い。二階とはいえ、一つの階がかなり高いので考えもなく飛び降りれば骨折はまぬがれないだろう。

一般的な話だが。

「先に行くぞ」

「は？ っておい！」

躊躇する獄寺を尻目に、右衛門左衛門は二回から飛び降りた。

重力に逆らうことなく落ち、そして軽やかに地面に降り立つ。右

衛門左衛門からしてみれば元しのびとしての一般教養、獄寺からしてみれば人間離れた、まさに離れ業だった。

「て、てめえ……」

「ん？ どうした獄寺隼人。降りてこないのか」

「俺にそんな軽業師みたいな真似できるかー！」

圧倒的な身体能力の差を見せつけられ、獄寺は絶叫したのだった。



「どうしちゃったのさ、雨の守護者ちゃん、錆白兵ちゃん！ 逃げ  
てばかりねえ！！」

狂犬は笑いながら岩石の雨を降らした。

否、この岩石は全て幻覚だ。実際の岩ではない。

しかし当たれば、ダメージを受けるのは必至だ。なにせ、死ぬ気  
の炎を帯びているのである。

「う、く、おっ……」

山本はぎりぎりで、それこそ紙一重でそれらを避けていた。

一方錆は余裕を残すような動作で避けているが 表情はかんば  
しくない。進めないのは、彼とて同じなのだ。

進めない。狂犬は、自分のところへ来るための進路を塞ぐように  
して岩石を降らしているのだ。

こちらが刀という接近戦用の武器であるのがまずい。遠い場所に  
いる人間を攻撃することなど不可能だ。

刀には間合いがある。その間合いに相手が走らなければ斬ること  
はできない。

時雨蒼燕流唯一の飛び技である『遣らずの雨』ならまた話は別だ  
ろうが、しかし刀を落とすだけの隙が、今あるかどうか。

それに、狂犬はクロームの記憶を読んでいる。クロームは時雨蒼  
燕流を知っているから対処されないと制限らないだろう。いや、ど  
ちらにせよ身体がクロームである以上、傷付けるつもりは無い。

完全に 手詰まりだ。

「やっかいな相手でござるな  
しかし。」

かつて剣聖と呼ばれたこの男には、距離など関係無かったらしい。

「だが、この程度で拙者の動きを止めたと思うのは、早計でござる」  
錆は、手にした薄刀『針』を振った。

目の前には誰もいない。

目の前には何も無い。

なのに、刀を振り下ろした。

「速遅剣」

山本は信じられない光景を間のあたりにした。

刀の間合いが、伸びた。

まるで刃渡りが伸びたように見えた。そして、もしかしたら実際そうだったのかもしれない。

なぜなら 狂犬の隣の地面に、刀傷が刻まれていたのだから。

「……っ！」

狂犬の顔から血の気が引く。同時に、岩の雨もやんだ。

「いやしくも、一時は日本最強の称号をたまわった拙者が、距離など 間合いなど、選ぶと思ったか」

錆は、日本最強の墮剣士は、傲慢とも言える口調で言った。

「みくびってもらっては困る。拙者はこの程度の距離を距離とは言わない。拙者の間合いは、目に映る風景全てでござる」

ぞくり、と、山本の背筋が震えた。

この人にとって、間合いなどあっても無くても同じなのだ。

この人にとって、間合いは無限なのだ！

「いい加減こうやって逃げるのも飽いた。そろそろ決着とまいろう」

錆は刀を構え直した。

一分の隙も無いたたずまいで。

「拙者にときめいてもらうでござる」

「抱腹絶刀！」

大上段からの斬り付けを、了平は後ろに退くことで回避した。

「きやはきやは、やるじゃねえか笹川了平！ ま、でなきゃ面白くねえけどな」

「ふん！ その程度の攻撃、俺には極限止まって見えるぞ！」

「言っねえ。そうこなくっちゃな」

蝙蝠は笑って、息を吸い込んだ。

「っ……!？」

了平は目を見開いた。

当たり前だ、目の前の男の胸が、息を吸い込むと同時に膨らんだのだから。

ぼこりと肥大した上体を、蝙蝠は心持ち後ろにそらす。

了平は、目の前の光景による驚きのあまり動けなかった。

明らかに人間の身体じゃない。何なのだ、あいつは！

「はあああああ！」

蝙蝠は吸い込んだ息を吐き出した。

しかし、吐き出されたのは息だけではない。

鉄も混じっていた。

「何っ!？」

いや、ただの鉄ではない。先のとがった棒　　いやくない、それ

に手裏剣！

殺傷力のある忍具を、蝙蝠は大砲のごとく吐き出したのだ　　！

「う、うおおおおおおお！」

虚刀流当主、鑢七花は、これを身体をちぢこませることで最悪の展開を回避した。

しかし、了平にその策を取れるだけの頭脳は、今のところ無い。

彼は、自身の身体能力がなければできなかったであろうことをやってのけたのだ。

吐き出された手裏剣の数々を、打ち落としたのである（……………

……………）。

「なっ……!？」

今度は蝙蝠が驚く番だった。

こんな防がれ方を、蝙蝠は予想だにできなかったに違いない。

いや、誰も予想できるわけが無かった。行っている本人以外は。

「おおおおおおお!!」

了平はありえない、常人ならかすんで見えるであろうほどの速度のラッシュを放ち続け、ついには。

「極限防ぎ切ったぞー！」

全て、打ち落としてしまった。

本来なら打ち落とすどころか避けることすら不可能なそれを、全て。

「おい。おいおいおい。とんでもねえな、おまえ」

蝙蝠の顔がひきつった。了平を見る目は、理解不可能の獣でも見ているかのようだ。

「やべえやべえ、やば過ぎだったの。とんでもねえわ、おまえ。いや、おまえらって言うべきかな？ 俺ですら驚いちゃったよ。吃驚仰天ってやつだな。まいったな」

「降参するなら今のうちだぞ。俺は無益な殺生は好まん」

「何言っちゃってんの、おまえ」

蝙蝠はにい、と笑った。先程浮かんでいた驚愕は、すでに消え失せている。

「この程度で勝ったつもりになるとは甘え甘え。そこんこはまだまだ餓鬼だな」

そこでふと、蝙蝠の表情が変わった。

「あー、そうかそうか。うん、おまえなら効くわな、この手」

「何を言っている？ 降参さんのなら」

「おまえ、仲間を本気で殴れるか？」

唐突な質問。了平は首を傾げる。

「何だと？」

「できるかもな。けどそれは仲間としての本気だろ？ 敵としての本気じゃねえだろ？ だったらさ、これはどうだ？」

ぐにやり、と、蝙蝠の顔が歪んだ。

いや違う、崩れたのだ。

いやいやそれも違う、変質し始めたのだ。

まるで粘土のごとく顔の 頭そのものの形が変わっていく。頭部だけにとどまらなかった。

身体さえも、骨が歪む音を立てて変質していく。

真庭蝙蝠から、別の誰かへ。

天をつくように逆立った黒髪はごく普通の髪型に。

裂けたような口は薄い唇を持った形に。

不気味さを漂わせていた顔は整った面立ちに。

「!?」

了平は愕然とした。

目の前の状況についていけない。驚きのあまり、声すら出ない。

ただ一言、その姿の本来の持ち主である少年の名前を呟けただけだった。

「ひ、雲雀……?」

その呟きに反応するように、蝙蝠は笑みを浮かべてうそぶいた。

雲雀の顔で。

雲雀の声で。

「これぞ忍法骨肉細工　これを使えば、俺は誰にだってなれる。

おまえの仲間にも、おまえの妹にもな」

「な、何だと……!?!」

「ああ、安心しな。誰にだってなれると言ったが、姿を知ってなきや変身できねえんだ。俺、おまえの妹の顔知らねえし」

蝙蝠はひらひらと手を振った。

「この忍法はあくまで模倣なんだ。創造じゃねえ。違い、解る? それ以前に言うべきじゃねえかな、こういうこと。言うべきじゃないし、言うまでもない。悪いね、俺は接待好きなもんで。ついつい喋り過ぎちまう」

さて、と、蝙蝠は絶刀『鉋』を構え直した。

「再開しようぜ、笹川了平。いい加減決着つけようや。ま、この姿を相手にしてもなお、平静たもってられるんならな　!」

蝙蝠は雲雀の姿のまま、動揺が消えない了平に斬りかかった。



## 第二十八録 各人の戦い（後書き）

1ヶ月もほったらかしてすみませんでしたあ！

一応言いわけのようなものを言っと、最近いそがしかったので、オリジナルの方を定期的に投稿するのがせいっぱいだったんです。多分次も1ヶ月ほったらかしになるんだろうな………；；；では次回！

## 第二十九録 進行

目の前に立ち塞がるのは幾つもの鞭。二つの柄に付いた鞭が幾つなのかはツナには判別できなかったが、そんなことはどうでもいい。問題は、その鞭が自分達を襲っているという事実だけ

「う、うう、うわっ」

ツナは悲鳴を上げて鞭から逃げ回っていた。正確には、ツナを抱えた七花が逃げ回っているのだが。

「真庭鴛鴦か……なるほど、あの時邪魔をしたのは、あいつの鞭だったんだな」

「冷静に分析してる場合ですかー！」

ツナは七花の発言に絶叫した。先程まで彼に対して感じていた抵抗感は、半ば吹っ飛んでいる。

ツッコミスル、健在だった。

しかしそのツコツミ通り、そんな悠長なことを言っている場合ではない。

回避できてるものの、それ以上の反撃ができない。とても反撃できるような速度ではないのだ。

「七花さん、下ろしてください！二人だったら何とかなるかも」

「……解った。けど下ろす前に戦闘態勢に」

七花がはっとした顔をした。

彼はツナを下ろすことはせず、そのまま後ろに飛び退く。その半瞬後に、彼らがいた地面を火球がうがった。

「こ、今度は何！？」



ツナは七花に抱えられたまま身を固めた。もしや、新手か　！？  
「うふふふふふふふふ……久しぶりね、久しぶりよね、久しぶりだわ！」

いやにテンションの高い声と共に、一人の女が現れた。

派手なかんざしをした、なまめかしい女。袖の無いしのび装束、全身に巻いた太い鎖。

「真庭、朱雀……！」

「ここで会ったが何とやら、殺してやりたいとこだけど、監視が付いててさ」

「監視……？」

「というより、歯止め役だ」

と。静かな声が朱雀の隣に落ちた。

同時に、一人の男が降り立つ。彼を見た七花は、呻き声に似た声を上げた。

「真庭鳳凰……！」

「朱雀の言にのっとって言うなら、久しいな、虚刀流」

男　真庭鳳凰はじつと七花を見据えた。

抱えられたままのツナは、初めて見た鳳凰の容姿に少なからず驚く。

今まで見た真庭忍軍の面々に比べると、立ち振る舞いというか雰囲気随分違う。

普通　とまではいかないが、何だろう、言いよつたの無い、決定的な差異があるように見える。

それにこの人、誰かに似ているような

ツナの超直感で解るのはここまでだった。

いや、そこまでしか理解する時間が無かったと言っべきか。

「虚刀流、ボンゴレえ！　あたしの忍法『火喰い鳥』で大火傷負ってもらっわよお！」

朱雀の両腕から嵐属性の死ぬ気の炎がまじった火炎が吹き出した。  
「う、おっ……」

七花は慌てたような顔で横に跳ぶ。ツナを抱えているせいでうまく動けないらしい。

次々と来る火炎を避ける七花。だがどれもこれも紙一重であり、ツナはだんだん見てられなくなってきた。

「七花さん、下ろしてください！ 俺も戦いますっ」

「……解った。その代わり、下ろす前に死ぬ気丸ってやつ飲めよ」  
「その心配はいらねーぞ」

この猛攻の中でどう動いたのか、リボーンが七花の肩に飛び乗った。

「俺が死ぬ気弾をツナに撃つ。合図するから、その時にツナを離せ」

「……信用していいのか？」

「何言ってやがる、七花」

リボーンはにやり、と笑った。

「俺は最強の殺し屋だぞ」

「……ははっ、そうだな」

七花は笑うと大きく跳躍力した。

「七花、今だ！」

「おう！」

七花はツナを放り投げた。

ズガンッ

銃声と共に、ツナの身体が落下する。その途中で、ツナの額と両手に大空の炎が宿った。

超死ぬ気モードになったツナは、すぐ近くにいた鳳凰めがけて拳を振り下ろした。しかし鳳凰は、これを半歩下がるだけで避ける。

間髪入れず、鳳凰はツナの脇腹に回し蹴りを放った。それにより、ツナは空中で体勢を崩す。

鳳凰は更に、クナイでツナの腹を突き刺そうとした。

ツナは何とか体勢を立て直し、鳳凰との間合いを取る。鳳凰は追

撃するように、そのクナイを投擲した。

死ぬ気の炎も何もまもっていない攻撃に、ツナは不審に思いながらもそれを受け止める。

やはり近くで見ても、何のへんてつも無いただのクナイだ。

「……なぜだ」

ツナは眉をひそめ、鳳凰を見やった。

「何で死ぬ気の炎を使わないんだ？ おまえ達は死ぬ気の炎を使えるんじゃないのか？」

「あいにく我はちよつとした例外でな、今は使えないのだ」

「使えない……？」

ツナは戸惑った。

てつきり全員が使えると思っていたのに、なぜ？

しかし、考えている暇など無かった。

「無視するなんて、余裕ぶってんじゃねえよ！」

ツナと鳳凰の間に、朱雀が乱暴に割り込んできた。

あまりに唐突な行動にツナは目を剥くが、朱雀は彼の反応など意に介さず鳳凰を振り返る。

「鳳凰、あれの相手はあたしにやらせて、やらせてよ」

「好きにしる」

鳳凰が短く返答すると、朱雀はにんまり笑って飛び上がった。

「ボンゴレえ、あたしに焼き殺されなくなったら本気の炎を出してみな、出してみる！」

「くっ」

炎をまとった腕が頭上に迫る。ツナはそれを避け、空中に逃れた。

だが朱雀は上空に向かって火炎砲を放ってきた。ツナはすかさず零地点突破・改の構えを取る。

だが。

ドゴオオオオオオオオ

「がつ……」

ツナは炎をもろに喰らい、空中でふらりと傾いた。

「馬っ鹿じゃない？ それは死ぬ気の炎だけじゃない、あたし自身の炎も含んでんだよ！ 純粋な死ぬ気の炎じゃない以上、てめえはあたしの炎を吸収できない！」

「な、に……！？」

地面に無様に伏せたツナは目を見開いた。

そんなツナに対し、朱雀はにい、と笑う。

「教えてあげるよボンゴレ！ あたしら裏組幹部は！ 全員が全員異能を持つてる 青龍も玄武も白虎もねえ！」

ざらり、と朱雀の瞳が輝いた。

「覚悟しときな、ボンゴレ。死にたくなけりや本気の一撃をあたしに見せな！」

「おぬしは戦わないのか？」

鳳凰の質問に、彼の目の前に立ったりリボーンは顔を上げた。

「おめーこそ戦わねーのか？」

「沢田綱吉にも言ったがな、我は現在死ぬ気の炎を使えぬ。あいにく、指環の持ち合わせが無くてな」

「なるほど」

リボーンは頷きつつ、横目で七花を見やった。

彼は現在、真庭鴛鴦と戦っている。だが、うまく間合いを詰められずに苦戦しているようだ。

自分の銃ならと最初は思ったが、早々に無理だと悟った。

鴛鴦の鞭の結界には、目に見えない死ぬ気の炎が二重に張られていたのだ。

結界の外に一重、結界の中に一重。

一つだけなら何とかなったかもしれないが、二重では破るのは難しい。しかも鞭を振ることが、死ぬ気の炎を張り直すことになって

いるようだ。

いくら七花とはいえ、あのような戦法を取られては手も足も出ないだろう。

「……俺はおめーと話がしたくてな」

リボーンは七花から目を離し、鳳凰を見据えた。

「おめー、一体何が目的だ？」

「何も」

返答ははっきりとした、少し意外なものだった。

「我　我らは何の目的も持たぬ。あくまで我らは、任務を達成するのみ」

「トウリニセツテを狙っているくせに、何の目的も持たないって言うのか」

「ああ。しのびとはそういうものだよ。何の目的も持たず、何の野望も待たぬ。それがしのびの生き様だ」

「しのびは生きて死ぬだけ　か？」

「そうだ」

リボーンがいつぞやの鳳凰の台詞を口にする、彼は頷いた。

「……なら、なぜボンゴレリングを奪った」

「それは守秘義務というものだよ。答えられる範囲外だ。……もつとも、いずれ知ることになるから少し教えてやろう」

鳳凰はほんの少しだけ唇を緩めた。

「ある男の依頼だよ。利害が一致したのでな、現在協力体制にある」  
「生き返ってそうそうにご苦労だな」

「いや　むしろ我らは、その男に協力するために生き返ったようなものなのだよ」

「……何？」

リボーンは眉をひそめる。

「どういうことだ？」

「その男と青龍が一種の契約を交わしてな、それゆえ我らの力が必要となったのだ」

「……それは、おまえらの時代の人間か？」  
「否」

鳳凰は首を横に振った。

「もつと先　数百年後の世界の住人だ」  
「数百年後？」

「我らはその男を、『白い男』と呼んでおる」  
「白い……っ!？」

白い男。

その色で連想される人間は、一人しかいない。

未来をめちやくちやにした男。

ボンゴレを潰した男。

俺達の大空を奪った男　　！

「十代目！　リボーンさん！」

らしくもなく固まっていたリボーンは、獄寺の声に我に帰った。

振り返ると、獄寺と右衛門左衛門が走ってくるのが見えた。その後ろには、山本と錆もいる。

「おや、援軍が来てしまったか」

鳳凰はのんびりとした口調でそう言った。

「ふうむ、困ったな。我一人では何ともならぬ。まあ、いいか」

余裕ある声で呟く。

「こちら、間に合った」

「何……!？」

リボーンは身を乗り出す直前だった。

ドンッ

大きな振動が、辺りを揺らした。

「なかなかいい身体じゃねえか。細身のくせして筋肉がしっかりついてやがる。鉄の棒振り回すにや、ちいと華奢過ぎると思ってただけだな　きゃはきゃは、いやしかし、最強だけあって本当いい身体してるよな。なあ、笹川了平」

真庭蝙蝠はそう言って、了平の方を見やった。

雲雀の顔で。雲雀の声で。

一方、了平は息を荒げていた。

雲雀の姿に変身した蝙蝠に攻撃を与えあぐねているというのもあるが、何より、蝙蝠の動きと姿が一致していないというのもある。雲雀が絶対にしないだろう動きや笑い方。それらが、了平の中で噛み合わないのだ。ようは戸惑っているのである。

それに　蝙蝠の使う刀も厄介だ。

確か、絶刀『鉋』と言ったか。了平がいくら拳を叩き付けても、ひびすら入らなかった。

了平は七花から聞いた絶刀の性質を忘れてしまっていたが、少し戦えば理解できる。

あの刀が、絶対的かつ圧倒的な硬さを持っていることに。

無論絶刀はともかく、それを持つ蝙蝠の腕は了平の拳の威力のせいでしびれ、感覚が無くなっているはずだが、そんな様子は全く無い。

雲雀は細身の割にかなりの筋力を有していたはずだから、もしか筋力まで写し取っているのだろうか。

「くそっ……まさかこのような苦境に立たされようとは……！」

「嘆くなよ。今の俺は姿だけじゃねえ、筋力から腕力から脚力まで全て最強だっという雲雀恭弥と同じなんだからよ。ま、戦闘能力に關しちゃ写し取れないから、そこは経験で補っているがね」

蝙蝠はそう言ってきゃはきゃはと笑った。

「ぶつ殺させてもらうぜ、笹川了平。悪く思うなよ、これも任務だ」  
「いや！ 極限俺はこの程度でやられはせんぞー！」  
「そうかよ。ま、言ってな」

蝙蝠は肩をすくめて、絶刀を振り上げた。  
が。

ドンッ

遠くから聞こえた大きな音に、その動きは止まる。  
了平も、その音に驚いていた。

何だ、今の 爆発のような音は。

「……ふうん。成功ってことか。きやはきやは、狂犬の言う通りつ  
てとこかな。そうなってくると、俺はこいつをぶつ殺すべきか、放  
つて置くべきか」

「おい」

了平は、蝙蝠の言葉に眉をひそめた。

「貴様、何か知ってるのか？」

「あん？」

「極限さっきの爆発音のことだ！ 一体何なのだ！？」

「んー、ま、どうせ近い内に知っちゃうだろうし、冥土の土産に教  
えてやるよ。『冥土の蝙蝠』の名に乗っ取ってな」

きやは、と蝙蝠は笑い、絶刀を肩に担いだ。構えを解いた形にな  
るのだが、付け入る隙は全く無かった。

元より、そんな卑怯な手を了平が使えるはずもない。

「今のはな、俺達の目的の一環だよ」

「目的だと？」

「いや、俺達つて言うのは正しくねえ、正鵠を射てねえ。ある男の  
目的を、俺達は任務という名目で手伝ってんだ。今の音は、その男  
の計画が一段落した証」

「その男とは誰だ！？」



「んなもん自分の目で確かめろよ。言っただって信じねえだろうしん？」

蝙蝠はふと、視線を横に向けた。つられて、了平もそちらを見る。何も無いじゃないかと了平が思った瞬間

「ああ、畜生！」

悪態をつきながら、真庭狂犬が姿を現した。

了平はクローム、と呼びそうになって口をつぐむ。

今更ながら、彼女がクロームではないこと思い出し、そして感じたからだ。

クロームはあんなことは言わない。それは、よく理解していることだ。

「どうした？ 狂犬」

「どうしたもこうしたも って、げ。あんたなんて姿してんのよ！」

「いやあ、こいつの動揺誘おうと思ってさ」

「現在進行形でその姿の奴に追われてるあたしの身になりなさいよ！」

むちゃくちゃな言い分だった。

……うん？ 現在進行形？ その姿？

「もしか、雲雀が来ているのか！？」

了平の大声に、狂犬は盛大に顔を歪めた。嫌なものを見た、と言わんばかりに。

一方、蝙蝠の方は冷静 というよりお気楽だった。

「しゃあねえ。んじゃ、こいつをぶつ殺すのはまた今度にすっか」

「早く行くわよ。どうせ、これからやること増えんだからさ」

狂犬のせかす声に、蝙蝠はへいへいと応じる。

そして 二人して消えた。

「つな……！？」

勿論人間が急に消えるわけがない。結論を言えば、二人は予備動作も無く走り去ったのだが

「ぬおおお！？ 極限どこ行つたあ！！」

了平は全く理解していなかった。

ボクサーと忍者、どちらが速いかなど誰の目にも明らかである。それゆえ了平には見えなかったし、だからこそ理解できないのはしかたがないだろうが。

「……何やってんの、君」

だが、性懲りもなく辺りを見渡し続ける了平の様子は、この場に現れた雲雀にはさぞかし奇異に映ったことだろう。

途中で会ったのか彼の後ろにはベルフェゴールとバジルがおり、珍しい組み合わせに了平は目を瞬いた。

「雲雀……随分珍しい奴らと行軍してるな」

「さつき偶然鉢合わせしたんだよ。それより、真庭狂犬がこっちに来なかったかい？」

雲雀が視線を辺りに漂わせながら尋ねた。

「さつき、真庭蝙蝠と一緒に消えてしまったぞ」

「人が消えるわけないだろ」

ツッコんだ。ボケもしないがツッコミもしない雲雀がツッコんだ。

「大方逃げたんだろうね……ちっ」

舌打ちのオプションまで付いた。相当機嫌が悪いらしい。

「真庭狂犬を捕まえてクローム殿を助けようとしたのですが、失敗してしまいましたね」

「俺とエース君はそんなこと考えてなかったけどなー」

悔しそうなバジルに対し、ベルは気楽そうな雰囲気で肩をすくめた。

「それよりさっきの爆発なんだよ。爆弾少年のダイナマイトか？」

「いや……真庭蝙蝠が何か言っていたな……」

了平の呟きに、三人の視線がいつせいに集まる。無言でその内容を尋ねているのだろう。

が。

「だが、極限に忘れたー！！」

『……』

ああやっぱり……そう思った三人だった。

「う、くう……！？」

ジョットが突然膝をついた。

白蘭とかいう男の部下らしい敵の攻撃を受けた　わけではない。  
彼は終始敵を圧倒しており、服に触らせもしなかったのだから。

それなのに、急に顔を歪め、苦しみ出すなんて……

「ちよつと、ジョット！？」

否定姫はジョットに駆け寄り、彼の背に触れた。

「あれ？　どうしたのかな」

白蘭がにこにこ笑いながら、しかし不思議そうにジョットを見つめた。味方の大半が倒されてしまったことはどうでもいいらしい。

「怪我　じゃあないね。何が……お」

白蘭はふと自身の指環を見つめた。

「……ふふ。どうやらうまくやったようだね」

「何言つて……！？」

否定姫は目を見開いた。

白蘭の指環から、橙色の炎が吹き出し始めたのだ。

「やるじゃないか、彼らも。ま、期待してたけどねー。さあて」

白蘭は懷から、一輪の花を取り出した。

青い花びらの花。

青い、彼岸花だった。

「そ、それって七花君が触れた！？」

「そう。『地獄花』って言うんだってさ。綺麗だよー。綺麗なだけじゃなくて、凄いだよ」

白蘭はそう言っで、彼岸花を炎で燃やし始めた。

「こうすると、繋がるんだ」

「繋がるって何がよ？」

「決まってるじゃないか」

白蘭はにっこり微笑んだ。

「この時代と、七花君が飛ばされた時代が、だよ」

## 第二十九録 進行（後書き）

一ヶ月もほったらかしですみませんでしたあああ！（絶叫）

しかも時間かけた割には低クオリティという……自分の才能の無さに涙出そう。文才と発想力欲しいです。

次回、とうとう真庭忍軍の目的が明かされます。そしてやっと否定姫とジョットが本格的に出てきます。

日にちとかおかしくない？と思う人もいると思うので補足しますと、七花達の時代とツナ達の時代では時間の流れがずれてるんです。しかも不安定だから一日早かったり遅かったりしてます。補足終わり。

では次回！

### 第三十録 再会

何が起きたのか解らなかった。

目の前の事実を理解するには時間が足らなかったし、何より、彼の脳の許容量を越えていた。

それは、同じような状況に置かれてしまった彼らも同じだったろう。

すなわち

リボーン。

山本武。

左右田右衛門左衛門。

鏑白兵。

四人も 同じに違いない。

ああ、本当に、どういうことなんだ。

こんなことがあるものか。

「やあ、沢田綱吉くん」

こんなことが、あつてたまるか。

久しくその姿を見た気がした。

実際ツナが彼女を見たのは一度きりだ。京子達が襲われたという報告を聞いていたため二度会った気がしていたが、実際こうして彼女が目の前に姿を現したのは、これで二度目なのだ。

やっと、二度目。

「よう、ボンゴレ。こんにちは、こんばんは、いや久し振り、か。真庭青龍だよーん」

そんなふざけた台詞と共に、彼女はツナの目の前に立った。

無防備に。

無警戒に。

今まさに、Xバーナーを放とうとしたツナの目の前に。

もう少し現れるのが早ければ、ツナは放つのを止められただろう。だが、青龍が現れたのは、Xバーナーを放つ直前だった。

「よ、避けっ……」

その言葉は、遅い。

ドンッ

Xバーナーは、放たれた。もう取り返しはつかない。炎で全身を包んだ朱雀に当てるはずが、防御零だろう青龍に当たってしまった。

ツナは青ざめ、炎の放出を途中で止めた。勿論、それも遅い。だが。

「おまえの炎、使わせてもらっぜ」

それは、杞憂だった。

いや、杞憂などという言葉はふさわしくない。

それは 最悪だった。

「……え？」

ツナは目を見開いて青龍を見た。

正確には、青龍の持つ、青い彼岸花を。

青い彼岸花。彼女の忍法『地獄華』。死者を生き返らせ、生者を異界へ送る忍法。

その副産物と言うべき彼岸花に、死ぬ気の炎が吸われた。

まるで栄養を獲得するように、ツナの死ぬ気の炎を残らず吸い尽くした。

「……ん。おー、さすがボンゴレ」

青龍は彼岸花を見つめて感嘆の声を上げた。

彼岸花は燃えずそのまま存在している。いや、端は焦げていたが、その形は元の形をとどめたままである。

「途中でやめちまいやがったのにとんでもねえ炎だ。ふん……驚き、不安、いや恐れ、か？　そういうもんを抱いちゃうよ」

「な、何を言ってる？」

ツナは震える声をしぼり出した。

どうしてXバーナーが吸われてしまったんだ。あの彼岸花はなぜ、死ぬ気の炎を吸ったんだ。一体何をするつもりなんだ……！

「せつかくだ、教えてやろう」

青龍はくるりと彼岸花を手の中で回した。

「ツナ、大丈夫か！？」

と。背後からの声にツナは振り返った。山本が鎧と一緒に駆け寄ってくる。

「無事だ……だけど」

ツナは視線を青龍に戻した。

「青龍、一体何が目的なんだ」

「勿論教えるさ。教えたって構わねえ」

青龍はくすくすと笑った。その傍らに、鳳凰が立つ。その姿は、青龍同様酷く無防備だ。

「俺の忍法『地獄華』は生者を異界へ飛ばす忍法だつてのは前に話したな？　だが、実はこれ最近知った力な上実に限定的でな」

「限定的？」

「俺が知ってる世界でなくちゃ移動できねえんだ。つまり移動できるのは、前世で生きてたパラレルワールドの過去と、この時代だけなんだ。ここまではいいか？」

「……確かに、限定的だな」

ひよい、とりボンがツナの肩に乗った。

「で、それが今の現象とどう繋がる？」



「せかすなよ。……これを聞いた『ある男』は、一つの仮説を立てた。これを使って、その二つの世界を繋げることはできないかってな」

青龍は彼岸花をかかげた。

「研究の結果、それが可能だということは解ったんだが……あるものが必要だったんだ」

「あるもの？」

「死ぬ気の炎だ」

ボオッ

彼岸花が燃え上がった。

「しかもトウリニセツテの天空の炎じゃなくちゃいけねえ。全く、こっちには一つしかねえってのに」

「一つ？」

ツナは眉をひそめた。

一つ、とはどういうことだ？　そもそも『ある男』とは一体誰なんだ。

だが、考える暇など無かった。

燃え尽きた彼岸花からあふれ出した天空の炎が、急にうずまき始めたのだ。

「つとお？」

青龍は目を丸くした。予定外なことが起きた、と言いたげに。

「あーあ。失敗だな、こりゃ。鳳凰、離れんぞ」

「ふむ？　……ああ、あちらの炎が足らなかったのか」  
鳳凰は一つ頷き、青龍を抱きかかえて後ろに跳んだ。

それを追いかけようとツナは一步踏み出す。視線の端では、同じことをしようとしたのか右衛門左衛門が前に出ていた。

けれどそれらの動作は全て遅く、何もかもが遅く、どうしようも無く遅く、そして遅かったのだ。

それを悟るのは。

ドンッ

目もくらむような炎の爆発が起こった後だった。

何が起こったのかはすぐには解らなかった。

ただツナは、自分が炎の爆発に巻き込まれたことは理解する。

あれだけ近くにいたのだ。巻き込まれて当然だろう。

だが問題は、あの爆発に巻き込まれたのは自分だけか否か、ということだ。

自分以外に巻き込まれた人間がいるならば一体誰か　爆炎に包まれながらツナは考える。

否、爆炎など無かった。

どころか、痛みも何も無かった。

ただ、浮遊感が全身にまわりついている。

この感覚は、確か前にも感じたことがあるはずだ。けれど、一体どこで

考えた末に気付く。

そうだ。この感じは、十年バズーカに撃たれた時と同じ感覚なんだ。

けれど、あの爆発に巻き込まれてどうして十年バズーカと同じ感覚になるんだ。それになぜか、感覚の間隔が長いような

「いでっ！」

ツナは突然地面に投げ出され、小さな悲鳴を上げた。

超死ぬ気モードはすでに解除されてしまっており、通常状態に戻

っている。戦うためには、もう一度死ぬ気丸を飲まねばなるまい。

いや、それより。

「ここは……？」

辺りを見渡す。自分が今いるのが先ほどまでの場所ではないと、ようやく気付いた。

木々が並んでいる。それだけならさつきと変わらない。

けれど、その場所の木々は、妙に密集していた。

ツナの三メートルほど先に木々が生えている。さつきまで戦っていた場所はかなり開けた場所で、一番近くの木で十メートル離れていたのに……

「ていうか、ここ森！？」

ようやく現在の居場所がどこかを理解し、ツナはがばっと起き上がる。それとほぼ同時に、後ろで重いものが落ちる音が聞こえた。

合計で三つ。

ツナは振り返り、目を丸くした。

後ろにいたのは短く切った黒髪の少年に洋装仮面の男、そして女と見まごうような美貌の青年。

つまり、山本と右衛門左衛門、そして錆だった。

なぜ三人がここにいいのか。まさか彼らもあの爆発に巻き込まれたのか。なら

ツナはそれぞれ起き上がり始めた三人に声をかけようとした。しかし、それははばまれることになる。

「邪魔だぞ」

「ぶふう！？」

家庭教師の、容赦無い脳天からの攻撃によって。

彼からすればたまたま落ちた場所にツナの頭があったという形なのだが、ツナからしてみれば理不尽な暴力である。

というか、第三者から見てもそうだ。事実、後ろの三人は引き気

味な表情をしていた。

「何だ、ここ。さっきまでの場所とは違うな」

傍らで頭を押さえてもだえる生徒に目もくれず、リボーンは辺りを見渡した。

そんな、一瞬にしてコントのような空気が流れる中で、彼は言った。

「やあ、沢田綱吉くん」

どくり、と心臓が動いた。いや、動かなくなっただろうか。

どちらでもよかったし、どちらにしたところで彼の存在を打ち消すことはできなかった。

顔を上げ、正面を見る。身体も正面に向け、座り込んだ状態で彼と向き合う。

「……嘘」

ツナは言葉を失った。

少し離れたその場所。正面。そこに、白い男が立っていた。

白い、ぼさぼさの髪。顔に張り付いたにやかな笑み。服は白い洋服ではなく薄紫色の着物になっているが、間違い無い。

「な、何で、白蘭が……」

「あはは 何でって言われてもねえ、僕からしたら、君達がいるのが何で？ って感じなんだけど」

白い男 もとい白蘭は、にこにこことツナ達を眺めた。

「リボーン君や山本くんも久しぶりで、そっちは 錆白兵クンに左右田右衛門左衛門くんだね。君達には初めましてかな」

「おぬしは…… 一体」

「どうやら 味方ではないようだが」

背後の動く気配に、ツナは振り返る。錆と右衛門左衛門は立ち上がっていた。しかし構えるのをためらっているのか、薄刀と炎刀は下を向いている。

「沢田綱吉　彼は、一体何だ？」

右衛門左衛門の問いに、ツナは答えられない。

白蘭は何なのか。この白蘭は一体何なのか。確かに白蘭はあの時消滅したはずなのに。

これは確実だ。なんせ、彼を消滅させたのは他ならぬツナだからだ。

悪夢を見ているような感覚だった。悪夢よりたちが悪いのは、これが現実だという点だ。

「何か、ねえ。そうだな、とりあえず黒幕とでも言っておこうかな」  
白蘭はふふ、と笑った。

「単刀直入に言っておこう。僕が真庭忍軍を使って今までの戦いを引き起こした」

「……何だと？」

「君達を青龍ちゃんに頼んで生き返らせたのも、変体刀やボンゴレリングを狙わせたのも、ゼーんぶ僕なんだ」

「おーいおい、白蘭さんよ」  
と。声がかかった。

女の声だ。そして声と共に現れたのは、そでの無いしのび装束に全身に太い鎖を巻いた着用した少女。

「あ、青龍ちゃん」

白蘭に笑顔向けられ、少女　青龍は苦笑めいたものを浮かべていた。

どんな状況でも笑顔でいるのがこの少女のモットーらしい。

「のんき、お気楽、いやおちゃらけ、か？　何にしても笑ってんじやねえよ。こいつらがここに来ちまったの　つつか、こことあっちが繋がらなかったの、おまえの炎が弱かったせいなんだからな」

「あはは、ごめんごめん。よくよく考えたら、こつちで僕が本気出せるはずが無かったねえ」

白蘭は肩をすくめ、ツナを見た。いや、自分達ではない。自分達の向こう側を見ている？



リボーンは答えない。ツナの頭から降りた時の体勢のまま、突っ立っている。様子がおかしいのでツナは再び声をかけようと

「久しいわね」

その声に、ツナは振り返る。

声の主は先程の金髪碧眼の女性であり、声の向けられている先は右衛門左衛門だった。

右衛門左衛門は、仮面で隠れた瞳を女性に向けている。

「あんたはあの時死んだし、死体をあたし直々に確認した。だから、少なくとも一度、あんたが死んだことは確かよ。けれど、そうね」

女性は鎧を見、ツナ達を見、そして再び右衛門左衛門を見た。そして懐から鉄扇を取り出す。

ばんつ、とその鉄扇を勢いよく開いた彼女の顔は、笑っていた。

「あんたの死、否定してあげるわ」

「……ありがとうございます」

右衛門左衛門はそう言っ、女性にかしづいた。

驚くツナ達を尻目に、右衛門左衛門は頭を深く下げる。

「お久しぶりです　姫様」

沢田綱吉とジヨット、否定姫と左右田右衛門左衛門、再会。

これが更に物語を加速させることになるうとは　彼らは知るよしも無かった。

### 第三十録 再会（後書き）

今回は早めに投稿できてよかったです。

でもスピード重視で書いた分、内容わけが解らない形に……；；  
とりあえずツナ、リボン、山本、右衛門左衛門、鑄の五人が刀  
語の世界に。もうちょっと現状説明書き込んでおけばよかったな……  
では次回！



## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n8404p/>

---

花炎異聞録

2011年12月21日15時46分発行